

建築と 社会

Architecture and Society

01

2017

No.1138

Vol. 98

日本建築協会

特集

ニュータウンから学ぶ
これからの「計画」

電100

since 1917.03.30

日本建築協会は創立100周年を迎えます

実績より 検証。

免震EXPの開発では可動試験による**検証**を重視。
確実かつ**安心**で**高品質**な製品をご提供します。

自社で開発した3次元振動台を使用し、正弦波加振や地震応答波加振等での可動試験を行い、性能指標A種を満たす製品開発や物件対応を実施しています。また、物件にふさわしい製品をお届けしたいというポリシーの下、お客様がご希望であれば実際に製品の可動性能をご確認いただける場を設けており、製品の性能を直にご理解いただく取り組みも行っています。

- ① 免震EXPガイドライン[(一社)日本免震構造協会発行]に基づく、性能指標A種を満たす **確実** な製品
- ② お客様の目の前で可動試験を行い、**検証** した **安心** な製品
- ③ 3軸振動台を使用した可動実験での結果を基に、幾度となく改良を加えた **高品質** な製品

これが、愚直なまでに性能向上を追い求める開発姿勢の中から生まれた、私たちの製品です。



▲免震エキスパンションジョイント M シリーズ
施工例「天童市庁舎」

【装置概要】

- A・Bテーブルサイズは共に2,000mm×2,000mm、試験体取付穴は150mm間隔で固定可能となっています。
- 装置は、“免震エキスパンションガイドライン”の試験がすべて実験できる機械です。

【装置性能】

— X・Y軸	有効ストローク：	±1,000 mm
	最大駆動周波数：	4.0 Hz [振幅は±15.5mm]
	最大速度：	100 kine [1,000mm/sec]
	最大加速度：	1 G [9.8m/sec ² (980Gal)]
	積載重量：	2 ton [2,000kg]
— Z軸	有効ストローク：	±70 mm ※ただし、開きを要する場合は±30mm
	有効傾斜角度：	±2 ° [Rx, Ry 共通]
	最大駆動周波数：	10.0 Hz [振幅は±5mm]
	最大速度：	31.4 kine [314mm/sec]
	最大加速度：	2 G [19.7m/sec ² (1,960Gal)]
	積載重量：	1 ton [1,000kg]

【装置試験可能項目】

- 正弦波運動(X, Y, Z)→上記、最大性能範囲内での正弦波運動
※Z軸に関しては静的傾斜後、正弦波運動となります。
- 円運動
- ヘリカル運動(X・Y:円運動+Z:正弦波運動)
- 斜め運動
- 地震応答波(免震構造協会が定める±600mmを基準とした地震応答波)
- その他:お客様のご希望の地震波等、データを提供いただければ、弊社でプログラムを作成し、検証実験を行うことが可能です。
※データ形式は xls, csv, txt でお願いします。

『E-CUBE』

自社で開発した3次元振動台

井上商事株式会社

<https://www.inoue-s.co.jp/>

2017年を迎えて

一般社団法人 日本建築協会 会長 香西喜八郎

新年あけましておめでとうございます。

昨年も大きな出来事が数多くありましたが、その中でも最大級のニュースはアメリカ大統領選ではないでしょうか。当初泡沫候補といわれたトランプ氏が大方の予想を覆し勝利しました。政治、経済に過激な発言が目立つトランプ氏ですが、中でもTPP（環太平洋パートナーシップ）からの離脱表明に世界は大きな衝撃を受けました。

TPPの交渉参加国は日本をはじめアメリカなど12カ国、世界のGDPの4割を占め、日本にとってアジア・太平洋地域の成長を取り込むための成長戦略の柱と言われています。建設業や不動産業のビジネスチャンス到来と期待されており、我々建築や建設業に携る者にとって、アメリカ次期政権の動きには目が離せません。

さて、1917年（大正6年）に設立された日本建築協会は、3月30日に創立100周年を迎えます。まちづくりに燃えた片岡安ら建築界のリーダー達は、「我が国の建築界の堅実な発展」を目指して関西建築協会を設立し、2年後日本建築協会へと改名しました。健康で文化的なまちづくりが建築家の責務である事を認識していた彼等は、日本建築協会に建築家を結集し、建築と社会をつなぐ場、実践力のある組織として活動しました。その後、建築関係の行政・教育・研究・設計・施工・建材・販売に携わる個人や法人を等しく正会員とし、相互の交流と研鑽により専門家として各々の役割を発揮してまいりました。そして今日、講習会・講演会・見学会・出版・各種の顕彰等の活動を通じて建築に関わる技術の向上と、健全で文化的な社会の形成に貢献する団体として発展してきました。

現代はグローバルで多様性を孕む時代です。多発する自然災害とその復興、持続可能な地球環境の維持、歴史や文化遺産の再評価と活用などさまざまな社会の要請に対して、私たち建築人は応えてゆかなければなりません。こうした今、さまざまな職能の会員が集う本協会の社会的役割を改めて見いだせるのではないのでしょうか。その一つとして次世代を担う人材の育成は、建築と社会をつなぐ結節点の役割を担う日本建築協会のテーマでもあり喫緊の課題です。U35（35歳以下の会員）の活動や青年技術者、工高生デザインコンクールの顕彰、若い研究者の発言の場の提供等を強化し「新しい地平」を目指してまいります。

最近、レガシー（遺産）という言葉をよく耳にします。日本建築協会には先人達がこの100年間培ってきた伝統や歴史、実績など優れたレガシーがあります。これらを次世代へ引き継ぐとともに、未来に向けての大切なスタートの年にしたいと考えています。創立記念日当日に大阪市中央公会堂で開催する「記念式典」は、今までの100年を祝うとともにこれからの100年を展望するよい機会です。会員の皆様にはぜひご参集賜りますようお願いいたします。

この新しい年が皆さんにとっても素晴らしい年でありますよう祈念いたしまして、私からの年頭の挨拶とさせていただきます。

日本建築協会・常設委員会

本年の抱負

編集委員会

開かれた言論・情報発信のプラットフォームに

編集委員長

勝山太郎

建築協会は今年3月で創立100周年を迎えます。設立当初から発行され、協会の歴史と共に歩んできた会誌「建築と社会」は「建築を通じて社会に貢献する」という理念のもと、創刊当初より建築作品や建築技術の発表の場のみならず、言論を通じて社会的提言も行うオピニオン誌として発展してきました。現在も、毎号、各委員会が立案するテーマ毎に、とても読み応えのある論考が集まり、建築と社会の関係を多面的に掘り下げている点で他の雑誌にはない、大変貴重な価値を持つ会誌であると言えます。一

方で創刊からの100年間に於いて、建築と社会の関係は大きく変化しています。節目になる今年は、100年を振り返りながら、これからの建築と社会の関係を見据える企画や、様々な世代や色々の立場の方々が広く参加して頂ける言論のプラットフォームを目指した新たな取り組みも行っていく予定です。次の時代も皆様を繋ぐ会誌として広い役割を果たしていきたいと思いますので、建築作品・論考・活動報告のご投稿、或いは企画についてのご意見など、積極的なご参加を是非お願いいたします。

事業委員会

ひろげましょう交流のBA

事業委員長

児玉 謙

およそ100年前の総会の写真が残っています。中央公会堂は完成したばかり、蝶ネクタイを締めた紳士たちがずらりと並んで晩餐会をしている様子です。「建築を通じて社会に貢献する」意志と優雅さが伝わってくるようです。それからの100年、建築と社会はいくつもの、まさに激動の時代を乗り越えることとなりました。本会に領域を超えて集まれた先人たちの真摯な視座と積み重ねられた温故知新にあらためて敬意を抱きます。さて次の世紀、本会はグローバル化とともに「新しい地平」を目指します。記念シンポジウムは次世代を担うU-35小委員会の企

画。「Architecture & Society—Architect in Society」と題し、海外で活躍するU-35世代とともに「建築と社会」の未来を考えます。ゲストはホーチミンからヴォ・チョン・ギアの澤 秀俊さん、香港からヘルツォーク・ド・ムーロンの小室 舞さん、ストックホルムからテキスタイルデザイナーの森山 茜さん、バルセロナから建築家の吉村有司さん、そして大阪のU-35メンバー。彼らの挑むSocietyは何が異なり、何が共有されるのでしょうか。とても楽しみです。100周年おめでとうございます。まずは中央公会堂をいっぱいにしましょう！

出版委員会

今後も、時代に応じた建築と社会をつなぐ書籍の提供を

出版委員長

西 博康

日本建築協会は、今年で100年を迎えます。出版委員会においては、1949年から、「実際に役立つ鋼構造の計算」「地震とその対策の常識」を発刊以来、155冊の作品を創出して参りました。その領域は、意匠・構造・電気・設備・積算・施工・法規・係争・保全・外構・庭園など多岐にわたり、建築と社会をつないで参りました。1984年からは、「プロのノウハウ」シリーズを刊行し、多くの方に親しまれており、出版と合わせて、講習会なども行って参りました。昨年は、「直感で理解する！構造の基本」「建築現場のコンクリート技術」を発刊し、マスコミ等か

らも評価を頂いております。100年目を迎える今年は、建築の基本空間・単位寸法の理解を深める作品や、漏水対策の作品、消防設備に関する作品を予定しています。また、他支部や他の委員会との交流を活性化させ、大阪以外での講習会の企画や新しい作品の制作を行うとともに、建築と電気設備、建築と空調設備といった互いに理解し合う重要なポイントを扱う作品の企画を進めていく予定です。今後とも、皆様に親しまれる作品を作って参ります。よろしくお願い申し上げます。

教育委員会

継続事業を振り返り、新たな展開を期す

教育委員長

山形政昭

100周年記念事業委員会を中心とした準備に当たり、今春を迎えて感慨一入です。この節目に当たり、本委員会の活動を振り返りますと、ご承知のように工高生デザインコンクールと講習会が、戦後期の半世紀を優に超えてつづく2本柱となり今日に至っています。1955年に始まるデザインコンクールの課題には、昭和期の「ガソリンスタンド」「有料道路のゲート」「住宅団地の集会所」、そして平成に入ると「市民ギャラリー」「コンビニエンスストア」「デイサービスセンター」など、世相を映すものが捉えられており、都市の歴史も読み取れます。また、講習会では1957年に始まる「実

務講習会」が定番となり継続実施されていますが、初期にはコンクリートに関する講習会、鉄骨造に関する講習会、さらに歴史に関するものなど、様々な内容も組まれておりました。そしてこの両事業それぞれに、毎回新たな若い世代の応募者、参加者を迎えて、協会活動の門戸ともなっているのも嬉しいことです。これら事業の推進はそれぞれを担当する委員諸氏、そして審査及び講義にあたられる委員の皆様の常に新鮮な発想と熱心な取り組みに支えられています。こうした特色を継ぎつつ、今後の新たな展開を期してゆきたく皆様のご協力をお願い致します。

若き創造者たちへ

「第64回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（平成29年3月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしたとげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第64回青年技術者特集号」（平成29年6月号予定）に掲載する。

6. 提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードして下さい。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等について簡潔にまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限りです。**この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮して下さい。**

7. 提出期限 平成29年3月31日（金）

8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャンダイズ・マートビル7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

E-mail : jigyoka@aaaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 勝山 太郎／㈱日建設計設計部門理事副代表設計部長

委員 岸田 文夫／㈱竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）

佐々木 栄／㈱昭和設計執行役員設計推進室室長

長尾 健／長尾健建築研究所代表

金尾 伊織／京都芸芸繊維大学デザイン・建築学系准教授

山浦 晋弘／㈱安井建築設計事務所構造部長

井村 隆／清水建設㈱関西支店設備設計部副部長

小倉 良友／㈱日建設計エンジニアリング部門

設備設計グループ理事副代表設備設計部長

劔吉 敬／㈱大林組大阪本店建築事業部生産技術部長

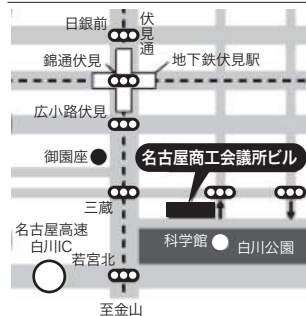
山辻 直樹／大成建設㈱関西支店建築部購買管理室課長

会告 日本建築協会

日本建築協会東海支部主催 建築工事实務講習会

この講習会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
(公社)愛知建築士会 (6単位)
(公社)日本建築家協会 (6単位)

■講習会会場〈名古屋商工会議所ビル〉



日本建築協会中国支部主催 建築工事实務講習会

■講習会会場
(広島工業大学 広島校舎)
・広電市内電車 袋町または中電前下車
・広島バス 平和記念公園前下車



この講習会は、建築CPD情報提供制度プログラムです。
(公社)広島県建築士会 (6単位)
(公社)日本建築家協会 (6単位)

日時：2017年1月25日(水)
9:30~17:00
会場：名古屋商工会議所ビル・9階
(愛知建築士会内)
名古屋市中区栄2-10-19
定員：60名(先着順)
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト当日配布

■申込方法

FAXまたはE-mailにて

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名(フリガナ・年齢)
- ④事業所名
- ⑤申込担当者名
- ⑥電話番号
- ⑦FAX番号
- ⑧E-mailアドレス
- ⑨受講料支払方法(銀行振込等)

受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講番号をE-mailまたはFAXで通知します。なお、日本建築協会東海支部HPから受講申込書のダウンロードができますので、<http://www.aaj-tokai.jp>をご覧ください。

■締切日 2017年1月17日(火)
但し、定員に達し次第締め切ります。

日時：2017年2月16日(木)
9:30~17:00
会場：広島工業大学 広島校舎
広島市中区中島町5-7
定員：60名
受講料：15,000円(含テキスト代 税込)
※テキスト(改訂版)は、当日配布させていただきます。

■申込方法

FAXまたは中国支部へ直接

- ①講習会名
- ②〒・住所
- ③受講者氏名(フリガナ)
- ④事業所名
- ⑤担当責任者
- ⑥電話番号・FAX番号
- ⑦受講料支払方法(銀行振込等)
- ⑧CPDを申請される方は、申請先の団体名をお知らせ下さい。

受講料は前払制となっていますので、併せて銀行振込等で納入して下さい。受講料入金確認後、受講票をお送りいたします。

■申込締切 2017年2月7日(火)
(ただし定員になり次第締切)

■受付時間 9:00~17:00
(土、日、祝除く)

■申込先
(一社)日本建築協会 東海支部
〒460-0008
名古屋市中区栄2-10-19
名古屋商工会議所ビル・9階
(愛知建築士会内)
TEL: 052-201-2201
FAX: 052-201-3601
E-mail: info@aaj-tokai.jp
URL: <http://www.aaj-tokai.jp>

<振込先>

- 三菱東京UFJ銀行
栄町支店(普通 0167157)
シャ)ニホンケンチュウキョウカイトウカシブ
一般社団法人日本建築協会東海支部

■趣旨と内容

- 本講習会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 積算業務では具体例より、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

■申込先
(一社)日本建築協会 中国支部
〒730-0805 広島市中区十日市1-1-9
(相生通り鷹匠ビル4階山陽工業㈱内)
TEL 082-232-6471
FAX 082-291-2233
E-mail: info@aaj-chugoku.jp
URL: <http://www.aaj.or.jp>

<取引銀行>

- 広島銀行
本川支店(普通 3424438)
シャ)ニホンケンチュウキョウカイツウゴクシブ
一般社団法人日本建築協会中国支部

■趣旨と内容

- 本講演会は、官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の技術者を対象としたものです。
- とくに取り付きにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき、講義します。
- 都市環境の変化に伴う法令・基準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では具体例より、その着工準備から完成に至るまでをわかりやすく解説します。

施工計画

日吉 智紀 氏

清水建設㈱名古屋支店
生産技術統括部生産技術グループ主査

適切な施工計画を立案できることが建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

相原 仁史 氏

㈱大林組名古屋支店
建築工事部建築生産技術第一課課長

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、つつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

木原 陽 氏

㈱竹中工務店名古屋支店
見積部建築第1グループ主任

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。

施工計画

井上 昇 氏

清水建設㈱広島支店
工事長

適切な施工計画を立案できることが、建築現場技術者の必須条件です。安全で、経済的な施工計画を解説します。

仮設見積

尾野本 悟 氏

広島工業大学
教授

仮設工事費は、一般には非常に把握しにくい面があって、つつい単位面積当たり、あるいは請負金比率のみで処理されがちです。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

積算業務

横段 隆弘 氏

横段建築事務所

見積業務のなかで基本となるのは、数量積算です。この手順・基準を基本に、より合理的で正確な積算業務を解説します。



日本建築協会 創立100周年

記念事業・記念式典・祝賀会のご案内

日本建築協会は2017（平成29）年3月30日に創立100周年を迎えます。

創立から100年という記念すべき年にあたり、これを意義深いものとするため、3点の「記念誌」を発行するとともに「記念事業」を開催いたしますのでご案内申し上げます。

当日は「100周年記念式典」をはじめ様々な催しを企画しており、事前申し込みが必要ですので、ご希望の方は下記の宛先へメール、ファックスなどでお申込みください。

記

公会堂見学会・記念式典・表彰式・記念講演会・祝賀会・記念パネルディスカッション

2017（平成29）年3月30日（木）11:00~20:15（予定）

於 大阪市中央公会堂 大阪市北区中之島1丁目1番27号

1. 公会堂見学会 11:00~

＜事前申込制＞定員60名（先着順）

講師と共に特別室から地下の免震部分まで見学します。

2. 100周年記念式典・表彰式

13:00~

＜ご招待者の他 自由観覧＞

会 場 大集会室

開会の辞

式 辞 日本建築協会会長

祝 辞

表彰式 創立100周年記念表彰

3. 記念講演会 14:30~

＜事前申込制＞定員1,000名（先着順）

会 場 大集会室

講 師 榎 文彦氏

（榎総合計画事務所）

聞き手 倉方俊輔氏

（建築史家、大阪市立大学准教授）

4. 祝賀会 16:15~

＜参加費 5,000円 事前申込制＞

定員300名（予定）

会 場 中集会室

ビュッフェスタイルの立食パーティ

です。※祝賀会のみ有料の催しです。

ご注意ください！

5. 記念パネルディスカッション

「Architecture & Society / Architect in Society」18:30~

＜事前申込制＞定員1,000名（先着順）

会 場 大集会室

ゲスト 澤 秀俊（建築家 Vo Trong

Nghia Architects/ベトナム）

小室 舞（建築家 Herzog & de Meuron/香港）

森山 茜（テキスタイルデザイナー Studio Akane Moriyama/ストックホルム）

吉村有司（建築家 Ph.D. in Computer science/バルセロナ）

海外で活躍するU-35世代とともに、「建築と社会」の未来を考える

＜申込書＞

参加されるところにチェック✓を入れ必要事項を明記の上、FAX（06-6946-6984）またはメールにてお申し込みください。

内 容	チェック	ふりがな
1. 公会堂見学会		御名前 ☐ 会員 ☐ 非会員（一般）
2. 記念式典・表彰式		ご勤務先
3. 記念講演会		ご住所 〒
4. 祝賀会 ※有料5,000円		TEL FAX
5. 記念パネルディスカッション		E-mail @

＜振込先＞・口座名義 一般社団法人 日本建築協会（シャ）ニホンケンチクキョウカイ

・郵便振替口座 00910-9-39975

・りそな銀行 北浜支店（普通No,272234）

・三菱東京UFJ銀行 瓦町支店（普通No,210054）

・三井住友銀行 大阪中央支店（普通No,860034）

祝賀会参加ご希望の方は2月17日（金）までにお申し込みの上、会費のお振込みをお願いいたします。

＜お問い合わせ＞（一社）日本建築協会 TEL：06-6946-6981 メール soumu@aaaj.or.jp

創立100周年イベント 近代建築見学会 —大阪の都市景観 再見—

この見学会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラム申請中です。
(2単位)

1917(大正6)年に、関西を土壌に
活躍する建築家により「関西建築協会」
として創立された当協会は、2017年
3月30日にいよいよ100周年を迎えま
す。

創立100周年記念のイベントとし
て、近代建築を中心とした建築見学
ウォーキングを企画しました。

第1回中之島WALKはたくさんの方にご
参加いただき、ありがとうございました。
第2回も研究者のみなさまの解説をう
かがいながら、大阪の大動脈御堂筋と
その周辺を歩きます。

資料として特製マップもご用意いたし
ます。

ぜひご参加ください!

第2回—御堂筋WALK

日 時 2017年**1月21日**(土)
13:30~16:00(予定)
受付 13:00~

見 学 先 大阪市役所~淀屋橋~
石原ビル~日生ビル~
大阪ガスビル~北御堂~
船場センタービル~
南御堂~御堂ビル1階

講 師 橋寺知子氏(関西大学准教
授)
倉方俊輔氏(大阪市立大学
准教授)

締 切 2017年**1月13日**(金)

集 合 現地(詳細は参加証に記載)
定 員 30名(予定/先着順)
参 加 費 1,000円(保険料含む)
申込方法 ①催し名

②氏名(フリガナ)

③会員・一般・学生の別

④職場名または学校名

⑤干 住所

⑥連絡先電話番号

⑦CPDを申請される方は申
請先の団体名とID番号

上記項目を明記しFAXまたはE-mailにて
下記までお申し込みください。

申 込 先 日本建築協会(担当:内山)

TEL:06-6946-6981/

FAX:06-6946-6984

E-mail:jigyoka@aaj.or.jp



御堂筋の沿道

建築と社会

Architecture and Society

01

No. 1138

2017

Vol. 98

特集予告

02 03
月 月
号 号
・ 100周年記念特集号(仮)
第23回会員作品 / 私の空間作法

今月の表紙

法起寺・三重塔

(706年頃)



聖徳太子に由来する寺院のひとつで、三重塔は平城京ができる以前の建設で、飛鳥時代の建築である。屋根のラインから欄干など各部ディテールまで、直線的なデザイン。現在、法起寺境内のまわりには田畑が広がっており、民家を含めて建物がほとんどない。在りし日の伽藍のある風景はどんなものであったのだろうか」と想いを馳せる。

表紙写真左部は農家の納屋で、法起寺の三重塔とはその出自も目的も異なる建築であるが、どちらも人が知恵と技術を用いて作りあげた力強い建築である。

(多田正治)

今年から『建築と社会』の表紙では、有名な日本の建築を、歴史に登場した順番にとりあげていきます。普段目にする観光写真ではなく、建築そのものの力強さと繊細さに迫る写真で紹介していきたいと思います。

表紙写真 山羊 昇
企画・編集 多田正治

特集：ニュータウンから学ぶ これからの「計画」

【座談会】

- ニュータウンにみる「計画」の到達点と課題 ―総論にかえて―
| 柏原土郎／演 恵介／星田逸郎／田中直人（司会） 14
- 女性からみたニュータウンの今
| 伊丹絵美子／所 千夏／松田奈緒子／片山和代（司会） 20

【ルポ】

- 「山、海へ行く」神戸のニュータウン 西神住宅団地（西神中央）
西神南ニュータウン 神戸研究学園都市 須磨ニュータウン
ポートアイランド 六甲アイランド | 田中直人 24
- 芦屋浜シーサイドタウンに行く | 田中直人 29
- 南港ポートタウンについて | 赤尾大樹 30
- バブル経済の崩壊に伴って計画とは大きく異なった「りんくうタウン」
| 増田 昇 30
- 千里ニュータウンの計画が遺したもの | 吉村英祐 31
- まちづくりルールが進める住環境デザイン 千里ニュータウン
| 守井 辰 32
- 走って暮らせる街 千里ニュータウン | 飯田 匡 32
- 「変わらない」ニュータウン 泉北ニュータウン | 鈴木克彦 34
- 近隣住区をこえる計画へ 洛西ニュータウン | 安枝英俊 34
- ニュータウン再生の鍵となる分譲マンション団地の更新 明舞団地
| 守井 辰 35
- テーマタウンのこれから 北摂三田ニュータウン | 松田奈緒子 36

年頭の言葉	香西喜八郎	1
本年の抱負	常設委員会 勝山太郎・児玉 謙・西 博康・山形政昭	2
連載	会告	第64回青年技術者顕彰のご案内 3 平成28年度建築工事実務講習会（中国支部・東海支部） 4 日本建築協会創立100周年 記念事業・記念式典・祝賀会のご案内 5 近代建築見学会 一大阪の都市景観 再見一 6
	作品作風	山陰中央テレビ新社屋 8 ポートレース鳴門 新スタンド 10
	gallery	風景になる場所づくり 林 知充 12
	法令コーナー	自分らしい暮らし「泉北スタイル」の実現 ーリノベーションによる泉北ニュータウンへの 若年世代の居住促進ー 平井葉子 37
	建築と社会を考える	建築と高齢化 住宅と施設のマネジメント 森 一彦 38
構造の頁	京都木材会館～日本初 2 時間耐火部材による 木造 4 階建てビル～ 安達広幸 伊藤克彦	42
	入賞発表	第62回工高生デザインコンクール 43
information	アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国／しりあがり寿の現代美術 回・転・展／特別展 台北 國立故宮博物院ー北宋汝窯青磁水仙盆／特別展 春日大社 千年の至宝／平成28年度建設リサイクル法説明会（第2回）開催のお知らせ	50
	新製品レヴュー	免震エキスパンションジョイントカバーMシリーズ ～JSSIガイドラインに沿った可動試験で検証 全製品で A種性能を実現～ 井上商事株式会社 52
Member's Forum	大徳寺 真珠庵（庭玉軒）と 聚光院（閑隠席・柵床席）を拝見して 上田壽子	54
月間の動き	平成28年11月	60



大橋川に面したのびやかな庇と鉄塔



内外をつなぐ「ソリとムクリ」のあるダイナミックな木ルーパー天井

山陰中央テレビ新社屋

建 築 主 山陰中央テレビジョン放送株式会社
 設計・監理 日建設計
 施 工 清水建設・松江土建・カナツ技建工業・まるなか建設
 共同企業体

計画地は宍道湖から流れ出る大橋川に面し、大山や宍道湖を望むことができる。この大橋川と一体となった良好な外部空間を建物の中へ取り込むことと、放送局の機能・セキュリティとの両立を具現化すべく、「魅せる」「結ぶ」「創る」をデザインコンセプトとして設計に臨んだ。

■敷地の南北、それぞれの周辺環境に応じた「魅せる」外観

南側の大橋川の雄大なスケールに対して、川沿いの形態は長さ約90mのコンクリートの帯状の水平庇と地上60mの高さの鉄塔を設け、のびやかな外観とした。一方、北側の外観は松江城の石垣や屋根の稜線のシルエットをイメージした。平面計画上窓のない放送機能室が北側に並ぶことから、室ごとにリズムカルに配置することで、中低層の住宅が広がる街並みのスケールにも配慮した外観とした。

■「魅せる」「結ぶ」「創る」の重層するエントランス

エントランスは2層吹抜のガラス張り空間とし、定期的に開かれる地域との交流スペースとして外部と一体的に利用できる「結ぶ」空間とした。エントランスからピロティへと一体的に広がる天井は、杉の無垢材を使ったルーバー天井とした。この形状は山陰の「たたら製鉄」に由来する日本刀の「ソリとムクリ」をイメージし、「魅せる」空間としてしつらえた。建物各所に放送用分電盤を設置した「どこでもスタジオ」により、エントランスはその内外でイベント中継、お天気ニュース、収録などを行う「創る」空間となった。

■「結ぶ」吹抜により活性化する「創る」空間

約850㎡、天井高さ3.55mのワンフロア型の放送センターを川に面する南側2階に配置した。大きな庇により日射遮蔽をすることで大橋川に面した大開口を確保し開放的な執務空間とした。放送センターからはマスターやニューススタジオ・ニュースサブ、各種編集室などの放送機能室が一体で使えるように配置し、一体的な「創る」空間として集約した。この放送センターの中心に三層吹抜を設け、吹抜空間に温かみを持たせるため、三層にわたって杉の木ルーバーをしつらえ、この建物で働くすべての人々のコミュニケーションの核となる「結ぶ」吹抜とした。この吹抜にはハイサイドライトからの自然採光や鉄塔と一体で重力換気を利用するなど環境装置としての機能を併せ持たせた。

(赤木 隆・黒川祐樹/日建設計)

所 在 地 島根県松江市向島町140-1
 敷地面積 8,315.31㎡
 建築面積 3,562.23㎡
 延床面積 7,724.27㎡

構造規模 RC・S・SRC造 地上3階
 工 期 2014年7月～2016年4月
 最 寄 駅 JR山陰本線 松江駅
 撮 影 河合止揚（左頁上、右頁左下）
 近代建築社（それ以外）



コミュニケーションボイドのアクティビティによりつながりを増す



大橋川に開けた開放的なワンフロアの放送センター



様々なイベントが催されるピロティ空間



放送機能室をリズムカルに配置し松江城の石垣や屋根の重なるシルエットを表現



ボートレース鳴門 新スタンド

建 築 主	鳴門市企業局
基本計画・基本設計	安井建築設計事務所
アドバイザー	歩デザイン
実 施 設 計	清水建設
監 理	宮建築設計
施 工	清水建設
付属棟 3 階内装設計・監理	小島真知建築設計事務所

本施設は、鳴門市企業局が老朽化したボートレース場の建替えを行ったものである。休催期間をできるだけ短縮し、限られた工期内で施設を完成するために、発注形式は実施設計と施工を一括で発注するデザインビルド方式を採用した。施設規模を前施設の約4分の1までコンパクト化し、日本一コンパクトなボートレース場となった。

ボートレース場の機能として求められるものはファン目線に立った「見やすさ・買いやすさ・居心地の良さ」である。その3点の要素を、プランニング、断面計画、色彩計画、ファサードエンジニアリング、構造計画、設備計画等を融合し本施設は実現した。また、ボートレースにおいて最もエキサイティングなポジションとなる第1ターンマーク付近には3階建ての付属棟（ダイナミックキャビン）を設けるなど、ファンが自分の居心地の良い場所を見つけてレースが観戦できるように計画した。

(加藤 均・柿澤英之／清水建設)



ROKU（付属棟3階）（※1）



エンドラシスホール



イベントホール



所 在 地 徳島県鳴門市撫養町大桑島字津岩浜48

敷地面積 51,207.85㎡

建築面積 3,229.99㎡

延床面積 7,781.21㎡

構造規模 S造 地上7階

工 期 2015年2月～2016年3月

最 寄 駅 JR鳴門線 鳴門駅

撮 影 日本アートグラフィック、（※1）中村 絵、（※2）小川直樹写真事務所

競走水面よりスタンド棟・付属棟を望む（※2）

風景になる 場所づくり

建築家

林 知充

留学先で友達になったエストニアからの交換留学生の誘いによってエストニアに渡ってから、早くも16年。今回の依頼を機に、自分なりのこの国や風土へのかかわり方を振り返ってみました。この国のいろいろな場所に設計、建設する機会によって、この国の風土や歴史、人々について学んできました。

常にいえることは、建築の発想の原点はその「場所」にあるということ。建築の使命は、そこに「場」をつくりだすことだと考えています。コンテキストの読み取りの中でみつかった場所の特徴や可能性を強化したり直したり、時には場所そのものを定義したりすることが出来るのです。ポルトガルの建築家アルヴァロ・シザは話しています。「建築家は何も発明しない。彼らは現実を変形するだけだ」と。

タリン市ラスナマエ室内陸上競技場はソ連時代の1980年にプレハブ・コンクリート・パネルを使って大量に建設された郊外の団地群の中にあります。周囲の人々が立ち寄りやすい交差点になるように計画、周囲で使われているコンクリート・パネルを使いつつも開口部のプロポーションを変えることで新しい解釈を与えています。

同時期に設計された占領博物館は中心市街地の角地に位置し、建物の高さはヨーロッパ的な都市理論によれば5階建ての町並みに揃えたものにならないといけないはず。ここでは敢えて2階建てとし、向かい側の敷地にある旧市街地を廻る緑地帯の延長になるように考えられています。館内も外から中に続くスロープ状の動線になっています。

今秋竣工したエストニア国立博物館は、ソ連時代に使われていた軍用空港の滑走路の延長上に計画されました。この場所があったからこそこの建築の形。ここでは建築が過去と未来をつなぐ橋を形成しています。

浮かぶサウナは、私のエストニアの友人のために計画された小さい建築です。使われている形態「ループ」は周辺環境には特異なものです。それによって周辺から少しばかり切り取られた心地よい場が作り出されています。周囲とのつながり方のバランスをミニマムな形態操作によって獲得できていると考えます。

私が携わってきたプロジェクトは環境に溶け込むこと又は対峙することによってこの国の風景の一部になってきたと思います。「場」を作り出すときに重要な心がけは環境への最小の干渉で最大の効果を得ること。それによりお互いを生かすバランスの取れた関係が生まれると信じています。

林 知充（はやし とみみ）

1971 富山県生まれ
1994 横浜国立大学工学部建築学科卒
1999 米国ヴァージニア工科大学大学院建築学修士課程修了
1999 ラファイエット・ヴィニョーリ・アーキテツ（ニューヨーク）勤務
2001 エストニア・タリンにてHEAD Arhitektid 設立、共同主宰
2004 COO Arhitektidに参加、現在 HGA（Hayashi-Grossschmidt Arhitektuur）として共同主宰
2012 TTK応用科学大学建築環境工学部建築学科主任、准教授



ラスナマエ室内陸上競技場（エストニア・タリン市）/COO Arhitektid + HEAD Arhitektid, 2003/©Kaido Haagen



エストニア国立博物館（エストニア・タリン市）/DORELL, GHOTMEH, TANE/ARCHITECTS, Paris + HGA (Hayashi-Grossschmidt Arhitektuur) 現地設計協力+監理, 2016



占領博物館（エストニア・タリン市）/HEAD Arhitektid, 2003/©Kaido Haagen



浮かぶサウナ（エストニア・ヤルヴァ郡）/HGA (Hayashi-Grossschmidt Arhitektuur), 2013/©Jakob Meier

特集

ニュータウンから学ぶこれからの「計画」

各地に新しく拓かれた街がある。やがてその街も時の経過とともに変化し、ある街は開発が進み、かつての面影がわからないほどに変貌を遂げる。また、ある街は、昔のままのたたずまいの中に、静かにあるが、人口減少や高齢化という問題に直面し、衰退した街や地域の活性化が課題となっている。

自然発生的な成熟にまかせたまちづくりではなく、当面の要求に応えて、安全性や利便性、快適性などを追求したまちづくりが様々に取り組みされてきた結果はどうであろうか。そこで立案された当初の「計画」は、現在では何を意味しているのだろうか。「計画」で人の理想とする居住環境は実現できたのだろうか。世界中には、理想都市を追求するハワードの田園都市に始まり、何等かの「計画」のもとで造られた都市の事例は数多くある。日本もその手法を受け入れつつ、ニュータウンの建設や再開発が行われてきた。開発という名のもとに人工的に造られた街が、果たしてどうであったのか。防災的な観点、福祉的な観点、ライフスタイルの変化等、社会の動きを映し込んだ場合、これまでのトレンドでは解決できない問題があるのではないか。

本特集はそのような観点をふまえた関係有識者による座談会およびルポとして執筆された当初の「計画」のねらいと現状に関する現地取材により構成されている。

本特集が、過去から現在の状況を把握し、未来に向けての「計画」を考える一助となれば幸いである。

計画系分科会幹事 田中直人

【座談会】

ニュータウンにみる「計画」の到達点と課題 ― 総論にかえて ―

柏原士郎／濱 恵介／星田逸郎／田中直人（司会）

女性からみたニュータウンの今

伊丹絵美子／所 千夏／松田奈緒子／片山和代（司会）

【ルポ】

西神住宅団地（西神中央）・西神南ニュータウン・神戸研究学園都市・

須磨ニュータウン・ポートアイランド・六甲アイランド／田中直人

芦屋浜シーサイドタウン／田中直人

南港ポートタウン／赤尾大樹

りんくうタウン／増田 昇

千里ニュータウン／吉村英祐、守井 辰、飯田 匡

泉北ニュータウン／鈴木克彦

洛西ニュータウン／安枝英俊

明舞団地／守井 辰

北摂三田ニュータウン／松田奈緒子

企画：計画系分科会

田中直人／飯田 匡／鈴木克彦／松田奈緒子／守井 辰／吉村英祐

座談会

1

ニュータウンにみる
「計画」の到達点と課題

—総論にかえて—

実施日：平成28年10月21日（金）

場 所：安井建築設計事務所
会議室

柏原士郎

大阪大学名誉教授

☆

濱 恵介

UR都市機構 都市デザインアドバイザー

☆

星田逸郎

株式会社星田逸郎空間都市研究所
代表取締役

☆

田中直人（司会）

島根大学大学院特任教授

田中：今日はニュータウンを含め、これまでのまちづくりにおける「計画」のあり方を見据えながら、議論していきたいと思います。未来の展望へつながるようなお話の場にできればと思います。まずは自己紹介を含めて、お願いします。

清水に魚棲まず

柏原：私が36年間勤めていた現在の阪大は千里ニュータウンの隣にあります。大学院生の頃は京橋の歓楽街にキャンパスがありました。助手になってすぐに千里にキャンパスができ引越したら、隣に真っ白なニュータウンができていました。それが味気ないというか、清水に魚棲まずというか、人間の環境としてどうか、という疑問がわき、これが自分の研究テーマにする一つのきっかけになったんです。その後、赴任した武庫川女子大学の近くに建設された武庫川団地のレインボータウンは、もう古い団地になっていて、空き家率が10%を超えていました。ニュータウンでも団地でも時間が経ったら問題が出てきますね。たまたまその時に、亡くなられた京大名誉教授の巽和夫先生と大阪市大名誉教授の住田昌二先生と3人で、武庫川団地で団地の再生研究会をスタートさせ、いろいろな要因分析をやり、再生の方法がある程度わかってきました。それと、空き家率の解消と同時に並行してマネジメントの方法を考え出そうということをやりました。実際実行もされて、今では武庫川団地は良い団地に生まれ変わっています。田中先生とは、一緒に西神ニュータウンの中央センターの基本計画を進め、西神南では、ジェイコブズの混在型の下町の魅力をニュータウンで自然発生的に演出するこ

とをめざして計画に取り組みしました。

田中：街角施設については、制度上の制約などがありましたが、計画として純粋培養の環境づくりじゃなくて、西神ニュータウンの計画に先立ち実施した須磨ニュータウンの住民調査をする過程で、緑はいっぱいあるけれど人の気配がなくて淋しいから賑わいの演出とか、周りからの人の目が届く方が安全で快適じゃないかという反省があって、幹線道路沿いに店舗やギャラリーなどの立地を誘導する街角施設計画を提唱しました。

公団・URにおける住宅地の計画

田中：濱先生は、公団において多くの住宅地計画を手掛けられたと伺っていますが、先生が考えるニュータウンの定義の話を含めていかがでしょうか？

濱：私は都市工学という分野から都市デザインを目指し、当時の日本住宅公団に入社しました。昭和40年代は高度経済成長の真っ盛りで人口の都市集中が続いていて、「とにかく一戸でも多く早く住宅を造れ」と当時は量と効率重視の時代でした。計画論的には昭和30年代の蓄積で、日照条件など設計技法がほぼ決まっていた、新入職員でも団地設計をこなせた時代です。二年目になると、2,000戸20haくらいの団地を任せられ、1カ月くらいでマスタープランを仕上げて、数カ月後には工事を発注するという猛烈な勢いでやったのが、職業上の原体験です。その後、設計の前提となる建設計画だとか、都心部に造る市街地住宅に関わりました。昭和50年代に入ると、公団では大量の空き家発生という大問題を抱え、量だけを追求してはダメだという転換期を迎えます。その時に担当したのが、新商品企



画。住宅を商品と捉え、標準設計が否定され、ニーズと立地に合った個別設計が基本方針となりました。世の中の変化に対応するため、建築的にも土地利用的にもフレキシビリティも論じられた時代です。大規模ニュータウンのインフラ計画の経験はありませんが、新しい住宅地づくりには、どっぷり浸かったと思います。ところでニュータウンの定義について、私はこれを千里・泉北・西神といった、大規模のニュータウンだけと思っていましたが、国土交通省の定義を見ると、10ha1,600戸以上としています。すると、大規模団地は全部ニュータウンということになります。全国で約2,000件がニュータウンと定義され、我々が普通に考えている大規模な「ニュータウン」は60件くらいです。

田中：先生のお話の中に、計画学の分野での時代背景を反映する重要なキーワードがあると思います。大量生産するということで、標準化というキーワードがあつて、そこにいろんなライフスタイルの研究もあつたと思うのですが…。

濱：最初は家族構成による類型化でしたね。

田中：それをふまえて、商品として造ることで、売れるということは、ユーザーのニーズに合うという企画ですね。企画に関する委員会が建築学会でもありますが、社会の動向をどう掴まえるかということですね。要は大量生産から、ユーザーサイドに立った質の問題を追及する方向に転換。その後は、社会的にどう維持管理し使いこなしていくかというフローからストックの考え方です。ストックとしてリニューアルや活用のあり方を考える再生の話にもつながると思います。

濱：もう少し年代が経ってから、私は団地の建て替えや、URの外部から修復を含めた再生などにも関わるようになりました。

田中：戦後の住宅地の計画の歴史の流れがよくわかりますね。先程出た武庫川団地の再生では星田先生も関わっておられるとお聞きしていますが。

集落調査からの住宅計画

星田：15年程前にUR都市機構が武庫川団地を対象に全国初の大規模団地再生マスタープランを作成した時にメインで参加しました。踏査・総合的空間・時間軸等の視点を盛り込み、

初期の実行段階まで関わりました。

さて自己紹介ですが、私は建築家として実務・現場の視点で参加できればと思います。私のニュータウンとの関わりは、当初は北摂・北神地区や関西学研都市、彩都などで土地利用計画の次段階の建築配置計画等のビルトアップの基本計画に関わる事が多かったです。独立後は西神南・トリバール和泉・多摩ニュータウン等の最後に残りつつある戸建住宅街区の計画設計、ワシントン村等の将来再生構想、彩都の丘陵地形を活かした街区ランドプランなど、開発というより修復的・補完的な仕事です。私の世代は大学や仕事の学び始めから“開発”や“近代主義”をどう超えるかという視点で集落や伝統的な都市の空間構造や社会構造に学び、場所から固有の構造を発見していく方法を重視していました。現代の経済合理的な傾向から、如何に路地的なまちの複雑さや、暮らしの顔の見え合うまちを実現するかを目標にしていました。

また現在、泉北ニュータウンで古い中層住宅団地の再生を様々な形で手掛けています。高齢化し空き家の多い4・5階の住戸を二戸一にしてリフレッシュし、子育て世帯の入居を実現させたり、団地全体のブランディングをハード・ソフトから包括的に仕掛けたり。時代とともに暮らしの再生という社会的な側面が大きくなる傾向ですね。

田中：集落は、ニュータウンとは違って、自然発生的な要素が多分にあつて、風土性というか、もともとあつたものからじわじわ熟成してきたような成り立ちだと思うんですね。そういうのをふまえて、計画の上につけて成り立ちを生かしながら、そういう自然状況から学ぶ計画学があると思います。

計画の研究成果を実務にいかす

田中：実務的なアプローチで、実際社会のニーズとか変動に対して、どのように既成のものをうまく調整して使いこなすかという新しいデザイン提案。そういった仕掛けが求められると思うんですね。時代とともに計画の流れがずいぶん価値観や狙いによってシフトしていると考えられます。そこで例えば、計画として、規模であつたり配置であつたり、何か仕掛けていくときの根拠や裏付けが必要ですね。基準を決めて標準設計のように決

めてしまえば、その通りやれば一応及第点がもらえると思いますが、「こういうことです」という根拠になるものを見つけるために研究者の方々は苦勞していると思います。

そういう点から、柏原先生にお聞きしたいのですが、多くの研究成果を実際の実務的なことにどのようにシフトすべきでしょうか？

柏原：学会の研究というのは、研究のための研究というのが悪く言えばあると思いますね。おそらく実務をやっておられる方から見ればある意味ではピン트가ずれているというか、もっと研究やってもらいたい部分があると思います。研究というものと実務的なものとのギャップはあつて、歴史的に見たら、ニュータウンというのは戦後の住宅不足がスタートで、それをなんとかしなければというところから大量に造るという先程の話があつて、そこで標準化ということがあつた。その辺りまでは誰が考えても大事だという基本的なニーズがあつたんですね。ところが、ある段階から十分に充足してしまつて、何か特色を出さなければならぬと、いろいろな工夫をされていたと思う。ところが研究者は机上で、どちらかと言えば概念的で、それを適用しても実際には使われないとかいう時代が続ぎ、ある意味では、実務家のほうが先を行く。その時に供給主体というのが、初期の頃は自治体とか公的な団体がやっていたわけですが、ある時期から、民間が入ってきますでしょ。そうすると供給主体によって考え方がだいぶ違ってくるんですね。公的な組織というのは、やはり住宅不足を解消するとか、最低限の住宅を供給するとか、質水準的にも。ところが民間住宅になってくると、ある意味ではニーズを捉えて、デラックス化してくるとか特徴を持たせ、多様化する。それを研究者がどう受け止めるかというので、ある意味では、研究者の狙いというのが拡散する。今は、民間に能力があるから、ある意味では何のために学会があるのかという状況もある。その中で、研究というのがどういう位置にあるべきか、再考すべきでしょう。

田中：新住法にもとづき、早期に大量に供給するというので、公的なディベロッパーにゆだねて大量に標準良質のものを供給してましたね。しかし、西神ニュータウンや六甲ア

イランドの時になると、民間活力導入ということで事業コンペをやり出した。そこにいろんな計画に関わる企画やアイデアをお任せしますということになっていった中で、公的なディベロッパーと民間のディベロッパーの差異がなんであるか、近年は公的なところも民間のようにやっていかれて、いろんな変化がありました。そういう企画とか計画の魅力づけやヒントは、当初の標準設計的な大量供給とは違う形でかなり変貌を遂げていったと思うんですね。その節目のヒントは研究の成果もあったでしょうし、いろんな方の提言もどこかで反映されていると思うんですね。かならずしも学会が全然関係ないという状況ではなくて、いろんなヒントをいただいていると思いますね。

柏原：ヒントをいただいているという程度だと思えますね。それによって大きく変わっているということは、おそらく私は思います。

田中：濱先生いかがですか？

濱：私が最初に団地設計をやった時は、この理論は誰が考えてどのように決められたかについては考えてなくて、こういうもんだと受け止めていました。横浜の洋光台は、大規模ニュータウンと言っていいスケールで、絵に描いたように近隣住区理論で施設配置がされています。施設計画というのは、だいたいこれくらいという、納まりのいい数値があったんですね。それに従えば、当時の家族構成や社会環境の中での一つの正解が得られた。時間の経過に対しては、また別な理論が出てくるんでしょうけれども。これは学会とか大学の先生たちが入って作られた基準だと思えます。人口1万人当たりの必要な店舗数だとか、小中学校の面積だとかも割り出されていました。ところが、今思えば、モビリティはだいたい地域完結という大前提が入っている。今みたいに車でパーッと行って、イオンに行って買い物して帰って来るとかそういうライフスタイルは前提にしていない。ひとつの閉じた系の中で、地域完結で物事を考えることで一つの答えが出たんだと思います。ですから、昭和30年代の団地というのは、メインのショッピングセンターと歩行距離圏にサブのショッピングセンターを計画していた。ところが、その時代になると、サブセンターは

さびれて、洋光台の場合は既にワンセンターで、4万人が一つのショッピングセンターへ行く計画でした。時代時代に試行錯誤をしながら、都合の良い物差しを選んで使ってきた。でも、昔も今もよく分からないのが近隣関係、誰と誰がお友達でどのくらいの知り合いがいるのかですね、社会関係は大いに謎の分野でして、東大の鈴木先生に生活領域論についての調査研究をお願いするなど大学や学会に委託を出して、実態を把握する研究もしていたと思います。

田中：私も計画を担当した時は教科書的に標準的な考え方でやりましたが、実際ニュータウンは後から調べると、ニュータウンというエリア内だけで成り立つんじゃないくて、周辺の計画されてないところにできた施設を車で利用しているんですね。計画されてないところの方がニュータウン計画で抜けた部分をカバーしているところがありました。後に、アレグザンダーの「都市はツリーではない」という、ヒエラルキーの世界でなくて、もっと複雑な集合状況があるんじゃないかと、むしろそこを読み解くような計画学がいると思ったんですけど、それは計画者だけではできないと思います。ユーザーの参加を得て、先程企画の話がありましたけれど、ユーザーのニーズ、社会的にどういうものが必要とされているとか、どう変化していくかという読みが本当にできるのかなと思いますね。

濱：まさにそれが都市が成熟するというプロセスで、悪い言葉で言うと成り行き任せにして、ニーズがある所に施設が自然発生するようないしつけをつくるのが計画だと。そんなことで、逃げを打ったような気がします。

田中：先程、柏原先生がおっしゃったように、街角施設なんかは、そういう滲み出して、道路に皮一枚お店ができてもいいじゃないかと。新住法で規制するような、用途を限定しないで。ところが、最近、久しぶりに見に行くとほとんどお店ができていないんですよ。淋しくなってしまうくらいに。実現するには、建築だけでは限界があるという気がします。管理運営とか、ソフトのほうで仕掛けていくような技が、もっとタイアップしないと街としては成長しないかと。再生するとか、変えていくという力はいったい誰が持つていくのか

なという、大きな課題がありますね。

柏原：おそらく計画というものが、一世を風靡したある時までは、幻想かもしれないけれども計画というのが素晴らしいものだ。ペリーの近隣住区やハワードの計画など。ところがいざつくってみると、非常に味気ないことがわかってきた段階で、振り返ってみると、自然発生の集落的なものに逆に魅力があるんじゃないかと。コルビジエが批判されるのと重なってますけどね。300万人の計画とかに對して、チームテンとか出てきましたでしょ。要するに、極端に言うと、自然の姿の方がいいということです。集落などのデザインサーベイが一時期流行った。計画の欠点を補うのはどこかと。だけど今となって考えてみると、自然発生に任せた集落的なものというのは、社会学的な問題になってくると思います。コミュニティですね。例えば、京都の街の構造を考えた場合に、町衆が生まれるという前提があつて初めてできているのであつて、現在の京都のように、よそから入ってきて住んでいる人が、コミュニティがあるかどうかといええないわけです。ないというのが現代の社会であるとすれば、団地でコミュニティを作りましようと言うのは、はたして可能かどうか。ある時代までは幻想でね、集落的なイメージで集まって住んで、住宅の造り方でも、皆でバーベキューをやったらいいとか、中庭造ってやったらいいとか言うけれど、実際は造ったけれど使っていないのがありますよね。そうすると、現在の社会学的な社会構造を前提にした上で街というのはどうあつたらいいかということまで踏み込まないと。幻想の時代は終わったんですよ。そこでどうしたらいいかというのは、案外みんな隣は知らないというような状況でも成り立つようなものに発想を変えていかなかったら、いかんのと違うかなと思いますけどね。ものすごく難しいけれど。

田中：私の博士論文でも取り上げたのですが、ニュータウンと既成市街地を比較したときにニュータウンは自然性の評価が高いが下町性のようなコミュニティがないという評価が出ました。既成市街地はその逆でした。今日、高齢化が進行する中で、全く隣近所とお話したこともない、そういう人が戸建て住

宅や集合住宅に住んでいる。具合悪くなったから施設に入る。そこを逃げ出すことで、要はつながっていくのではなくて、逃げ出してしまふような関係。地域によっては人がいなくなってくる。そういう時に、計画学だけではカバーできないような、社会学的なものを含めてやらないと言葉だけのコミュニティとか浮いたような言葉で集会所ついたり広場ついたりしたからいいだろうと。環境デザインは魅力的なところをつくって、どうですかと売りに出しているのですが、ほんとにそこで何をするのかというのがなかなか見えてこない。実態としては造ったけれど使われていない、鍵がかかっていると草ぼうぼうとか。環境デザインとして、集落に学ぶことも多くあると思いますが、いかがでしょうか。

集落に学ぶ計画

星田：やはり我々が対峙する現場の「いま・ここ・この人々」がどう暮らしているかに肉薄出来ないと、過去の集落型をあてはめただけでは上手くいかないと思います。机上ではなく、現場には経済や法や組織など様々なハザードがある。そのような一般からは見えない現場のハザードはまだ研究の外にあると思います。形質だけでなくそういう部分にも過去の集落にヒントがあるのかもしれない。

私は経年したまちの再生にあたっては、「再資源化」という概念をテーマにしています。地形や地域環境、個々の暮らしの記憶やコミュニティなど新しい価値への資源となり得るのが沢山あると思っています。例えば泉北ニュータウン自身から間伐材が沢山発生する時代になり、周辺市街地と樹木の量が逆転している。それも資源ではないか。

濱：既築再生の方が手がかりが多いですね。

田中：濱先生、集落をそのままという話についていかがでしょうか。

濱：私は若い時から都市デザイン的な視点、形としての集落のパターンなどに興味を持っています。その理由の一つが、モータリゼーション以前の形を昔の集落というのは保っていることです。

ヨーロッパは馬車の文明があるので、少し車社会に近いのですが、形として真似するのは大いに結構なんじゃないかなと思っていた。しかし、昔風の形だけでは街は造れない。当

然、インフラとしての鉄道だとか道路だとか、我々が、現代生活に必要なものは造るとして、街区の単位、50戸100戸程度のブロックには、集落の形態が大いに参考になる。スケール感や人と人との付き合い方の装置としては、いいモデルです。ただし、いくつか難点もありまして、昔の集落ではプライバシーという概念があまりなく、人から覗かれたり、窓から通りを見たりということは自由な関係で、遮音性も乏しい。個人ないし家族という単位を非常に大事にする今の生活には、かならずしも向かない点がある。逆に、もっと公私の接触が必要という考え方もあって難しいところです。

星田：どう翻訳するかですよね。

濱：そう、要素分解して、この点は取り入れよう、これはもう今に合わないよね、などと。

星田：現代の戸建売住宅地では、例えば居間のサッシを開けたら目の前に隣家の車が迫っているなど、家同士の関係が疎外化しがちですが、時間とともに出来た集落は家と家の関係が良好で豊かです。私の戸建街区設計では必ずそうなるようにプランニングをします。また、全部一度に造らずにわざと空き地を残しておくという方法も提案しています。時間や関係等の価値は集落から学ぶべき部分だと。

濱：画一的ともいわれる昭和40年代あたり、ニーズ対応を図った50年代のことも含めて、集合住宅地を再生する時は、昔ながらの集落の要素をいいところ取りで、有効利用できと思っています。

まちの再生計画

田中：新規の団地だけでなく、再開発がありますよね。ある人は、昔の方が界限性があって面白かったとか、昔の歴史的な街並みや人のつながりがよかったとか。情緒のある路地とか街角みたいなものがあるとか。それらは再開発ではつくりこみがデザインとしてもできないし、逆にどういうものをはめ込んでいくのか、育てていくのか、もっと言えば、計画としてガチガチに固めるんじゃなくてファジーな部分をうまく入れるような技術、考え方がもっとあってもいいかなと思うんですが、その辺りの計画はいかがでしょうか。

柏原：梅棹忠夫さんが、千里の20周年記念の講演で、千里ニュータウンは、物理的なモデルだと。もっと生物学的なモデルとか有機的

なモデルであるべきだと述べました。まさに自分で成長できるように仕掛けをもっと入れなかったらダメだと指摘されているわけですね。私も研究をスタートした時に、そういう話を聞いて、どうしたらいいかずと自分のテーマにあったんです。それをいかに上手にやっていくかということの方法を探し出すことだと思うんですね。今年オートファジーでノーベル賞をもらった大隅良典さんの話で。オートファジーというのは、細胞のたんぱく質の三分の一ぐらいだけを供給したらあとは自分で再生していくようなメカニズムを持っているということだから、これはまさに再生計画だと思うんですね。新築的なものは少なくてもいい。後は再生だと思う。再生の方法というのをもっと、実務の人と協力しながらやっていくというのがすごく大事で、URが再生に力を入れてますよね。民間の場合は、すぐにお金にならないからあまり再生とかいうことには関心がないと思う。大事なことは、URのような公と民のちょうど中間にあるようなセクターがあった方がいいと思う。民間は実験的なことはやりません、公的なのはお金がないから一切そういうことはやらない。そうすると、やっぱりそういうものを実験的にやりながら、いいところを次に持って行くような、全体的な組織みたいなものが、国としてはものすごく大事だと思うんですよ。その時のメインテーマは、いかに再生するか、空き家をいかに活用するかをやる体制づくりですね。

まちのマネジメント

柏原：もう一つ、話が飛躍するかもしれないけれど、千里みたいなニュータウンとかには、それをマネジメントする人がいないのが問題です。基本的には、吹田市とか豊中市とか、行政がやっているけれども、やっぱりそれぐらいのニュータウンとか団地というサイズになれば、それをいかに再生させていくかということを実際に考える人がいるような組織をつくり、リーダーを持つということが大事です。

田中：今まで以上につくることなくマネジメントをやるスタッフとか体制が必要ということですね。大学の教育なんかでもやるようなシステムがいるんじゃないかな。人づく

りですね。

柏原：マネジメントと言っているけれども、案外誰もやれていない。

変化に対応するフレキシビリティ

田中：再生とかコンバージョンという話が出ているんですけど、再開発はスクラップアンドビルドでやってきたきらいがありますね。もう一つは、災害時への対応とか、テンポラリーな仮設的な仕掛けで今あるものと、補完し合うような仕組みづくりみたいなやり方も大事なかなと考えるんですけど、そのあたりどうでしょう。変化に対応するフレキシビリティという計画が必要かと思いますが。

濱：概念としての建築側から見るフレキシビリティというのも、いろいろ考えてみただけで、限界がある。実際に世の中で起こることを読み切ることは不可能。住宅が箱としてカチッとできていて、その中のがらんどうはフレキシブルですよ、と言ってもあまり力がなく、むしろ更地の上に軽い建物をつくって二、三十年経ったら建て替える。その時には当然、無駄にならないような組み換え可能な建築システムみたいなのが必要でしょう。ニュータウンの周辺部で、ニュータウンの計画的に造られたものでは対応しきれないニーズの受け皿が外にあるという、あの形から学ぶことが結構あるなと思います。

田中：千里ニュータウンもど真ん中に対象外の地区が結構機能していますね。

濱：多摩ニュータウンも区画整理地区があって、新住のところではほとんど動きが取れない弱点を救っています。

田中：最初は、新住ではないからなかなか建ててくれないから、街並みが揃わないとか問題があるとかよく聞いたけど、今となったらじっくり時間をかけて仕込んで、時代の呼吸

をそこで受け止められるような仕掛けができたんじゃないかと思います。

濱：一旦建ててニーズに合わなければ、建て替えられ更新されていくという、緩い形と、頑丈に建てて100年はしっかりとたせ改修を重ねるという建築の両方あっていい街が維持されるというような気がします。まあ概念的ですが。

柏原：変わるものと変わらないものがある。海外に行っても、街にはシンボリックなものがある。教会とか。いつ行ってもずっと変わらない。例えば、我々の感覚だとイメージとして、学校とかね。変わって欲しくないですよ。建物も含めて。だけど、周辺にあるお店なんかは変わってもそれほど大きくイメージには影響しない。メリハリみたいなものがあるような街にするのは、計画全体を、街を見ている人がいるということ、そういう人が、イメージをもっているのが大事ですね。

田中：街が変化しても、街のイメージやアイデンティティを大切にしたいですね。

濱：変化する柔らかない街というのは、建物をそれぞれのニーズで好き勝手に造って、一般的にはあまりきれいじゃない。

田中：デザインとして個別にやる場合と、基準をつくってやる場合がありますね。

濱：都市の熟成度が違うヨーロッパでは上手くいっている。旧市街地というのはガチガチに規制されて変更できないですね。それをみんなが認め合っているのでしょう。

田中：ヨーロッパの街を見ると、これだけを残したいとか、調和させてほしいとか、つなげてほしいとかいうインフラが結構あるんじゃないかと思います。しっかり残して記憶に残るものも大切です。

ニュータウンがふるさと

田中：ニュータウンで生まれて育って、そこが故郷だという人もいます。その人の記憶の中にずっと生き続けて、そこから発展するまちづくりが大事になってくる。後の世代にどう引き継いでいくかという視点も大事なかなと思いますね。

柏原：私の感覚ですけど日本人というのは、街に対する感覚というのが、ヨーロッパの人たちが自分の街を大切にすると違うように思うんですよ。街というものを美しさも含めて、どうあったらいいか、関心が根本的には低い。そこを変えていかないと、ニュータウンにしろ、団地にしろ、住み方も含めて、こういう豊かな生活がいいのかという国民、住民自身のイメージがはっきりしてなかったら、いくら計画的にどうこうしたって、崩れていくと思うけどね。

濱：国民の感性の話になっちゃいますね。

星田：それと共にヨーロッパの人は感性やイメージだけでなく、経済や社会や暮らしの機能が上手くそれらと結びついているのではないのでしょうか？そこが日本の社会が選択したことの違いですね。日本では暮らしと社会の真実はどこにあるのか。

リアルな計画の視点も

田中：リアルなところの関係をもう少し計画的なことにもつなげ、理解をすることが大事だと思います。特に少子高齢化の中で、ニュータウンで空き家がどんどん増えてきて、売りに出したけれど売れないとか、一方で都心にタワーマンションができ、それに付随して施設も整備される。お店はといえば、商店街はガラガラでどんどんつぶれていって、大きなショッピングセンターだけが一人勝ちでどんどんできていると。何かこう日本全体が



柏原士郎



濱 恵介



星田逸郎

画一的な計画的な造られ方をしてしまっていて、もともとあったリアルな生活感とか繋がりが飛んでしまったような傾向がちょっと感じられるんですけど。

星田：私の住む郊外住宅地は、開発45年のオールドタウンですが、土地の値段が下落したために中古で買えば賃貸の家賃よりも安く暮らせるので子育て世帯が多く転入し、子供が沢山います。千里の戸建街は高額なので高齢化の一途。そのように、当初の均質な街から時間とともに再生の契機が自然発生することもあるかもしれません。

田中：もう少し、大きな視点で見たら、国土土地利用とか、都市を中心としているいろんな地域をどう整備するかという大きな計画の話も必要なんですね、これからは。

星田：インフラの概念も、計画という概念も、時代と共にもっと変化しても良いと思うのですが。今の計画は真面目にやればやるほどリアルから外れていくという面もありますよね。真面目にしない方がいい。

一同：笑い。

住民の視点から

田中：今日お話しいただいている視点として、つくる側の論理というか、計画してつくる側のお話が多いと思うんですね。生活者とかユーザーとか、そちらの立場から見た場合、計画でこれから何が大事ですか。よく住民参加とかいう言葉もあるんですけど。

柏原：住民が意識を持って、まちづくりやるとか、理想は確かにそうです。だけど、それぞれそんな余裕もないし家の中で孤立している、年齢もいつてきて。そうすると、全体をマネジメントしたり、こういう街にしようとかいうリーダーがいなかったらいかんし、それをまとめる組織がなかったら。レッチャワー

スというイギリスのニュータウンは100年くらい経っているけれど、未だに人気があって、良い住宅地だと言われているのはそれをまとめる組織が非常にしっかりしているということです。千里ニュータウンは、企業局がなくなりましたが、そういうものがイメージを持ってある方向性を探りながら、絶えずいい街にしようという意欲を持った人がやらなかったら、住民が何かお互いに頑張ってやりましようと言うのは、今の社会的な人間関係の中ではものすごく難しく不可能だと思います。

田中：街が成長していくときの仕組みみたいなものをつくっていくのが大事ですね。私の知っているある地区では、最初は仕事で関わっていた建築家ですけど、そこに住みついてしまっ、リーダーとして活躍している例があります。

濱：私は、数えるとこれまでに住んだ家が30軒以上あるんですよ。戸建ても集合も、賃貸や社宅を含めて。その経験を、自分の仕事に反映させてきたと自分では思っています。

田中：職能として建築関係のいろんなお仕事をされてきたことはさておき、こと住む環境づくりにおいては、住む覚悟というか、住む立場でやらないとだめだということですね。

濱：住体験というのはできるだけ多様でリッチな方がいいと思います。こういうのはいいぞと薦められるように。もちろん体験だけでモノはつくれませんが、実体験はやはり有益で説得力があると私は信じています。

これからの展望

田中：そろそろまとめに入りたいですね。デザインと計画がよく並べられて言われますが、デザインの力ってどうでしょうか？

星田：私は表層的なデザインでなく暮らしや環境の内実が結果的に優れたデザインを表出する、そういう進め方が大事だと思っています。一方、いずれにしろレベルが高い事はやはり大切に、近年の経験ではデザインの質が高いほど住まい手が大きく反応し、結果的に事業が成功しています。そういう意味でも柏原先生のお話の“研究とは何か”にもつながるし、“計画”の所在自体が問い直されていくべきかとも感じます。

柏原：これからはやっぱり、新築よりも再生についての技術を高める。再生をいかにマネ

ジメントしていくかということと、マネジメントをする組織を確立すること。責任をはっきりさせて、街なり人間の生活環境にとって重要であるということを認識して、責任を持つ姿をつくっていくということですね。

もう一つは、非常に難しいけれども、日本人というか、住民が自分たちの生活環境というものに対して、それがひいては人間性を高め、自分たちの幸せを創造する根本に環境というものがあるんだということを意識できるような、環境教育を学校教育の中に取り入れていく。具体的に言うと、街を歩いてみて安全性や防災的にどうあったらいいとか、衛生面で美しく清潔に保つにはどうすればいいとか、景観はどうかとか、もっと子供たちに関心を持ってもらうことがまちづくりにとっては大事だし、建築をやっているから主張するのはなくて、日本国民、国の幸せを考える場合の根本にあると思いますね。

田中：教育ですね。濱先生いかがですか。

濱：今後のまちづくりに求めたいものとして、持続可能性を第一に挙げます。中でも地球環境レベルの持続可能性を常に心がけていかないと、せっかく建物が長持ちしても、気候変動で環境が破綻したら意味がありません。いかに少ないエネルギーで自然と調和して暮らせるか、を今後のまちづくりの目標として主張したい。つくる側だけでなく住み手の意識も大事です。もう一つの関心事は、居住文化というか、望ましい生活スタイルをどのように育てていくのかという点です。生きるという言葉と暮らすという言葉はほぼ同義で、暮らすこと＝生きることです。生活の場である住居や団地や地域の環境の質、居住文化の質をどうやって高めるかが、これからのまちづくりや団地再生の概念的な目標になるんじゃないでしょうか。生きることを楽しみ享受できる住環境や暮らし方が欲しい。例えば、家に人を呼んでもてなす、招かれてもてなされるという人間関係や住まいの姿が幸福感につながるのではないかと思います。

田中：幸福につながる人間関係ですね。今までのニュータウンなどの計画で見落としていたことを多様な視点で見つめなおすことが大切ですね。本日は、どうもありがとうございます。



田中直人

座談会

2

女性からみた
ニュータウンの今

実施日：平成28年10月17日（月）

場 所：東天紅大阪天満橋OMM店

伊丹絵美子

大阪大学大学院工学研究科 特任研究員

☆

所 千夏

アトリエCK 代表

☆

松田奈緒子

アトリエ 805 主宰

☆

片山和代（司会）

POP企画 代表

片山：今日は「女性からみたニュータウンの今」というテーマで3人にお集まり頂きました。ニュータウンの計画について、子育てや防犯やご近所付き合いなど、女性の視点で意見を伺いたいと思います。女子会風にといいことですので、ざっくばらんな雰囲気が進められたらと思います。まずは、皆さま自己紹介からお願いします。

伊丹：私は基本、子育て中心の生活をしてまして、だからこそ子育てする主婦的な目線で街が見えている時なので、今日はその視点でお話してきたらなと思っています。私が住んでいるところは、大規模に開発されたいわゆるニュータウンではないのですが、似たような住環境です。郊外で、戸建住宅地が面的に連なり、その横に1800戸くらいの大きな団地がある。団地には近隣センター的なものがあり、公園も多く、歩いて暮らせる街が計画されたような。この住環境が思っていた以上に子育てにいいな、子育てストレスを減らしてくれてるなと感じているので、今日はプラス面をお話できたらなと思ってきました。

所：私は住宅を設計することが多いのですが、設計者の視点からちょっとここは気になるといふ点をお話できればいいかな、と思っています。

松田：私は今、都心に住んでいるんですが、もとは郊外住宅に住んでいまして。私はニュータウンに子供の頃は閉塞感を感じてました。

母の視点・子の視点

片山：松田さんは子供の頃ニュータウンに住んでいたと言うことですが、子供から見るとニュータウンとはどういう印象でしたか。

松田：バスに乗って街に出ないといけないというのが、土日は家にこもっているしかないという気持ちになって。部活もしてたんですけどね。スマホがない時代だったので、昔は暇で暇で退屈で仕方なくて。

所：子供目線ですね。確かに出て行きにくいかもしれないですね。周りにちょっと遊べるところがないから。公園ぐらいしかない。同世代の子供とか、友達はいたんだけど魅力的な場所がない…。

伊丹：確かに、子供自身に良い環境と感じてもらえるのは、小学生くらいまでかもしれないですね。



伊丹絵美子

所：子供が小さい間はいいという感じなのかも。

松田：だからと言って、街中に住まわせると心配ですね。

所：都心の今住んでいるところは小さい子供が多いんですよ。教育レベルが高いらしくて、子育て世帯には人気があるから集まってくるみたいで。学校があっちこっちにあって、小さい子供が結構いるにはいる。幹線道路が近すぎてあぶないと私は思うけど。

伊丹：働く母親が都心に住むことで通勤時間を短縮して、それを子供との時間に充てるのは大事ですよ。

昨日、調べてみたら、私の住んでいるところの高齢化率は町丁目で見るとなんと42%。すごく高齢化が進んだ戸建住宅地なのですが、コミュニティがとっても落ち着いているんです。それに、普通に子供と散歩しているだけでも、いろいろな人に話しかけられ、庭の野菜や果物を収穫させてもらったり、犬と遊ばせてもらったり。うちの息子は近所のジジ友・ババ友に遊んでもらってます（笑）。それに、子供がスーパーでやんちゃしても、暖かい視線でニコッと見てもらえる。これって、ゆとりがあるおじいちゃんおばあちゃんだからこそだなと。とにかく近所の方が子供を大事にしてくれている、見守ってくれている感じが、住んでみて気づきたい点です。

片山：昔は結婚したら団地に先ず住むというのが一つの形としてあったと思うんですけど、それが今はないような気がする。これだけ情報があって、ニュータウンに若い人たちは住みたがるのかな。

伊丹：人それぞれになってきてますよね。最近、ママ友が家を買うラッシュで、やっぱりさまざまですね。エリアが気に入っているからと同じ郊外住宅地の戸建新築が1人に、戸建建売が1人。自然を求めて滋賀の湖西の新しい郊外住宅に戸建新築が1人。駅前の新築

マンションが2人ですね。本当にこうっていうスタイルがないと思う。

松田：母に、なぜニュータウンを選び続けるのか聞いたんですけど、公園があって病院があって小学校中学校があって、パン屋やスーパーもあって、計画されてて便利だし、暮らしやすいっていうイメージがあるから住んでる。若いうちは、あまり住まいについて深く考えずに、用意されてて、これだけ整ってるってわかれば、そこに住めば安心して暮らせるっていうイメージがあったって言うてましたね。

片山：安心安全っていうことですかね。子育てっていうことではね。

伊丹：それに、普通の生活プラス子育てする上での便利さもあるように思います。

ママ友が気に入って住み続けることにしたエリアは、比較的新しい住宅地なのですが、公園や散策路が充実していて遊ばせやすい。それに、市の子育てオープンスペースが2ヶ所もあったり、コミュニティセンターで一時保育サービスをしてたり。習い事や塾も多いし、教育熱心な母親也多そうだから校区としてもいいのかな。子供が多いから、子供向けの施設・サービスが集まって、それがまた魅力になる感じがします。

暮らしのイメージ

片山：無印良品が入ってるURのリノベーション団地がありますよね。ハイカラな雰囲気が変わってきていますね。

伊丹：URさんは他にもDIYできる団地をされて、素敵だなと思ってたんですが、子供が小さい間は難しいと感じます。暴れん坊の息子がいると、家の障子を張り替えるのも必死なんです（笑）。それに週末も何かと慌ただしい。そんな状況で、持家ではなく賃貸に、労力と時間とお金をかけてがんばれるかというと、DIYに関心のある私でも自信がないです。

所：「家」にイメージ持っていない人って意外と多い気がします。設計するとき、ここはどんな部屋がいいんですかと聞くと、どんな方がいいんでしょう、という反応が返ってくる。

伊丹：イメージするにはある程度勉強がいるけど、その時間確保も子育て中は難しいですね。

所：結構、興味のない人もいる。何か居心地が悪いからリフォームしたいんだけど、何をどうしていいのかわからないみたいな感じで

来る。私の感覚でこれがいんじゃないですかと提案はできるけど、最後の最後の詰めのところはやっぱり住む人がね、ある程度どうしたいというのを持ってきてないと、ものすごく設計しにくいと感じます。

松田：こんな暮らしがしたいっていうのがイメージされて住んでいる人は、どんな状況であつてもその人にとっては成功ですよ。でも、考える余裕もないまま住んでっていうのは…。私がニュータウンに閉塞感を感じたっていうのは、計画されているってことは暮らしまで規定されてしまっているようなイメージをずっと持っていて。結婚して子育てして、奥さんは家にいて暮らしを守って、旦那さんが遠くから帰ってくるって。それに当てはまっていないとまずいんじゃないか、批判されるんじゃないかって。時代もあったのかもしれないですけど。

片山：今は子育てしながら働いている人って多いんでしょうね。

伊丹：多いと思います。最近出産を機に辞めるということをやめて聞かなくなりましたよね。

松田：ニュータウンでもいらっしゃる？

伊丹：育休中の方や復帰された方もおられますよ。ただ、仕事をされてる方は、日中は地域におられないので、会うことはあまりないですね。

所：それは思います。同じマンションにいろんな人がいるけど、会社に勤めている時代は朝9時には会社にいるし、設計事務所は遅いから夜中に帰ってくるとなると、普段会う人がいないわけですよね。会社を辞めてから、マンションの中の管理組合の理事をやって、初めて他の住んでいる人と知り合いました。

伊丹：昼間いなければ。

所：隣の人の顔も知らない。

女性と防犯

片山：団地入居者には单身者の女性も多いと聞いたことがあるんですが、働く女性が帰宅が遅かったりすると、駅から遠い静かなところにあるニュータウンは防犯が気になります。

所：子供の頃は阪急が沿線に開発した地域に住んでいて。ある意味ニュータウンみたいな場所だけけど、駅から遠いんですよ。歩いて帰ったら20分くらいかかる。実家から通勤し



所 千夏

てた頃、朝自転車で行くんだけど、自転車置き場の閉まる時間が早くて、遅くなると自転車で帰れない。歩いて帰ろうにも天満宮の横を通って行かないといけないし、気持ちが悪くて、結局はタクシーに乗ることになる。

伊丹：駅からのアクセスが大変ですよ。

所：今住んでいるところは都心で、歩いて行ける駅が4つくらいある。実家は、阪急の駅とJRのどちらも遠い。引越した時にこの距離感覚は大事だと思いました。

伊丹：以前、駅に隣接するURの団地の端っこに住んでいて、駅から自宅に帰るまでに団地内をひたすら歩くんです。木々やこんもりした地形は昼間は素敵なんですけど、夜になるとなんだか怖くて、駆け足で帰ってました。人がいないですし。

所：公園で怖いんですよ。

伊丹：自然豊かなところは、確かに夜は怖いですよ。

高齢化と暮らし

片山：ニュータウンもどんどん高齢化してきていますね。一人暮らしのご高齢者も多くなってきたと思います。

伊丹：私の家に以前住んでいた方は一人暮らしのおばあちゃんだったんです。冬は寒いし、庭の手入れも大変だからと駅に近い高齢者マンションに転居されました。そんな風に早めに転居される方がおられる一方で、介護されているお宅も多い。お隣は息子夫婦がされているし、ご主人が奥さんの介護をされているところもある。介護サービスの車を毎日見ます。

片山：お友達の実家が青山台の一戸建ての方で、やはりお隣もお向かいも、前は住んでいた人たちが今は住んでいない。どこもセコムとかできっちりと防犯だけはやっているような状態らしいです。

伊丹：売らないんですね。

片山：そう、売らないんです。

伊丹：うちの周辺は空き家もあるけれど、最近では売りに出ることが多いかも…。でも、大変ですよね、やっぱり在宅で介護されるのは。介護される方の大きな声が聞こえてきたり、奥様を介護されてるお隣のご主人が「歩くのもつらいし、ここで暮らすのはしんどいんだ」と私に漏らしてくれたり。早いうちに動いて介護しやすい・されやすい環境に行くというのも手だなとは感じます。

片山：ニュータウンの一戸建てはまだ道と比較的玄関がフラットだからいいけれど、古い団地でエレベーターもないと、高齢者にとっては大変ですよね。

伊丹：でも私が住んでいることは、戸建てでも坂があって、お買い物に歩いて行ける距離でも、お年寄りには坂がしんどいだろうなと。ベビーカーでも坂があると、まとまった量の買い物はきついんです。

片山：近隣センターって団地には必ずあるじゃないですか。高齢者が多くなってきたらお買い物も毎日行くかどうかわからない。働いている人は平日なかなか行けないし、ネットで取り寄せができるし。近隣センターの役割が、だんだんと必要じゃなくなってきたのかなと思うんですが。

伊丹：今住んでいるところの近くの近隣センターは元気なんです。大きい団地内っていうのもあるし、スーパーも安くていいのが入っていて、割にいつも人がいます。駐車場も多いから、徒歩圏以外の人の利用も多いのかな。

所：施設はどういう形態ですか？団地の集会所みたいな感じですか？

伊丹：住棟の1階部分に店舗があり、それが団地の大きな中庭・駐車場を囲んでいます。その中庭に遊具が置いてあって、割によく子供が遊んでいます。近所の公園では人に会うことは少ないのに、ここでなら他の子に会って遊ばせられる。これは計画に感謝ですね。

高齢化と女性

片山：前にね、昔ミナミで芸者をしていた70歳を超えた女性の部屋を訪ねたことがあって。ゴミ屋敷だったんです。私の友達は、一人暮らしの高齢者のお世話をするNPOを立ち上げていて、そのお客さんなんですけどね。半分認知症になられていて。玄関入ったら、足の踏み場がなくて。テレビのあるお部屋にいら

したんですけど、拾ってきたような布やらなにやらで、すごい状態でした。

松田：女性の方がゴミ屋敷になりやすいって聞きますね。女性は一旦タガが外れると、行き着くところまで行ってしまうサガラしいです。ゴミ屋敷を掃除してきた人の実感としてそうだと聞きました。なので女性の問題でもありますね。外では綺麗に着飾っているんでしょうね。その女性もやっぱり。お化粧してね。

片山：なのに、お家はそんな状態。高齢化したニュータウンでは、女性が長生きする所が多いでしょうから、今後そういった問題もでてくるのかしら。

伊丹：物を捨てるのも最近大変ですからね。今のところ、うちの近所ではないけれど。

所：分別するのも面倒臭いしね。そういう状態の家が一軒でもあったら周りは不安になりますよね。

片山：友人曰く、身寄りがなくて淋しいからゴミでもいいからそばにあると安心するんだって。だから拾ってくるんだって。

松田：淋しくならないで生きていきたいですけど。ゴミに助けられるんじゃないくて。

伊丹：それで言うと、千里ニュータウンの近隣センターにはいわゆるコミュニティカフェがありますよね。そういうところで人と会うことは、淋しき解消につながるかな。ちょっと出て行ける場所が市民の力でできてるって素敵ですよね。こういった市民の力は、私が住んでいるような小規模な郊外住宅地よりも大規模ニュータウンの方が大きいように感じて、ちょっとうらやましいです。

松田：高齢になったら、ニュータウンに住むのもいいのかもしれない。

所：さっき伊丹さんが言ったことでチラッと思ったんですが、例えば子育て世代がいっぱいいるところに便民施設ができるじゃないですか。ニュータウンが高齢化していくのも悪い話じゃなくて、みんな高齢者だったら、高齢者の便民施設ができていくって形になっていくので、多世代にすればするほど、それが分散されてしまうことってありますよね。街自体が高齢者施設と言っては言い過ぎだけど、それを支える施設に若い人がいるっていうのはあり得るかもしれないと思います。



松田奈緒子

伊丹：実際、近隣センターは高齢者福祉系の店舗が増えていたりしますから。高齢者にとって住みやすいように変わっていくというのはありますよね。

片山：施設に若いスタッフがいて、見守ってくれて手伝ってくれて、言う事ないですね。一方で、郊外に一戸建てを買った人たちが、60、70になって、都会の方にお引越して来るってよく聞きますね。

伊丹：車に乗れなくなったら住み替え時ですね。

所：車に乗れなくなる日は突然来るわけですね。じゃあ住み替えたらいいって言われて、住み替えたら全部ゼロからコミュニティのつくり直しになりますよね。高齢者施設に入ってたって、コミュニティは結局ゼロからスタートになるんですよね。そういうのって、70、80になって、突然コロッと変わった環境に行って、おかしくなる人って結構います。まだ自分が柔軟性がある年齢の時に次の住み家を考えて、動いていかないといけないのかなと思ったことはあります。

伊丹：私も歳を取ったら都心に行こうと思っています。そりゃ楽しいですよ。都心の方が。

片山：刺激もいっぱいあるし。

松田：時間もあるし。

所：お庭はないけどね。

伊丹：子供の頃に土いじりをしてこなかった私でも、いずれ土いじりが好きになるのかしら。今は全然興味がなくて。

片山：子育てが終わったら次の楽しみになるんでしょうかね。

伊丹：好きになったら、今のところに住んでおきます（笑）。

女性もいろいろ、エリアもいろいろ

片山：ニュータウンの計画というのは、女性の立場から見て、成功なのか果たしてそうじゃないのかを最後に伺いたいと思います。

伊丹：世代にも、子供の年齢にも、働き方に

もよると思います。女性といってもひとつにはくれないですね。

片山：家にいる人、働いている人、高齢者、若い人、子育て中の人。

伊丹：価値観も違いますね。

所：男性目線っていうのは出てこないんですか？

伊丹：リタイア男性も入ってもいいかも。昼間地域におられる方。

片山：あと、お家でお仕事されている人たち。家にいる時間が長くなる。昔とは変わってきているから、昔計画されたニュータウンの形が合うのか合わないのか、関係あるのかなのか。どうなんだろうかと思ったりするんですけど。

所：自分の「住まい」に対して、自分の「生活エリア」ってあるじゃないですか。人それぞれ生活エリアっていうのは、「住まい」の中で完結している人ばかりじゃないと思うんですよね。例えば、キッチンで料理を作るといよりは、外食が増えたりすると、食事はアウトソーシング的になっていますよね。仕事でも、打合せであっちこっちに行くこともあるし、自分が生活しているエリアってこれの中だけでは終わらなくて、その感覚ってみんな違うんですよね。広いニュータウンの中に全部詰め込まれているのがいい人もいれば、隣町にお母さんが住んでいて、子供預けに行ってそこでコミュニケーションを取っている人もいる。生活のエリアは非常に様々だから、ニュータウンの計画の括りだけで言えるのかな、という感覚があります。

松田：以前より多様になったんでしょうね。

所：家の中に極端な話リビングがなくても、毎日のように居酒屋に行ってるおっちゃんみたいな人は、街もリビングのように使って暮らしていることになります。

松田：街を使ってだと、都心の方が便利ってことになりますよね。

所：ニュータウンで、一生懸命街ごとに人がつくったイメージがあると思います。都心には、何となく自然発生的に店など、家の外に様々なものがたくさんある。もともとあるのか、人がいたから増えるのかわかりませんが。ニュータウンはそれを人工的に無理に都心の便利さのようなものをイメージしながらつくられているように見えます。ニュータウンを

考えることは、人工的につくられた街がどうだったかを考えるってことなんですよ。

伊丹：住む側は、今、あるものに対して、なんなりやっているように思います。それが、人工的であれ、自然発生的であれ。

片山：女性は柔軟性に富んでるから、変化に応じてうまくやっていける。

伊丹：不便だからって計画者を恨むことはないですよ。その居住地を選んだのは自分だし。

あ、でも、今、思い出したんですけど、最近計画者を恨んだことありました。開発中の某ニュータウンにコミュニティセンターができて、その中にいいキッズルームがあるそうなんです。だけど、それが、坂をずいぶん登った住宅地の端っこにあって、しかも駐車場が使えない。今の住民にとってみるとありえない立地です。ベビーカーでも抱っこひもでも徒歩でそこに行くのは難しい。行けるのは電動自転車くらいかな。もっと、利用者の交通手段を考えてほしかったです。

所：それは失敗と言ってもいいのかも。そこまではっきり不便さを感じるなら。

計画よ、ありがとう

片山：福祉的観点で言うとうどうだろう？

伊丹：歩いて暮らせる街は今になって活きていると思います。車が使えなくなった高齢の方が増えているので。

所：歩いて暮らせる街に全部なっているんでしょうか？

片山：近隣センターというものを造ってね。それでも団地が大きかったら近隣センターまでが遠いかも。

伊丹：あと、その近隣センターにほしいものがあるかというのも問題ですね。

所：どちらかというとみんなつまづいているのはソフトのところ、ハードだけなら住みこなせるだろうと思います。コミュニケーションの



片山和代

きっかけの第一歩が一つあるといいかなと。例えばニュータウンに入ってきた人に、強制的に自治会の役員を一年やりなさいとか。管理組合に行くとそこに無理矢理毎月1回でていって、顔がわかって繋がる人が見えてきたりするでしょ。ある程度強制も必要だと思います。

伊丹：コミュニケーションのきっかけとは違いますが、ソフト面で私の住んでいる住宅地で面白い取り組みがあつて。バス停のお掃除当番が自治会で廻ってくるんです。住民が阪急バスに頼んでバス停を作ってもらったという経緯があるそうで。滅多に廻ってこないし、作業負担も小さし、本当にささやかな関わりですけど、これをすると自分の街という気持ちがでてくるんですよね。

所：計画する時に、ある程度住民のイメージがわかっているといいですね。

伊丹：計画に直接に関わることで、自分のものの感やみんなで守ろう感はでますよね。でも、バス停掃除当番のように、計画の経緯・意図を知ることや管理にささやかに関わることで少しはその感はあるのかなと。

片山：結果としては、成功か失敗かなんて言えないよね。

伊丹：失敗でもなく、成功でもなく。色々計画してくれてありがとうって。

片山：自分のあった時にあったように暮らすということですね。本日はありがとうございました。



「山、海へ行く」 神戸のニュータウン

西神住宅団地（西神中央）
西神南ニュータウン
神戸研究学園都市
須磨ニュータウン
ポートアイランド
六甲アイランド

田中直人

島根大学大学院特任教授
博士（工学）

はじめに

神戸市では、昭和30年代から「山、海へ行く」とおりに、六甲山系の内陸部の丘陵地を開発し、須磨ニュータウンの高倉台団地や灘区・東灘区の住宅団地の鶴甲団地、渦が森団地などを造成した土砂を用いて市街地臨海部に工業用地や港湾用地を生み出すとともに神戸港沖に人工島ポートアイランドを海上都市として計画した。海上都市としてはポートアイランドに引き続き六甲アイランドが開発された。内陸部では、須磨ニュータウンに引き続き、地下鉄を延伸して西神ニュータウンの開発計画が進められた。

かつて神戸市の職員としてポートアイランドや六甲アイランド、西神ニュータウンの計画に携わってから相当の年月を経た。後に明石大橋の建設に伴う舞子駅周辺や市街地の再開発計画を担当し、大学の教員となり今日に至っているが、一連のニュータウンプロジェクトにおける「計画」の考え方や試みについて住民がどのように評価しているかについて調査を行っている^{※1}。今回のルポでは計画に関わった経験をふまえ、現地での様子から感じた「計画」の跡とその課題について考察してみたい。

「山」のニュータウン ～内陸部NTをみる～

西神住宅団地（西神中央）

2016年10月の某日、天気は晴れ。久しぶりに三宮駅から神戸市営地下鉄に乗車。当初、新長田駅から須磨ニュータウンの地区センターにある名谷駅までの路線だった地下鉄も西神ニュータウンの中央センター、西神中央駅まで開通し、通勤、通学の乗客で賑わう。地下鉄車両も使いこまれてやや古びた感したが、近々、新車両に替わるとか。都心三宮への通勤客とは逆コースで西神中央に向かう。

まず、西神中央駅前の広場を経て、核商業施設であるプレンティを見る。まばらな人影の中に、歩行器や杖を使用する高齢者の姿が目についた。インダストリアルパークなどで働く人たちや住民をターゲットにした飲食店などの張り紙サインが夕方以降の巷空間の雰囲気を変えさせる。ホテルや図書館、病院、警察等の計画した地域施設の様子は、当初と大きくは変わらないが、周辺の用地に高層住宅をはじめ、自動車利用による商業施設など

が増加している。洪水調整池を活用して計画や設計を担当したゴルフ練習場は増築され盛況であった。同じくテニスコートも年配の方で満員の様子。どうやら健康志向の施設に人気があるようである。ニュータウンの早期の機能の受け皿ビルとして計画した駅前の西神センタービルは大方のテナントで埋まっているものの銀行関係の大手テナントのせい、か、思ったほど活気がないのが気になる。駅前のバスターミナルからバスに乗り、最初に整備された近隣センターの「かりばプラザ」に向かう。施設の空間形態としては、当初のままであったが、当初の誘致した計画と異なり、テナントは店舗の入れ替えて大きく変化している。直接、衣食住の生活に直結するものでなくペットのクリニック関係など趣味や生活文化に関わるものが目立つ。中には空き店舗を活用し、たまり場、だべり場、いこいの場としてボランティアの人が親切に対応する「コミュニティかりば」には手づくりショップもある。BOX形式の陳列で親しみ深い。地域の住民による積極的なコミュニティ活動とともに、ニュータウンの関連施設の経営を担い、より利便性の高い暮らしの機能を提供する株式会社OMこうべに期待したい。かつて居住していたことがある近隣の狩場台の住宅地を見たが、閑静な佇まいは変わりなかった。タイミング良く来たバスに乗って、再び西神中央へ、そこから「かすがプラザ」へ向かった。かつて街角を見守るランドマークとして設計担当したボリスボックスと再会した。西の近隣センターとして計画された「かすがプラザ」の姿は同じであったが、空き店舗が目立ち閑散としていた。やはり、少し足を延ばして、他の施設へ買い物などに出かけているのだろうか。これからの近隣センターの行く末



山や海に広がる神戸市のニュータウン



ニュータウンの玄関口である西神センタービル



住民による手作り商品販売のフリマボックス



福祉施設など周辺地域との連絡送迎バスも多い



駅前のバス乗り場には高齢者や体の不自由な方の姿も



ユニバーシアードの選手村のゲート広場跡にも高層住宅が

が気になる。周辺の住宅地においても空き家サインが見られた。住宅地には大きな起伏はなく、原則フラットな地形で高齢者や車いす使用者が多くなってもバリアフリーは確保されている。新しい住宅地の試みとして、ツーバイフォーなどによるシアトルバンクーバーレッジやタウンハウスを計画し提供した町並みは今も魅力的であるが、高齢化の進む中、住宅地としての利便性や安全性が課題と思われる。住宅地の中にも教会やクリニックの立地も散見され、当初の計画とは異なっている。既成市街地と同様に「ニュータウンの中の都心居住」ともいうべき駅前に高層の集合住宅に転居する傾向が増えるのではないだろうか。計画的に配置された緑地や公園などの豊かな自然だけでなく、地域の中で暮らしやすくなるための計画の課題を再確認しなければならないと感じた。

西神南ニュータウン

次に訪れたのは西神南ニュータウン。駅前に位置する商業施設「セリオ」に隣接して「光の広場」が迎える。計画当初「緑」「水」「風」「光」を環境デザインのテーマとし、「光」をテーマにする位置に計画した広場を「光の広場」とした。ステージ周りには天の川をイ

メージしたせせらぎを配し、七夕星の光に誘われて多くの人が集うことを願っている。地域の住民が集うイベントだけでなく、ニュータウンの核としてのランドマークあるいはシンボルとしての役割を期待して設計したものである。2階レベルの回廊は周囲の施設への動線として、イベント時には観覧席として計画されている。商業施設としては駅前以外には少ないが、計画段階では「街角施設」を立地させる計画を進めた。幹線道路沿いのエリアに住宅のみならず、アトリエやギャラリー、カフェなどを誘致する計画である。事業コンペで土地分譲においても誘導できるよう進められた。今回の訪問では、残念ながら、目指していたようなイメージに完全に合致する状況は確認できなかった。計画として計画者がイメージしても、個々の住民や事業者は必ずしもその方向には取り組まない、取り組めない事情があり、時間経過を経て、自然発生的な熟成も必要と思われる。下駄履き住宅として明確に店舗としてテナント誘致することも考えられるが、今後の街の発展過程でどこまで自由に住民が望む方向の街角が可能になるかである。あらためて、計画の難しさと計画から実践につなげる手法の課題が大きいことを痛感した。

この西神南ニュータウンでは、人の気配が少なく、高齢者が目立っていたことが印象的である。4つの自然要素をテーマに民間事業者へのコンペを実施しているが、それぞれの自然要素を導入した環境デザインを良好に維持するには管理上の課題が残るようだ。せっかく導入された環境デザインの工夫を生かした魅力的なランドスケープの実現を期待したい。

神戸研究学園都市

6つの大学が終結した神戸研究学園都市。その中心エリアは地区センターの商業施設や学園関連施設である。神戸研究学園都市は1985年開催のユニバーシアード神戸大会において選手村として活用された。ユニバードームは選手村のゲート空間の広場として、まちびらきの後は住民の憩いの広場として、当初は「コミュニティプラザ」として計画され、ユニバーシアードが終了した後に記念して現在の名称になっている。ユニバードームの近くには選手たちの記念の足形や手形をユニバーシアードのモニュメントとして設置されている。

ユニバードームは訪問時点では子供たちが自転車に乗ったり、走り回っていたが、盆踊



西神南NTのシンボル「光の広場」はイベントがなく、人影が少なかったが明るく輝いていた



街角施設は計画で期待されたほどの賑わいには届いていない



ユニバーシアード神戸大会で活躍した選手の足型モニュメントが当時を思い出させる



イベントがない時もユニバードームは子供たちの遊び場として賑わう

りやラジオ体操をはじめ、各種のイベント会場としてもよく活用されているとのこと。当初の計画時点とは違って、阪神・淡路大震災以降は地区センター内の施設は大きく変更されているようである。地区センター内に集合住宅や高齢者施設を配置している。しかしながら学園の共同利用施設は学生や教職員の活動拠点として利用が期待される。施設周りの広場では、大学生の賑わいが見られ、活気を呈しているが、今後の運営サービスで住民を巻き込んだ学園都市としての機能を発揮することが期待される。

当初から景観形成計画に重点を置いた成果として、それぞれの街路樹に個性あるものを指定しているひとつとしてケヤキ並木が大きく育った南北の大通りは、神戸研究学園都市の緑のインフラの力でシンボルロードとなっている。

ニュータウンの公道上にサインを設置する計画を立案し、進めたサインプロジェクトも当時の道路管理者から反対された記憶もまだ消えていないが、なんとか実現してから中央区をはじめ神戸市内各所で当たり前のサインとして広まっている。ニュータウンにおける都市環境デザインの実験や試みがプロットタイプとして拡大した例と言える。しかしなが

ら、学園都市に設けるサインとして、学問の神であるミネルバの使いのフクロウをあしらっていたが、現状ではことごとく持ち去られてなくなっていた。夢やロマンを感じさせない現状にはがっかりだが計画した一人として、実際に住んでいる住民や来街者にとって、安全で快適に街を行き交うことができることを願っている。そうこう歩き続けているうちに夕刻近くなったが、西神ニュータウンに先行して整備された須磨ニュータウンの中央になる「名谷」駅を目指すことにした。

須磨ニュータウン

須磨ニュータウンは1970年から入居が始まった。新住法だけでなく、区画整理などによる6つの団地から形成されている。ニュータウンの成熟とともに駅周辺の商業施設等も増改築されて変化している。また、人口の高齢化も進展しているので、西神ニュータウンの計画段階では須磨ニュータウンの実態調査を行っている。すなわち須磨ニュータウンの実態を評価することで、西神NTの計画を進め、さらにその結果、できた西神ニュータウンを評価するというプロセスである。新住法による団地計画では整然とした住宅地を比較的早期に完成させることが可能であり、逆に白川台地区のような区画整理では年月を要するが、住民のニーズや社会動向を反映した成り行きの計画が特徴と言える。はたしてどのような計画でできるまちが実際、魅力的なまちになるか。そこが問題である。多くの施設が増加あるいは変化していく。西神ニュータウンに比べると住宅の建築としてのデザインや環境デザインはやや古いと言えるが、年月を経たまちの成熟は進んでいる。名谷駅に近接する「パティオ」などの商業施設界限にも



駅前には高層住宅や商業施設が増えているがやや殺風景な感も

既存の市街地に醸し出されるような界限性が感じられた。まちは計画されて生まれたが、育てられ方は必ずしも計画者の言いなりの優等生ではなく、むしろちょっと不良扱い育てられ方の方がおもしろいかもしれない。「きれいなだけではつまらない」という感覚はまちづくりでも言えそうな気がした。

「都市はツリーではない」というアレグザンダーの言葉のとおり、ニュータウンもペリーの近隣住区理論だけではできない。微妙に須磨ニュータウンでも西神ニュータウンでも、その計画区域で完結していないから、許されている計画の甘さが見え隠れする。商業施設や医療施設をはじめ、生活に必要な施設すべてを完全にニュータウンではそろえることは不可能である。逆にもとからの豊かな自然や歴史環境、昔からの生活文化が周辺地域にある。西神ニュータウンの3つの団地と周辺地域をつなぐ「サンライズ道」の計画を進めたが、ハイキングだけでなく、日常の生活においても周辺地域とのつながりが重要になると考える。生活者の家族やコミュニティの変化、その時代の流行や変化が作用する。たえず動いているもの、それは見えるものだけでなく、見えないことに大きく左右される。多様な選択肢を器用に使い分けるたくま



駅からバスターミナルや商業施設につながる歩廊は学生たちで賑わう



商業パティオの広場は高齢者はじめ買い物客の憩いのオアシス



駅中施設が駅前の界限を誘導する

しい生活者だけではない。それができるのは基本、自分で車を運転するなり動ける人である。高齢化が進み、思うように生活できない住民にどのような居住環境を計画できるのか、ニュータウンに限らず、これまで培ってきた計画の常識をもう一度原点に立ち返って見直してもよさそうだ。

「海」のニュータウン ～臨海部NTをみる～

ポートアイランド

ポートアイランドは神戸市が内陸部の須磨ニュータウンの開発による土砂を埋め立てて造成した大規模人工島である。「山、海へ行く」の言葉通り、内陸部と臨海部の開発を同時に進めるという手法である。しかも、人工島の周囲には時代の先端を走るコンテナヤードを港湾国際都市の拠点として整備している。そのちょうど、真ん中のまんじゅうで言えばあんこの部分には人口3万人の居住ゾーンとして、住宅地を計画したわけである。

国際障害者年であった1981年3月から半年間の会期で、ポートアイランドの完成を記念して「神戸博ポートピア'81」が開催された。財団法人神戸ポートアイランド博覧会協会の担当として、バリアフリーのモデルエリアをめざした会場づくりをめざした。都心三宮から全国で初となる新交通ポートライナーで結ぶほか、恒久施設と仮設施設を会期後のコンベンションシティ、ファッションタウン環境整備を想定して地区計画を導入して計画し、水辺や緑、アートなどを用いた多くの都市環境デザインが試みられた。

神戸空港まで延伸した新交通ポートライナーに乗って、久しぶりにポートアイランド



事業コンペで建設された集合住宅の広場に子供たちの声が響く

を訪れた。都心三宮から貿易センタービル、ポートターミナル、北埠頭のポートアイランドビルに至る風景は1981年のポートピア博で訪れた人たちが体験したものと同じく、青い空と海を背景に広がる港とまちの風景であった。

最初に降りた駅は、かつては日本建築学会賞も受けた市民病院に直結した「市民病院前」駅から名称変更された「みなとじま（キャンパス前）」駅。外壁の汚れが気になっていたが、今は「ポート愛ランド。デイケア」として活用されている。美しく育った大通りの緑地に面する住宅地は事業コンペで建設された。広場で遊ぶ子供たちに加え、高齢者の姿が目立つ。駅西側のエリアにはかつては市民病院がある他は港湾のコンテナヤードの基地が広がっていたが、今や神戸学院大学や兵庫医療大学、神戸女子大学をはじめとする4つの私立大学のキャンパスゾーンに変貌している。学生や教職員などで賑わいをみせるが大学駅前空間としては静かな佇まいであった。駅から無機的でやや殺風景な長い歩道橋を歩く。当初からこのような計画がわかっていたら、もっと魅力的で快適なユニバーサルデザインのアプローチやエリアデザインが導入できたと悔やまれる。次は「市民広場」駅で降りる。

コンベンションシティとして博覧会当時から先行して計画されたポートピアホテルや国際会議場、国際展示場、ワールドスポーツセンターなどを核に増改築もされ、活気を呈していた。周辺のファッションタウンは事業エリアとして成熟した感があったが、当初の地区計画や景観形成計画で期待していたものから外れた様相も多く散見され、計画の継続的な担保を図るための手法の必要性を感じた。計画としては当初の市民広場を囲む空中回廊や新交通路線にそって先端医療駅まで整備された歩行モールなどで連結するインフラの有効性が確認できた。さらに豊かな自然環境と調和して来訪者や住民の動線として活用されてほしいと願う。

「医療センター（市民病院前）」駅前には第二期の計画として登場した医療先端技術をテーマにしたエリアで多くのビル群が建設されている。その中の新市民病院については、多様な市民の利用を考慮するユニバーサルデザインの実現をめざしてお手伝いさせていただいたことがあり、その現状が気になっていた。

まわりには関連する医療技術関連の施設がある反面、まだ空地になっている敷地も多く残っている。「京コンピュータ前」駅の南側にはかつての神戸花鳥園がどうぶつ王国となっている。高齢者や子供をはじめ当該からの客にも人気があるようだ。終点の「神戸空港」駅は空港に直結。ユニバーサルデザインをめざすプロジェクトで何度も足を運んできたが、エントランスドアの円窓や多くのサイン、床のデザインなどが懐かしく迎えてくれた。ゲートが増設されたりする整備の一方で、関西にある他の空港との関係や経営の行く末に話題が飛び交っている。もともと、神戸に国際空港としての計画の話があった時から、



みなとじま駅とキャンパスエリアの移動は長い歩道橋で幹線道路を渡る



港湾都市のシンボルであったコンテナヤードが大学キャンパスに変貌している



筆者らがユニバーサルデザインの導入に取り組んだ神戸空港の今後の行方が注目される

市民の賛否などいろんないきさつの末、今に至っている。未来のまちづくりを見据えた決断、計画の策定は理想であるが難しい。新しい海上文化都市としての発展をめざす先駆的な計画が果たしたものと課題として残したものが頭の中を交錯する中、神戸の街並みに映える夕陽を見つめながら新交通ポートライナーで都心三宮への帰路に着いた。

六甲アイランド

ポートアイランドに引き続き計画された六甲アイランド。先行して計画されたポートアイランドの反省と差別化から計画が進められた。「住宅が詰め込まれ過ぎではないか」「海上都市なのに水辺から遠い」「採算性のことはあるが新交通は必要ではないか」「公共的な事業者中心ではなく、もっと民間のノウハウや活力を導入すべきではないか」などなど。結果、建設された六甲アイランドは総面積595ha、計画人口3万人（現状は1万8千人弱）のニュータウンとして計画されたまちである。住宅地の計画については事業コンペを実施、民間ディベロッパーのノウハウを最大限に発揮出来るよう、公共のインフラ部分を中心に行政側が計画整備することになった、その結果、生み出された全長600mで彫刻や水と緑の自然が織りなすリバーモールやシティヒルと称する居住地区と工業地区を分離する健康・文化の緑地ゾーンが生み出された。また、最南端の海岸部には海の景観と環境アメニティを享受するマリnpark駅を整備した。

阪神魚崎駅から六甲アイランドセンターまで新交通六甲ライナーに乗って、久しぶりに六甲アイランドを訪れることにした。魚崎駅からは住吉川周辺の緑豊かな住宅地が眺望できる。周辺の住宅地を配慮して設けられた窓



六甲アイランドの中心地に建つファッション美術館などが都心性を彩る

辺の遮蔽デザインが艶消しではあったが、予想に反して乗り換え客で賑わっていた。その理由はあとで判明した。ハロウィンのイベントが六甲アイランドで開催とのこと、ポスターがあった。

魚崎を出て、六甲大橋を渡ると大きなゲートになる高層住宅が目に見え込んできた。キングとクイーンと呼ばれている。「アイランド北」駅を降りれば六甲アイランド。近くのシティヒルの緑地内に設けられたテニスガーデンでは老若男女が汗を流していた。設計に関わったクラブハウスもすっかり緑の景観に溶け込んでいた。住宅地の中に計画された街角広場の彫刻などのアートも時の推移で多少、古びた感はあるものの、事業コンペで建設された住宅群とともに落ち着いた街角を生み出していた。「アイランドセンター」駅周辺では多くの人たちで賑わっている。リバーモール周辺の広場に屋台が立ち並び、仮装にそれぞれの工夫を凝らした子供、若者でごった返している。活気がある「おまつり」風景である。周辺の高層住宅の住民で子連れの人が多い。尋ねると東灘区の島外から来た若者や島内に移転してきた大学や各種の学校の関係者の参加も多いとのこと。P&Gが撤退して関係者の参加が減少しているとのことであったが

外国人の参加も目立ち、神戸らしい居住地域の感じがする。駅のビルの一角、笑顔で案内をしている女性に会った。ボランティアで案内をしているとか。このようなイベントだけでなく日常から、六甲アイランドに引っ越ししてきた人や訪問してきた人をサポートしているそうである。1988年六甲アイランドまちびらき当初から様々なコミュニティづくりが進められ、地域活動をする多くの団体が生まれ、各団体のネットワークをめぐして「六甲アイランドまちかどネット」が設立されたそうである。まさにニュータウンの成熟と共に住民自身がコミュニティの発展に関わっている。1995年1月の阪神・淡路大震災においても、当時の液状化による被害、ライフラインの欠如する中、地域の人たちで支え合った経験が大きかったとか。これからも計画者が作ったコミュニティだけでなく、住民による熟成コミュニティが育つことを期待したい。「マリnpark」駅周りでは教育施設やスポーツ施設の充実が目立つ。当初の事業者の撤退などの変化の中で、海辺の環境を市民の公園として誰もが安全快適に利用できるようハード面の整備と併せて管理サービスの体制も継続的に充実することが期待される。六甲アイランドからJR住吉駅までの帰路における車窓からは、住宅地に増えてきたタワーマンションが六甲山の緑を背景に水平に広がるまち並みを垂直に切るシルエットとなり、「海」から「山」を見る新しいランドスケープを描いていたのが印象的であった。

（たなか なおと）

文1：田中直人「ニュータウンの計画理念の実践とその評価に関する研究—西神ニュータウンを事例として」(学位論文：東京大学)



ハロウィンで賑わいの若者たちとワンちゃん



リバーモールに立ち並ぶ屋台と子供たち



水辺を感じさせるマリnpark駅からの風景

芦屋浜シーサイド タウンに行く

田中直人

島根大学大学院特任教授
博士（工学）

芦屋浜住宅団地は、大阪湾の海浜埋立地の一角、芦屋市の南に位置する。1972年に構想されたプロジェクトのひとつで、人口2万人の団地として計画された。日本の住宅産業の近代化をめざし、160社が参加するコンペで、もっとも斬新で、画期的で、実用化されている技術、実現性の高さが評価されたASTM（アステム）グループの提案が選ばれた。（A＝芦屋、S＝新日本製鉄、T＝竹中工務店、高砂熱学工業、M＝松下電工、松下興産の頭文字）。地域暖房給湯システムを各住戸に装備するなど当時のテクノロジーやディテールがいっぱい盛り込まれた建築界で注目されたプロジェクトである。民間の共同企業体と、国・県・市、公団・公社の官民一体で、1982年に全街区完成している。まちびらきからの年月の経過とともに、街がどう変化したか、その後、南に新たに計画、建設された南芦屋浜によってどう変わったのか、気になる想いを抱きながら現地を訪ねた。

秋晴れの11月、現地を訪問することにした。最寄駅の阪神本線「芦屋」駅を下車する。数人の高齢の婦人たちとともに団地までのバス



高層地区の案内図

に乗り込む。芦屋川沿いの景観や緑濃い戸建て住宅地を抜けて、約10分で「センター」停留所下車。いきなり目の前にそそり立つ高層住宅。巨大な構造体は昔見たままであった。住棟の無機質な表情とは異なり、公園や水辺などかなり緑豊かな自然がいっぱい。住棟配置は公園を中心に円弧状に配置され、緑を囲んで住棟が建っている。住棟配置もランドスケープも機能的で当時からの姿がそのまま存在している。中には外部をすっぽりシートで覆われた工事中の棟もある。年月を経て改修しているという。まずは現状をたずねようと株式会社兵庫県公社住宅サービスの芦屋浜管理事務所に足を運ぶことにした。対応していただいた所長から話を伺う。現在の住宅に対する要望に応える建築の建て替えはほとんど不可能な状況。将来の変化に対応した計画であればよかったがそれは無理とのこと。駐車場の設置率も当初の計画は30%であったが、近年の物件は100%が常識。別敷地に確保したが、やはり近くにないと高齢者も多く不便であるとのことだった。豊かな緑の街並みについて触れると、当初から公園や街路に計画された豊かな植栽環境は素晴らしいが管理的には量も多くて手間が大変ということであった。当初から話題になった住棟内に計画された空中庭園は最初か



緑濃い戸建て住宅群の街並み

らそこで遊ぶ子供たちの姿はなく、住棟に囲まれた公園や広場を利用しているが、基本的に外部で遊ぶ子供は少ないとのことであった。団地の南側には、阪神・淡路大震災の震災復興公営住宅団地として南芦屋浜団地ができています。震災当時に完成寸前だった埋立地の土地利用計画を変更して計画・実施されたという南芦屋浜団地は、震災から3年後に竣工し、その後のマリナ、住宅地や商業施設が整備されている。これまでの埋め立て住宅団地にはない自然豊かな景観演出のもと、環境デザインの工夫が見られる。そこで、南側に建設された南芦屋浜についてその影響を尋ねると、もともと芦屋浜シーサイドタウンにはグルメシティの入っているショッピングセンターやスポーツセンター、郵便局や銀行などの施設も計画されているが、唯一現在、住民の食料や日用品の購買施設として残ったダイエーがどうなるか心配とのこと。車で南芦屋浜まで出かける傾向が目立ち、高齢者にとっては簡単に外食などができるところがほとんどない状況である。もっと身近なところに利便性の高い魅力的な施設が立地してほしいが困難な状況である。今後の高齢化の進展に対応したまちづくりが課題であると考えられる。

（たなか なおと）



そそり立つ高層棟住宅と緑豊かな街並み



空中庭園には子供の姿はなかった



震災から後に建設された南芦屋浜団地にはマリナなども配置

ルポ

3

南港ポートタウン
について

赤尾大樹

大阪大学大学院工学研究科
大学院生

大阪湾に浮かぶ南港において1977年にまち
びらきされたニュータウン、「南港ポートタ
ウン」。未来型の新しい街を目指し、高層住宅
群、ノーカーゾーン、新ゴミ空気輸送システ
ム、豊かな緑などがマスタープランに盛り込
まれ、今までとは異なる街づくりが行われて
きた。現在、その南港ポートタウンにおいて、
当初計画されていなかった「農園」が人気を
博している。

この街は4つのエリアに分かれているのだ
が、各エリアにおいて住民たちが主体となり、
公園や空き地を農園に作り変える動きが見ら
れる。どの農園も非常に好評であり、中には
利用待ちが発生しているものも存在する。町
会や老人憩の家における従来型の住民活動が
縮小していく中で、農園という新しい形の住
民活動が拡大しつつある。その理由の一つは、
活動が屋外で行われており、視覚的にオープ
ンになっているからであろう。それによって
誰でも気兼ねなく声をかけられ、活動に参加
できるような雰囲気があるからだと思われる。
農園利用者に話を伺った際、「私のように町会
やPTAなどの地元での活動に参加してこなか
った人でも、ここでの活動を通して地元住民と
のつながりを持てるのは良い」と言われていた
ことが、非常に印象的であった。また、農園の
つながりは利用者だけにとどまらない。小学校
で授業の一環として農業体験に用いられ、利用
者以外の住民を巻き込んだパーティが開催さ
れるなど、農園を通して大きなネットワークが
醸成されつつあるように感じる。

高層住宅に囲まれた農園という一見違和感

を覚える光景であるが、家の近くで人と自然と
に触れ合える環境があることは、高齢者にと
って大きな役割を果たしているのではないだろ
うか。農園は高齢化の進むニュータウンにと
って必要不可欠なものになるのかもしれない。

(あかお だいぎ)



ルポ

4

バブル経済の崩壊に
伴って計画とは
大きく異なった
「りんくうタウン」

増田 昇

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授
研究科長 農学博士

りんくうタウンは関西国際空港の開港に
伴って、直近の対岸部に空港の支援とともに
地域環境の改善を図ることを目指した大阪
府による海浜埋め立てのまちづくりである。



当初計画案の模型写真
南大阪湾岸整備事業土地利用計画委員会報告書
(平成元年4月)より

1989年4月には「交流とハイ・アメニティに
あふれる臨空都市の形成「りんくうタウン」
という土地利用計画書が公表され、1990年か
ら企業用地の分譲がはじまり、1996年9月に
はまちびらきが行われた。

泉佐野市域に位置するりんくうタウン駅周
辺の北地区が中心地区を担い、大規模な商業
業務ゾーンとシンボル緑地、空港関連産業
ゾーンが計画された。その北側外延部には流
通・製造・加工ゾーンとマリナー、南側外延
部には工業団地と住宅関連ゾーンも計画され
た。その他、田尻町域に位置する中地区と泉
南市域に位置する南地区は主に工業団地ゾ
ーンと海に面した緑地、主に緩傾斜護岸が計
画された。しかし、用地分譲が始まって間も
ない1991年3月には、いわゆるバブル経済の崩
壊とその後の失われた20年といわれる低経済
成長期に直面することとなり、このまちづく
りは計画とは大きく異なっていく。

空港連絡道路から眺めるゲートタワービル
はシングル棟で不安定に佇んでおり、計画か
らの齟齬を象徴しているのではなかろうか。
飛行機の発着便数も伸び悩み空港からのイン
パクトも弱く、国際的なビジネス・コアやカ
ルチャー・コアとは程遠い街となった。アウ
トレット・モールやプレジャータウン等の低密
度の商業施設が立地し、あたかも暫定利用に
よる仮設都市の様相を呈している。各ゾーン
がデッキで結ばれた立体都市の実現も断念せざる
を得ない状況にある。海浜を利用した魅力ある
ウォーターフロントの形成にも至っていない。



りんくうゲートタワービル

このような中、2003年4月からは事業用定期借地方式が導入され、流通・製造・加工施設とともに工業団地は徐々に定着することとなり、現状では用地の約98%が契約されている。工業団地は主に関連市域内から移転されたものであり、地域生活を支えるショッピング・センターの立地とともに地域環境の改善には一定の役割を果たしたと言える。一方、空港関連産業と新たなライフスタイルを営む住宅関連施設の立地はほとんど進まなかったと言える。中心地区への大学や研究機関、市民病院等の立地は当初のまちづくりとは異なっているものの、これらの立地を活かして2012年3月には国際医療交流拠点づくり地域活性化総合特区に認定された。また、このところのインバウンドの急速な増大に伴ってにぎわいも見せ始めている。

折しも、2016年の秋にはまちびらき20周年を迎えた。先行投資された十分な都市インフラとインバウンドの増大に伴う空港からのインパクトやグローバル社会への機運の高まりを背景に、仮設都市ではない本来の「成熟した臨空都市」へと舵を切るために、全てのステークホルダーの参画の下で知恵を絞る段階に来ていると言える。

(ますだ のぼる)

ルポ

5

千里ニュータウンの計画が遺したもの

吉村英祐

大阪工業大学工学部建築学科教授
博士（工学）

千里ニュータウンは開発面積約1,160ha、計画人口約15万人の、日本で初めての郊外型大規模宅地開発事業である—このことは、千里ニュータウンの解説文に必ずと言っていいほど書かれているので、知っている方は多いで



万博前の会場敷地と周辺（1966年頃？）。万博会場予定地は造成前の原野で、千里ニュータウンの北千里、千里中央、新千里南町や阪大吹田キャンパスもまだ地図に載っていない



万博直前の会場周辺（1970年）。万博会場は完成時を示す。北大阪急行が千里中央（仮駅）から万国博中央口会場まで延びている（万博閉幕後に廃線）。千里ニュータウンは1970年3月に事業を完了した

図版出典：都市住宅102（鹿島出版会） 1976年4月号p.73 南條道昌／都市計画設計研究所

あろう。だが、計画当初は千里丘陵以外に生駒山麓、枚方地区、泉南地区、羽曳野地区、泉北地区が計画候補地にあげられていたことは、あまり知られていないのではないだろうか。適地をめぐる激しい議論が交わされたが、大阪市の中心部から10kmあまりという距離、国鉄（現JR）や阪急が近くを通っていること、名神高速道路・中央環状線・中国自動車道が計画されていることなどから、最終的に千里丘陵が選ばれたのは、賢明な判断と言える。

ところで、大阪府開発構想案（1956年10月）を見ると、開発対象区域の面積は2,500haと現在の2倍以上あり、東は現在の万博公園の敷地を含み、東南の境の一部が名神高速道路に接している。また、日本住宅公団も独自に京都大学西山研究室に「北大阪丘陵地帯の開発計画に関する研究」を委託していたが、

こちらは開発対象区域面積4,000haで東側が名神高速道路まで広がっており、大阪府の構想以上に壮大な計画であった。その後、様々な経緯により現在の案に大幅に縮小されたが、開発対象区域から外れた東側の一部は大阪万博（EXPO'70）の会場や大阪大学吹田キャンパスとなり、全面的な乱開発を免れた。大阪万博の会場跡地は万博記念公園として整備され、太陽の塔は千里になくてはならないシンボルとして、ますます存在感を高めている。

千里ニュータウン構想は大幅に縮小されたが、千里丘陵は文化・学術・芸術、そしてスポーツの拠点として発展を続けている。今こそ千里ニュータウン計画が遺したものをどのように継承し、その歴史とともに次世代に伝えていくべきかを真剣に考えなければならない。

(よしむら ひでまさ)

ルポ

6

まちづくりルールが進める住環境デザイン

千里ニュータウン

守井 辰

株式会社日建設計
プロジェクト開発部門計画部
主管

マンションの建て替えが進む千里ニュータウンでは、住環境の保全を目的としたまちづくりルール（豊中市：「豊中市千里ニュータウン地区住環境保全に関する基本方針」、吹田市：「千里ニュータウンのまちづくり指針」）が建て替え時に適用されている。本稿では、このルールが固有の住環境デザインを進めていることをレポートしたい。

典型例としてとりあげるのは、千里中央駅の徒歩圏に位置する新千里東町である。新千里東町は、千里ニュータウンの中で戸建住宅がない唯一の住区で、千里中央地区と近隣センターを結ぶ緑道のネットワークにより、歩車分離が徹底されている。ニュータウン建設時の地形をいかした宅地造成が功を奏し、緑豊かな自然環境の中にマンションが立地しているように見えるのが印象的だ。既に6つの分譲マンションと公社賃貸マンションが建て替えを完了し、府営住宅も建て替え中であるため、階段室型マンションが立ち並ぶいわゆる団地の風景は、UR住宅団地以外では見られなくなっている。

この新千里東町で適用されたまちづくりルールは、用途地域上の容積率が200%の敷地において、基準容積率をいったん150%に下げ、空地や緑地を設ければ容積割増を認める、という構成をとっている。駐車場部分も屋上緑化すれば容積割増の対象となる空地として認める、という規定が設けられたことにより、大多数の建て替え団地にて屋上庭園が整備さ

れている。

緑豊かで起伏に富む新千里東町では、複数の団地の駐車場の屋上庭園と公園・緑地の緑が視覚的に連なり、質の高い住環境が形成されている。このクオリティに「住環境保全の基本方針」は大きく寄与しているのだ。同方針は、剥き出しの駐車場が風景の構成要素になることを阻止したばかりか、面的な広がりをもつことによって屋上庭園が地区レベルの固有の住環境をつくりだしているというのが筆者の評価である。

（もりい しん）



駐車場屋上に設置されたアプローチ空間
（奥に見える2つのマンションは別のマンション）



駐車場の屋上庭園が連なる風景

ルポ

7

走って暮らせる街
千里ニュータウン

飯田 匡

大阪大学大学院工学研究科講師
博士（工学）

自転車ブームである。生活の足としての自転車は、以前から広く普及しているが、近年は趣味として自転車に乗ることや、健康や省エネを意識した自転車の利用が増えているという※¹。街なかでロードバイクやクロスバイクと呼ばれる細身のスポーツ車を見る機会も多くなった。かく言う筆者も、数年前にロードバイクを購入し、ふだんの通勤はもちろんのこと、週末も時間があれば、あちこち走りに行っている。

一方で、自転車利用のための環境は未だ十分に整備されているとは言えない。基本的に自転車は歩道ではなく車道を走らなければならないが、車道における自転車レーンの整備が追いついていない。ブームとともに、交通事故件数に占める自転車が絡む事故の割合も増えている※¹。

趣味や健康増進のための自転車利用の環境としては、ロードバイクで快適に走れる専用道を整備することが必要であるが、生活圏内の日常利用時に、より安全・快適に走れる環境の整備も重要である。

筆者は千里ニュータウンに接する街に住ん



写真1



写真 2

でおり、ニュータウン内もよく自転車で走る。そこで本稿では、自転車乗りの視点から千里ニュータウンの走行環境を紹介したい。都市計画や建築計画ではあまり顧みられてこなかったように思われるが、自転車の走行環境から学ぶこともあろう。

平成11年に国土交通省により、生活の諸機能がコンパクトに集合し、身近な場所で充実した生活を実現することを目指す「歩いて暮らせる街づくり」が提唱された。千里ニュータウンにおいても、街開きから45年を経た平成19年に、「千里ニュータウン再生指針」が策定され^{※2}、その中で取り組むべき課題の一つとして、「歩いて暮らせるまちづくりのための交通環境整備」が挙げられた。千里ニュータウンは当初から近隣センターを中心として、歩車分離を徹底した歩いて暮らせる街づくりを目指していたはずであるが、その後の社会状況の変化により、歩いてだけでは暮らしにくくなってしまったということが背景にある。

「交通環境整備」の基本的な考え方の中に、コミュニティバス等の公共交通システムの検討とともに、安全で快適な歩行者、自転車中心の街づくりがある。自転車の走行環境については、「恵まれた道路空間の活用といった、環境整備に関する取り組み方法（ネットワークの検討や整備すべき路線の選定など）について検討」することになっている。



写真 5



写真 3

その後の評価を見る限り、優先度の高い歩行者空間や駅周辺における取り組みは進められているが、自転車走行環境についてはまだまだこれからといった様相である。以下に千里ニュータウンにおける自転車の走行環境の実態を紹介する。

千里ニュータウン内には観光名所といったものはほとんどないが、自転車で快適に走ることのできる場所はいくつも挙げることができる。まずは、戸建て住宅エリアである。車で走ると袋小路になっていても、歩行者用の通路が通っていて（写真1 津雲台）、自転車でもほぼ歩行者と同じように縦横に走ることができる。一部、高低差があるため階段となっている通路もあるが（写真2 津雲台）、10Kg少しのロードバイクなら、片手で担いで階段を昇り降りすることもさほど苦にならない。建て替えられたモダンな住宅も多く、それらを見ながらゆっくり走るのが楽しい。

集合住宅エリアには整備された遊歩道がある（写真3 新千里東町）。この道は千里中央に接続する道として、自転車の利用も多く、またジョギングをする人も多い。千里ニュータウンではいたる所で公営の低層集合住宅が高層集合住宅に建て替えられているが、建て替えられた敷地内は、外部の住民が自由に歩けるような遊歩道が整備されることはほとんどなく、以前は通ることのできた所が通れなくなるのは残念で



写真 6



写真 4

ならない。

ニュータウン内の幹線道路の一部は、自転車の通行も可能なゆったりとした歩道が設けられている（写真4 新千里東町）。場所によっては歩道沿いにストレッチなどができるような健康器具が設置されており、ランナーも多く見られる。

千里ニュータウンの中央に位置する千里中央公園内は、緑豊かで広々とした通路が巡らされており、ポタリング（自転車でのゆったりとした散歩）には最適だ（写真5）。ただし、歩行者も多いので注意は必要。

写真6は、街路樹として植えられたタイワンフウの美しい紅葉でよく知られるようになった、藤白台の「三色彩道」である。最盛期には道路の両脇に見物客の路上駐車する列が並ぶのだが、自転車なら路上駐車を気にすることもなく、ゆっくりと楽しむことができる。千里ニュータウンはもともと緑が多いが、特に周囲を巡る緩衝緑地は、木々も大きく成長し、大変美しい景観を形成している（写真7）。緑地沿いもお薦めのコースである。

続いては、千里ニュータウンに隣接する万博公園である。万博公園を一周する通称、外周道路には自転車専用道が設けられている（写真8）。これは、大阪市役所付近から淀川左岸を経由し万博公園に至る、全長約20Kmの北大阪サイクルラインと呼ばれる大規模自転車道の一部である。大規模自転車道とは、河



写真 7



写真 8



写真 9

ルポ

8

「変わらない」
ニュータウン

泉北ニュータウン

鈴木克彦

京都工芸繊維大学大学院教授
工学博士



泉北ニュータウンは、千里ニュータウンに続いて1963年に事業決定した堺市に立地するニュータウンである。泉ヶ丘・榎・光明池の3地区16住区から構成されている。1967年泉ヶ丘地区の「まちびらき」から50年、千里ニュータウンでは団地建て替えや宅地の細分化等が進み当時の計画理念は失われつつあるが、泉北ニュータウンは開発当時とほとんど変わらない佇まいを維持している。その理由は泉北の立地がデベロッパーにとって魅了がないことが大きい。泉北のまちを愛し、開発の幻想に惑わされなかった人々の取り組み

も見逃せない。その一つの成果として、集合住宅団地では建て替えではなくリノベーションという方向を選んだ。府公社の茶山台団地で試みられている子育て世帯向けのリノベーションは、ニュータウンに新たな息吹をもたらすであろう。そして戸建て住宅地では、良好な住環境を維持するために多くの地区で住民自らが「建築協定」を締結している。千里ニュータウンでは建築協定地区は9地区（吹田市）のみであるが、泉北ニュータウンでは35地区（堺市）も存在するのである（平成28年5月末現在）。その主な狙いは宅地分割の阻止である。不動産業者は宅地分割できないと宅地価格が下がると言うが、現実には建築協定がある地区の方が宅地の坪単価を維持していると住民たちは訴える。

市場価値を優先した千里ニュータウンに対して、泉北ニュータウンでは生活価値を優先した。泉北ニュータウンは、多様なニーズをインクルーシブしつつ「変わらない」姿勢を大切にすることで資産価値を保っているのである。

（すずき かつひこ）

ルポ

9

近隣住区をこえる
計画へ

洛西ニュータウン

安枝英俊

兵庫県立大学環境人間学部准教授
博士（工学）

近隣住区を単位として計画されたニュータウンでは、居住者の生活や交流が住区内に完結しがちである。洛西ニュータウンでは、10年前頃から、景観まちづくりや子育て支援といったまちづくり活動を、他の近隣住区の居住者と始動する動きがみられるようになった。近年では、大枝・大原野といったニュータウ

※1 自転車の安全利用促進委員会： <http://jitensha-anzen.com/problem/problem02.html>

※2 千里ニュータウン再生指針： <http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/3158/00000000/03shishin.pdf>

※3 国土交通省： <http://www.mlit.go.jp/road/road/bicycle/road/index.html>

（いいだ ただす）

ン周辺地域の朝採れ野菜の販売や、加工品の開発に関わるなど、ニュータウン居住者の活動は、近隣住区をこえるだけでなく、ニュータウン外にも拡がりつつある。

ベッドタウンとして役割を終えつつあるニュータウンにとって、居住者の活動が周辺地域に拡がれば、ニュータウンは周辺地域の連携拠点という新たな役割を担う可能性がある。ニュータウンを再生するための計画は、近隣住区、ニュータウンという枠組みだけで考えるのではなく、周囲のまちの状況をみながら、検討する必要がある。

洛西ニュータウンには、4つの近隣住区の小学校と公園をつなぐ緑道がある。この緑道は、これまで植栽の手入れなどが十分にされていなかったこともあり、約40年間、あまり利用されてこなかった。現在の洛西ニュータウンでは、多くの居住者が退職、あるいは、子育てを終了しており、1日の多くの時間をニュータウンで過ごしている。これまでと同じように近隣住区で完結した生活や交流をするだけではニュータウンでの生活を満喫することはできない。今こそ、4つの近隣住区をつなぐこの緑道を活用しながら、居住者の生活や交流が、近隣住区をこえることを促す計画を再考する必要がある。

(やすえだ ひでとし)



ニュータウン居住者による周辺地域の朝採れ野菜や加工品の販売



4つの近隣住区をつなぐ緑道

ルポ

10

ニュータウン再生の鍵となる分譲マンション団地の更新

明舞団地

守井 辰

株式会社日建設計
プロジェクト開発部門計画部
主管

明舞団地は、神戸市と明石市に跨る南斜面地に開発された面積約197haのニュータウンである。入居開始は昭和39年。平成15年度から県の支援の下でニュータウン再生の取り組みが進められている。センター地区や戸建住宅や県営住宅の更新はそれなりに進んでいるが、UR住宅と分譲マンションの団地の更新はこれからである。UR住宅と分譲マンションの住戸数は、各々エリア内の1/4を占めており、これらの団地再生が明舞団地再生の鍵になるように思われる。紙数に限りがあるので、ここでは分譲マンション団地に絞ってレビューしてみたい。

明舞団地内の分譲マンションは、総戸数が約2,700戸である。ほとんどが階段室型の5階建て住棟が平行配置された団地で、大半が築45年を超えている。一般に老朽分譲マンションでは、階段室型という形式や住戸面積、躯体厚、天井高等の骨格的な部分を改善して居住水準を向上させるには、建て替えるしかない。賃貸なら減築や2戸の住戸を1戸にする等の手を打つこともできるが、区分所有マンションではそれらは建て替えと同等の行為になる。居住水準の改善はニュータウン再生に不可欠なことから、分譲マンションの建て替え促進は必須と考えられる。しかしながら、明舞団地では震災によるもの以外に建て替えは実現していない。明舞団地内の分譲マンション団地は、綺麗に管理されているが、厳しい将来を抱えているのだ。

大規模な分譲マンション団地は、全体を一気に建て替えることはかなり難しい。そのため、部分的な建て替えを行うという方法が目されている。明舞団地では部分建て替えの事例があるので、それを紹介したい。

明舞団地内で唯一の分譲マンション建て替え事例である神陵台東住宅53号棟（被災マンションの再建）は、一団地認定を受けている団地型マンションの部分建て替えを行っている。訪れてみると、5階建ての階段室型住棟が連なる一角に、違和感のない外観のエレベーター付6階建てマンションが再建されており、団地としての住環境維持を尊重する意図が見て取れる。外部から見ると、一棟だけ建て替えたとは気が付かないかもしれない。（写真参照）建て替えにより住戸の広さのバリエーションが増え、居住水準も向上している。分譲マンション団地再生のモデルになり得ると思うのだが、後発が続いていないようだ。資料によると、神陵台東住宅53号棟の場合、事業費の22%の補助金がついても戸当たり負担額は1,300万円以上になったとのこと。部分建て替えという選択肢のハードルは高く、郊外の分譲マンション団地再生の難しさを改めて感じる次第だ。

(もりい しん)



建て替え棟（手前）と既存階段室型住棟が並ぶ様子

	建 替 前	建 替 後
事業主体	兵庫県住宅供給公社	神陵台東住宅53号棟再建組合（事業代行：東急不動産）
建設年	昭和45年	平成8年5月着工 平成9年竣工
戸数	30戸（全体480戸）	35戸
建築面積	約440㎡	620㎡
延床面積	約2,200㎡	2,990㎡
構造・階数	PC造、5F	RC造、6F
棟数	1棟	1棟
住戸専有面積	64.28㎡	69.14～87.79㎡

※団地内通路の位置変更禁止、階数は6階まで、土地持分は変更しない、管理形態が変わる場合は組織を独自に作るなどの建築条件が設定された。

ルポ

11

テーマタウンの
これから

北摂三田ニュータウン

松田奈緒子

アトリエ805 主宰
大阪産業大学 非常勤講師
帝塚山大学 非常勤講師

大阪からJRに揺られトンネルを幾つもくぐり、都会の喧騒から抜けた頃、新三田駅に着く。何もない駅だけど、学生が多いのは関西学院大学が新たにできたからだ。バスの中も学生で一杯。いくつかのニュータウンを越え、関学の校舎を通り越したら目的地に辿りつく。

兵庫村。ここは、かつて何度も足を運んだ地だ。母が大変気に入り引越しも考えていた。広々とした区画に門扉はなく、代わりに目線を遮ることのない低い生垣と、当時では目新しいグリーンベルトが各住戸の前に拡がっていた。すぐ近くのワシントン村が洋なのに対し、こちらは和にこだわり、兵庫県産の木を使い地元の工務店がつくるというふれこみで、抽選に当たらないと買えないほどの人気ぶりだった。

あれから24年。久しぶりに訪れて驚いた。当時の光景とほとんど同じだったから。すぐ

近くに広がっていた売り地は、全くそのままなのである。経済の影響をこれほどまでダイレクトに受けているとは思ってもいなかった。あの高揚した気持ちはどこにいったのだろう。たとえ都心から遠くとも、背中を押されるように誰もが土地を求めていた時代。街は今後、もっと発展していくと疑わなかった。

高邁なる理想をかかげると、街も行き詰るのか。ワシントン村を散策中に、上品な老婦人に声を掛けた。こちらの懸念とは裏腹に、彼女は「静かで、空気がきれいに住みやすい。管理組合がしっかりしていて、街並みコンクールで2位に選ばれ、立派な人がたくさん住んでいる」と、街に誇りを持っておられる様子が窺えた。

売り地にはためく旗に寂しさを感じたのは、私がここに住まない傍観者だからだろうか。

(まつだ なおこ)



兵庫村とワシントン村は、兵庫県がカルチャータウンとして開発したニュータウン。双方の街の入口から地区センター予定地を挟んで、関西学院大学と兵庫県立の高校が見える。ただ、街の手前にあるため、学生たちは街まで来ることはなく、バスに乗って新三田方面に帰ってしまう。



24年前と変わらない光景の兵庫村。売り地の旗はためく。当初は建売が基本。現在は、売建に変化している。当時とは違う趣向の住宅も幾つか見られる。一方、ワシントン村では、住民自らが街の景観を守ろうと動いているらしい。



当時、兵庫村のお目当てだった家（左）。グリーンベルトと並木道の木々が生き茂り、以前よりもしっとりとした街並みに成長している。

ルポ地一覧



連載 No.553

法令コーナー

自分らしい暮らし
「泉北スタイル」の実現
—リノベーションによる泉北
ニュータウンへの若年世代の
居住促進—

平井葉子

堺市建築都市局ニュータウン地域再生室

はじめに

堺市南区に位置する泉北ニュータウンは、高度経済成長期の住宅需要に応えるため、大規模な計画的市街地として整備され、緑豊かな住環境を有するまちとして成長してきた。

開発から約50年が経過し、社会環境の変化とともに人口減少、少子・高齢化の進展、住宅や施設の老朽化など、様々な問題も現れ始めている。これらの問題は、一定期間に大量に入居したニュータウンの特性として、その課題がより明確に、また今後急速に現れてくるものと考えられる。

泉北ニュータウンの住宅構成は、約58,000戸の開発のうち、約半数が大阪府及びUR都市機構、大阪府住宅供給公社の公的賃貸住宅、約4分の1が分譲の集合住宅、残りの4分の1が戸建住宅という構成になっている。民間の賃貸住宅は約1%にとどまっていることから、泉北ニュータウン内の賃貸住宅の大半は、公的賃貸住宅が占め、さらにその約8割が築40年を越えている。

人口減少が続く泉北ニュータウン、とりわけ20代～30代のタウン外への転出が顕著になっているなか、そういった世代にとって魅力的に感じる賃貸住宅を創出し、どれだけ転入促進につなげるかが課題となっている。

国土軸から離れた大阪南部の立地において、駅近エリア以外では民間事業者による分譲マンションの供給は進んでいない。そういった状況から、当該地域における公的賃貸住宅においても、スクラップアンドビルドによる再生は進みにくく、本市は、地域魅力を広くPRすることとあわせて、ストック活用型の再生を中心に進めている。

多様な世代が暮らすまちの実現へ

本市は、平成22年5月に「泉北ニュータウン再生指針」を策定し、その中で目標とする泉北らしい暮らし像「泉北スタイル」を掲げた。多様な世代が暮らし続けることができ

るまちをめざし、自分らしい住まい、自分らしい暮らし「泉北スタイル」の実現に向け、若年世代に魅力的なデザインにこだわった住宅の供給に取り組んでいる。

団地の住戸リノベーション

これまでの公的賃貸住宅は、リフォームして一定の水準を維持してきたが、近年、性能を向上させ付加価値を与えるリノベーションでなければ、若年世代を惹きつけることが難しくなっている。本市は、若年世代に魅力的な賃貸住宅を創出し、泉北ニュータウンへ若年世帯の誘引を図るため、平成26年度から大阪府住宅供給公社と連携し、先進的住戸リノベーションモデル事業を開始した。

本事業は、民間事業者及び府公社、本市によって、府公社住宅の住戸リノベーションを実施し、若年夫婦・子育て世帯を優先的に募集することとしている。本市は工事費の一部を負担している。

住民参加型リノベ「DIY@SCHOOL」

平成26年度は、住戸リノベーションの工事過程を市民参加型ワークショップ「DIY@SCHOOL」(写真1)によって進め、45㎡のDIYリノベーション住戸を5戸創出した。住戸の解体から始まり、壁の組み立て、フローリング張りなど全21工程を市民参加型で進めた本事業では、総勢約500人参加のもと住戸リノベーションを完成させた。



写真1 DIY@SCHOOLの様子

DIYリノベーションを実際の住戸で体験できる機会は少なく、「DIY@SCHOOL」を実施したことにより、自宅を自分らしくカスタマイズしたい大人が泉北ニュータウンへ遊びに、また遊びに来る機会を創出し、新たなコミュニティ形成に寄与した事業となった。

ゆったり暮らす「ニコイチ」

平成27年度は、45㎡の住戸2戸を1戸にリノベーションする「ニコイチ」(写真2)を実施し、若年世代にとってもゆったりと暮らせる90㎡の住戸を3戸創出した。

団地と言えば、狭いという印象を持つ若年世代も多い。ニコイチは広い賃貸住宅ということで、若年世代からの注目度が高まった。募集の平均倍率は6倍となり、首都圏からのUターン世帯を呼び込むなど、着実に若年世帯の誘引につながっている。



写真2 「ニコイチ」プラン (H27)

新たなスタイルの住戸を創出

3年目を迎える今年度は、ニコイチにさらにデザイン性・機能性を求めたリノベーションを実施している(写真3)。ウッドバルコニーのある開放的な家や2つのリビングを持つ独創的な家など、4種の異なるスタイルのニコイチを6戸創出する予定である。平成29年春入居開始で募集を予定しており、今年度のプランにも注目していただきたい。



写真3 「ニコイチ」による団地断面イメージ (H28)

空間の再生からエリアの価値向上を

泉北ニュータウンにある公的賃貸住宅、いわゆる団地は、かつては憧れのまちにある魅力的な住戸であった。若年世代から選ばれる賃貸住宅であったが、今の若年世代から見た印象はどうだろうか。古い、狭い、住みにくい、そんな声もある。

しかし、今実施しているさまざまな団地リノベーションの取り組みが発展していけば、子どもが安全に遊べるゆとりある外部空間とバリエーション豊かな住戸プランをもつ団地は、泉北で自分らしい暮らしを実現したい若年世代から、選ばれるようになるのではないだろうか。

本市では、今後も民間事業者等と連携しながら、団地内へ新たな魅力を取り入れていく取り組みなどを推進し、まちの価値を高めていく。

(ひらい ようこ)

平井葉子

平成24年4月入庁

連載

建築と社会を考える

NO.15

建築と高齢化

住宅と施設のマネジメント

森 一彦

大阪市立大学大学院生活科学研究科教授
博士（工学）、一級建築士

森 一彦

1956年岐阜県生まれ。

1982年豊橋技術科学大学大学院建設工学専攻修了。1986年豊橋技術科学大学建設工学系助手。1995年筑波技術短期大学デザイン学科助教授、その間（1997年）モントリオール大学研究員。1999年大阪市立大学大学院生活科学研究科助教授を経て同教授。著書に「認知症ケア環境事典」2009年、「Aging in Place 超高齢社会の居住デザイン」2009年、「空き家空きビルの福祉転用」2012年、「いのちを守る都市づくり〔アクション編〕みんなで備える広域複合災害」2013年、他多数。

中部建築賞、日本認知症ケア学会石崎賞、日本人間環境学会賞、日本都市住宅学会賞業績賞、大阪市立大学優秀教育賞など。専門分野は、建築計画、福祉環境デザイン学。

はじめに

我が国は、2004年の人口ピークから人口減少と少子高齢化が同時進行し、50年後には6割の都市で人口が半減し、高齢化率40%以上になるなど、大きな社会構造の変化がおとずれる¹⁾。図1はその人口構成を示したもので、1950年のピラミッド型から2050年の逆ピラミッド型への社会構造変化に対して、建築業界の仕組みの変更が求められている。戦後から一貫して建設されてきた建物の空き家が急増する一方で、高齢者支援に加え、障がい者の地域移行、子育て支援などのための福祉施設の不足が進行している。

特に、2000年に介護保健制度が始まって16年、様々なケアサービスが生まれ、社会に定着しつつある一方で、団塊世代の高齢化などに伴って、2015年と2035年をみると要介護率の高い後期高齢者は1,646万人から2,245万人、独居高齢者は600万人から752万人、認知症高齢者は250万人から376万人など、サポートニーズはさらに増加することが予測されている（内閣府及び厚生労働省資料より）。

本稿では、高齢化に伴う建築の変容として高齢者の住まいと施設のこれまでとこれからを概観し、そのマネジメントのあり方について考える。

エイジング・イン・プレイス

多くの高齢者が住み慣れた住まいや地域に住み続けることを願っており、そのための仕組みが求められている。これは、我が国だけでなく、世界的にも注目されている^{2) 3)}。

新しい住まいや地域に移住することは、高齢者にとって大きな負荷（トランスファーショック）が生まれるのに対し、住み慣れた場所に住むことは、主体的な自立を促しQOL（Quality Of Life クオリティ・オブ・ライフ）物理的な豊かさやサービスの量、個々の身辺

自立だけでなく、精神面を含めた生活全体の豊かさと自己実現を含めた概念）を高めることにつながる。我が国の場合、高齢者の居住形態は、「持ち家（一戸建て）」が75.3%と最も高く、次いで「持ち家（分譲マンション等の集合住宅）」10.9%となっている。

特に2025年以降に後期高齢者になる大きなボリュームの団塊世代の持ち家率は86.2%と高い。居住意向をみると「今、住んでいる家に住み続けたい」72.0%、「今住んでいる家に住み続けるためにリフォームした」9.0%となっている⁴⁾。このように馴染みのある地域に住み続ける地域居住の指向が強く、地域での包括ケアニーズがより高まることは間違いない。

高齢者が住み続けるためのコミュニティの仕組みとして、歩ける範囲（約1km）内に、医療・福祉、子育てなどの日常生活サービスが集積したエリアを形成させ、快適な歩行者空間を確保した近隣環境の実現が重要である。いままでの新規開発中心の拡大型施策から、既存建物の再利用を含む地域再生施策に転換し、コンパクトで住みやすい新しい集約型都市構造の実現が模索され始めている⁵⁾。

近年、高齢化の進行とともに住まなくなった空き家が急増しており、空き家や空き店舗を地域で共有して福祉的機能に活用する福祉転用⁶⁾が地域の資源を生かし、街に活気を取り戻すため有効な手法であり注目されている。

介護のための住宅と施設

高齢者の介護は、高齢者住まい法と老人福祉法の下、居宅介護を前提とした住宅と施設介護の施設に分類される（表1）。居宅介護は、戸建て住宅や共同住宅のような自宅のほか、公営のシルバーハウジング、サービス付高齢者住宅、有料老人ホーム、認知症グループホームを対象としている。この基本的な考え方では、家賃とサービス料を別々に徴収することになる。施設

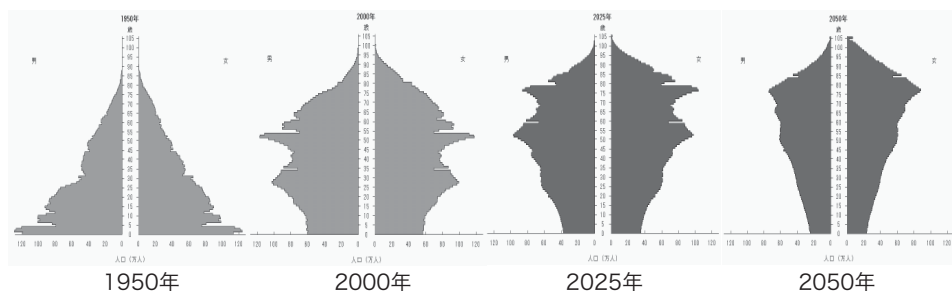


図1 社会構造の変化：人口減少と少子高齢化が同時進行し、福祉ニーズが増大する

介護保険 の関係	制度名称	専用 空間 名称	専用空間の 最低面積	現状の施設数 (住戸数、定員)	備考 [入居者像]
居宅介護	シルバーハウジング	住戸	25㎡/戸	23,298戸*	高齢者等に配慮した低所得者向けの公営住宅
	サービス付き高齢者向け住宅	住戸	25㎡/戸 18㎡/戸 (共同利用型)	4,625施設** (148,163戸) (H26.5時点)	高齢期の住まいとして入居。自立・要支援・要介護と幅の広い対象。
	有料老人ホーム (住宅型)	居室	13㎡/人 (個室)	4,323施設* (117,654人)	高齢期の住まいとして入居。住宅型と介護付の2種類(それらの併設もある)。
特定施設 介護	有料老人ホーム (介護付)	居室		3,115施設* (192,863人)	
認知症 介護	認知症グループ ホーム	居室	7.43㎡/人 (原則個室 (2人室可))	9,484施設* (141,941人)	認知症高齢者のための少人数単位で家族的な介護施設。
施設介護	新型特別養護 老人ホーム	居室	13.2㎡/人 (原則個室)	5,953施設** (427,634人) (H23時点)	常に介護が必要で、自宅での生活が困難な高齢者のための施設。
	従来型特別養護 老人ホーム	居室	10.65㎡/人 (4人以下)		
	介護老人保健 施設	療養 室	8.0㎡/人 (4人以下)	3,533施設* (318,091人)	リハビリテーションなど医療サービス提供。在宅復帰を目的

表1 高齢者の住み替える主な住居と施設

* : 介護サービス施設・事業所調査、厚生労働省、平成23年度
 ** : サービス付高齢者向け住宅の現状と分析、国土交通省、2014

介護には新型特別養護老人ホーム、従来型特別養護老人ホーム、介護老人保健施設などがある。

有料老人ホームの一部は、特定施設として認定を受けると介護付き有料老人ホームとなり、施設介護と同等のサービスが受けられる。これらは、それぞれに面積規準やキッチンやトイレなどの付帯設備規準が定められ複雑になっているが、約半世紀の間に時代に即して制度化されてきたもので、2011年のサービス付き高齢者向け住宅への統合など今後も状況に応じて改正されていくと思われる。

入居定員数で見ると特別養護老人ホームの約42.7万人、有料老人ホーム（介護付き、住宅型含む）の約31万人に続いて、近年急速な整備が進められているサービス付き高齢者向け住宅が15万戸近くになっている。サービス付高齢者向け住宅は、2011年の高齢者住まい法の成立とともに、急速な単身高齢者・夫婦世帯高齢者の急増に対応して、介護・医療と連携して高齢者を支援するサービスを提供する住宅として整備されている。

その供給は欧米各国に比べて立ち後れていた。高齢者の居住の安定を確保することを目指して、段差のない床、手すりの設置、廊

下幅の確保などのバリアフリー構造等を有し、介護・医療と連携したサービスを提供する国土交通省・厚生労働省の共管制度として創設された。これは、元気な高齢者も含めた住み替えの選択肢を広げたといえる反面、十分な介護体制が整わないままの高齢者向け住宅も多く今後の課題を残している。

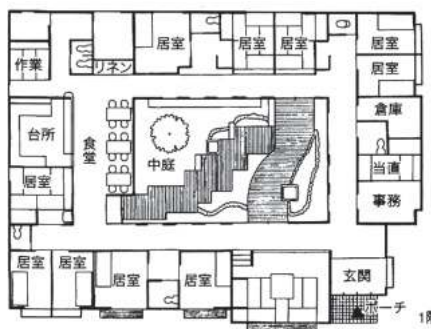


図2



写真1



写真2



写真3



写真4

図2 グループホームの事例。写真1は中庭、写真2は個室入口、写真3はダイニング、写真4はキッチンである。

認知症対応型グループホーム

認知症対応型グループホームは、2000年4月の介護保険法制定に伴い認知症の要介護高齢者のための共同生活の介護施設である。要支援2以上の認知症高齢者が少人数単位で居住して家族的な介護を行うことに特徴がある。少人数の家庭的な環境と地域住民との交流のもと、日常生活上の世話と機能訓練を受け、認知症の人が能力に応じ自立した日常生活を営むことを支援する。認知症の入居者がただ介護されるだけでなく、介護要員と共同生活を送ることにより、認知症の進行を遅らせることを目的としている。従来型の老人ホームにいた認知症高齢者の行動が落ち着き、病状が改善されたなど、各種の調査から環境の有効性が明らかにされた⁷⁾。

図2及び写真1～4は我が国の代表的なグループホームの事例である。落ち着いた中庭を廊下が囲み、その廊下にそって居室やディールーム、食堂、キッチンが並ぶ単純な構成であり、その分かりやすい構成が認知症高齢者に落ち着いた生活を提供している。

しかし、当初はある程度自立し、集団生活に支障がない認知症患者を対象としていたが、その後、居住者の重度化が進行し、比較的軽い認知症患者と重度認知症患者が共同生活を営むことになり、介護者側の負担も大きくなってきている。このような状況から高齢者の状況やそのリスクに応じて、適切な環境を用意することが求められている。そのため、地域内の病院や診療所、特別養護老人ホーム、

サービス付高齢者住宅など医療介護施設間で
の認知症ケアパス⁸⁾が不可欠になっている。

サービス付高齢者向け住宅と有料老人ホーム

近年、高齢者が自宅からサービス付き住宅に住み替えることも選択肢として捉えられるようになった。前述のように大きくは、高齢者住まい法のサービス付高齢者向け住宅と、老人福祉法の有料老人ホームの2つに分類できる。どちらも、自立から要介護までの幅広い高齢者を対象としており、利用者からみると実質的な相違ははっきりしないのが実情である。

さらにどちらも民間が主体で整備し管理運営するもので、利用料（もしくは利用権）や入居条件など様々であり一概に論じることが難しい。図3、図4のように、実態としては「元気な高齢者向けの住戸」と「介護の高齢者向けの住戸」との棲み分けがある程度進んでいると考えられている。

「元気な高齢者向けの住戸」（図3）は、居室となる専用部分に台所、水洗便所、収納設備、洗面設備、浴室を備えている（サ付住宅では居室25㎡以上）。一方、「介護の高齢者向けの住戸」（図4）は、共用部分に共同して利用するための適切な台所、収納設備または浴室を備えることにより、各戸に備える場合と同等以上の居住環境が確保されており、各戸に台所、収納設備または浴室を備えていない（サ付住宅では居室18㎡以上）。



図3 元気な高齢者向け居室 図4 介護の高齢者向け居室

サービスの内容は、医療、介護、安否確認、生活相談、食事提供、清掃洗濯などの高齢者支援サービスと住まいをトータルにすすめることを念頭に進められている。登録条件としては、ケアの専門家が少なくとも日中建物に常駐して、安否確認サービスと生活相談があればよく、これ以外のサービスの提供が課題

となっている。制度上、各種のサービス提供は事業者の裁量に任ざれており、ばらつきが生じやすく、医療・介護事業者との連携が不十分になるケースもある。

その結果、介護が必要となった場合に、再度の住み替えが必要となることも想定しなければならない。特に認知症高齢者が、サービス付高齢者向け住宅に円滑に入居するためには、きめ細やかな見守りや気付きが求められるが、ある程度大きな規模となる高齢者住宅では難しい状況がある。

したがって、サービス付高齢者向け住宅には、併設施設としてデイサービスや診療所、訪問看護ステーション、ヘルパーステーション、交流施設などの施設が付帯することが望ましく、その有無が高齢者のケアの質を大きく左右する。

日本版CCRC

近年、地方創生の政策とともに、日本版CCRC（Continuing Care Retirement Community）継続的ケア付き高齢者コミュニティの事業⁹⁾（図5）に関心が高まっている。これは高齢者が健康な段階から移住し、できる限り健康長寿を目指すことを基本に、「主体的な存在」として地域の仕事や社会活動、生涯学習などに積極的に参加・協働するための環境を整えるものである。すでに2014年度より「生涯活躍のまち」として37事業がスター

トしている。

この構想の成否は、都市圏の高齢者が住みたくなるような魅力的なコミュニティが形成できるかどうかにかかっている。それには、即席的な開発では達成できないことは自明であり、既存の地域資源を最大限活用して、それらと上手く融合するまちづくりが不可欠で、そのための計画法が必要となっている。

空き家の福祉転用

以上のような動きの中、空き家・空きビルを福祉的なサービス・機能に転用する「福祉転用」が注目されている。特に地域内のデッドスペースを住民自身で活用することで、地域共生や地域福祉につなげている先進的な事例も生まれている。一方で、既存不適格や違法建築のまま転用する事例など、適用除外規定の範囲内で改修する「劣悪な転用」も多く発生し、社会問題になっている。今、「円滑なストック活用」に加え「良質な転用への誘導」をはかるための地域資源の利活用マネジメントが求められている。

しかし、現実には「一用途一寿命」を前提に建築制度が整備されてきたため、転用前と転用後の間に様々なダブルスタンダードが生じ、地域資源の利活用の障害になっている。それらを解消するための協議調整の仕組みが求められている。

日本建築学会建築ストック法制度研究小委

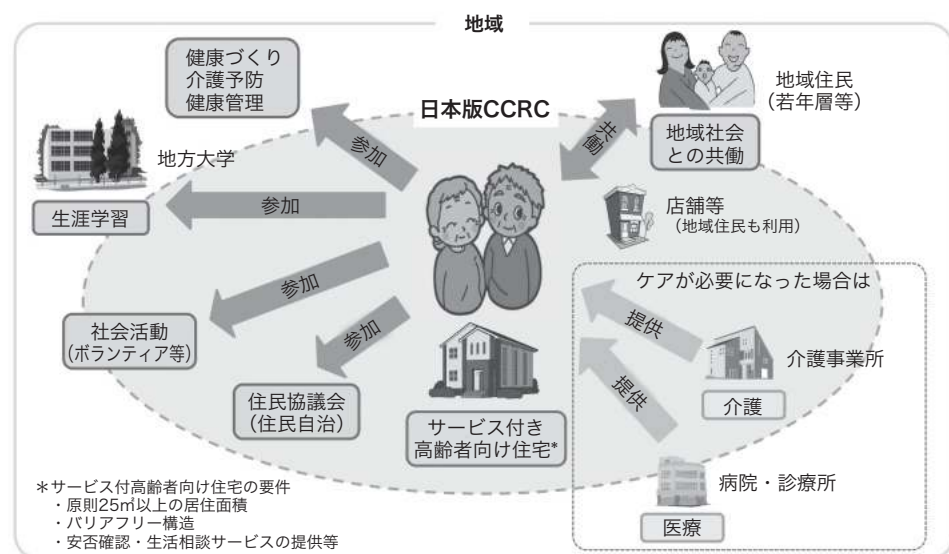


図5 日本版CCRCにおける高齢者の生活イメージ（案）⁹⁾

※事業の透明性・安定性の確保の方策：居住者の参画、情報公開、事業の継続性確保等
①健康でアクティブな生活の実現と継続的ケアの提供、②自立した生活ができる居住環境の提供、③居住者の参画の下、透明性が高く安定した事業運営によるコミュニティの形成を一体的に実現

員会¹⁰⁾は、良質の建築ストックの活用が進まない理由として「一定以上の改修等を行う建築ストックに対して、新築と同等の性能に既存適及することを求めながら、一方でさまざまな適用除外規定がある」というダブルスタンダードを指摘し、結果として「維持向上が義務付けられない程度に限定した安全でない改修」を誘導し、もしくは「建築ストックを活用する機会」を奪っていると述べている。その現状に対し、建築ストックの活用と安全性能の維持向上を両立させる仕組みとして、「適及の段階適用」、「総合的な協議調整」及び「情報公開」をあげている。

また、松村¹¹⁾は建設業の横断的研究会をとおして、コンバージョンにかかわる各種の技術検討を行った上で「利用の構想力」を提唱し、建築技術やコスト性能だけでなく、「利用者の生活経験に基づくリアルな要求と生活の場づくり」という利用者の立場に立った協議調整の重要性を指摘している。

具体的な福祉転用事例である西園寺（石川県小松市、社会福祉法人佛子園）は人口約10万人でわずかながら減少傾向にある行政区にある。地域コミュニティの核を担ってきたお寺が廃寺になったので、約3年間の地域との協議の後に、2008年福祉施設（538m²）に転用した。地域コミュニティセンター・高齢者デイサービス・就労継続支援B型、障害者生活介護を主な役割とし、温泉や飲食、駄菓子屋など地域に開いて年齢・障害を問わず、様々な住民等がやってくる施設が入っているところが興味深い事例である（写真5）。

この理由として、地域の真ん中にあり親し

まれたお寺であること、温泉を無料で近隣に解放したことなど、地域資源と地域福祉とをうまく融合させたことにある。また寺から福祉転用の建築の計画や技術上の問題、制度上の問題は、行政との丁寧な協議を重ねてクリアしている。

泉北ほっとけないネットワーク（大阪府堺市南区）は、開発から約半世紀を経た泉北ニュータウンの槇塚台地区（人口約7000人）で住民・NPO・大学・行政が相互連携する組織「泉北ほっとけないネットワーク推進協議会」を組織し、空き住戸と空き店舗を福祉サービス拠点に転用し、高齢者・障害者・子どもを含む地域住民生活を包括的支援するための安心居住・食健康のコミュニティサービスを提供している（写真6）。

具体的には空き店舗、空き住戸を活用して地域レストラン（近隣C.空き店舗、2店舗・計230m²）、まちかどステーション（近隣C.空き店舗、1店舗・58m²）、生活支援住宅（府営住宅空き住戸、7住戸・計300m²）、シェアハウス（戸建住宅、1住戸・134m²）を整備し、見守りをかねた配食サービス、昼食、居酒屋の提供、各種サークル支援、食健康相談、健康リハビリ支援、ショートステイなどきめ細やかなコミュニティサービスを展開している。

おわりに

いま日本社会は大きな曲がり角にあるが、その角を曲がると素晴らしい景色が見えるようにすることが肝要で、そのために知恵を出すことがプランナーや設計者の役割である。少なくとも団塊世代が後期高齢者になる2025

年までの今後10年間、パラダイム転換は続き、次世代にこそ、その風景を切り開く期待がかかっている。

施設ごとに細分化され、ばらばらになった機能、場所、人をつなぎ直し、社会に幸せと安心を取り戻すための「住宅と施設のマネジメント」の仕組みを作らなければならない。

人口減少によって使われなくなった地域の空き家を共有し、コミュニティで活用することで、その建物だけでなく、その周りの環境にも変化をもたらす。高齢者や障がい者そして子どもを含む多様なコミュニティで地域資源を未来につなぎ、その形跡を目に見える風景にするマネジメントが求められている。

（もり かずひこ）

参考文献

- 1) 「国土の長期展望－中間取りまとめ」国土交通省（国土計画局）、2011
- 2) エイジングインプレイス－超高齢社会の居住デザイン、大阪市立大学+大和ハウス工業編、学芸出版2009
- 3) What Are the Realistic Options for Aging in Community?、Robyn Stone、Vol. 37、No.4、Journal of the American Society on Aging、Winter 2013_14
- 4) 高齢社会白書、内閣府、2013
- 5) 国土交通省「医職住の近隣化」モデル事業2012
- 6) 空き家・空きビルの福祉転用－地域資源のコンバージョン、日本建築学会編、学芸出版、2012
- 7) 認知症ケア環境事典－症状・行動への環境対応Q&A、日本建築学会編、ワールドプランニング、2009
- 8) 認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）、厚生労働省、2012
- 9) 「生涯活躍のまち」構想最終報告、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部、2015. 12
- 10) 「建築ストック社会と建築法制度－防火避難規定の課題を中心に」日本建築学会編（建築ストック法制度研究小委員会）、技報堂出版、2013
- 11) 「コンバージョン－[計画・設計] マニュアル」、建物のコンバージョンによる都市空間有効活用技術研究会（松村秀一ほか）、エクスナレッジムック、2004



写真5 廃寺を福祉施設に転用。駄菓子屋など地域に開かれた機能を併せ持つ



写真6 泉北ほっとけないネットワーク。空き店舗などを活用してコミュニティサービスを提供

地域資源を転用した場所では、高齢者や障害者のみならず子どもや親など多様な人々が出会い交流する場面が出現する

連載 No.414

構造の頁

京都木材会館

～日本初 2 時間耐火部材による木造 4 階建てビル～

安達広幸 伊藤克彦

株式会社シェルター 技術開発部

建築の背景

京都木材会館は、京都市中京区の千本三条エリアで、JR山陰線「二条駅」の西側、交通至便の交差点に位置する。京都産木材の利用促進に取り組む京都木材協同組合の事務所の他、店舗、共同住宅からなる純木造による 4 階建てで、構造材、内外装材とも京都産杉・桧材を 100% 使用した、京都の景観条例にも適合する新たな京都の木造デザインを創出した建築物である。

1 階が「店舗・ギャラリー」、2 階が「事務所」、3、4 階が「共同住宅」の雑居形式である。とりわけ多数の人が集う 1 階のギャラリー・店舗部分は「避難階」でもあるため、高い耐火性能にすべきとの設計者判断により、国内で初めて「木造による 2 時間の耐火性能有する構造」が採用された。

京都木材会館の計画概要

本建物は京都木材協同組合事務所ビルの建て替えである。間口（X方向）は 27.675m、奥行き（Y方向）9m、延床面積 754.5㎡、軒高 12.5m、最高高さ 13.73m の地上 4 階建てで、交差点に面する 1 階は、地元京都産北山杉の意匠的展示をするギャラリーと店舗（現在：歯科クリニック）、2 階は組合事務所、3、4 階は共同住宅（5 戸×2 層）のプラン構成である（写真 1）。

1、2 階は道路側に面して大きく開口を取るために X 方向は木質ラーメン構造とし、



写真 1 建物全景

壁量が確保できる 3、4 階は構造用合板を用いた面材貼り耐力壁による一般的な軸組構造とした計画である。

1 階部分の庇は周囲に残る京町屋のスケールに合わせて低く抑え、2 階部分のルーバーを 1 階梁下端まで伸ばすことでファサードのバランスを取っている。3、4 階のバルコニーは先端に小庇を付け、屋根鼻先と見付け寸法を揃えることで屋根が重層しているようにデザインしてある。

ファサードを特徴付けるスギの木立のようなルーバーは、京都の街並みを踏まえつつ、新しい街並みに溶け込むような要素を備えている。

スギの無垢板（柃目）は、乾燥時の寸法安定性のある燻煙熱処理によるものである。相欠きにして組上げたルーバーは、室内に木漏れ日のような柔らかな光を届けつつ、季節や天候の遷り変りに対し、ルーバーの角度を変えることで風や光をコントロールできる構造となっている（写真 2）。



写真 2 可変式ルーバー

構造の概要、特徴

1、2 階の X 方向（桁行）は木質ラーメン構造、Y 方向（梁間）は木質ブレースによる軸組構成とした。ラーメンを構成する柱は 1～2 階部分を通し柱とし、ラーメンの柱脚部及び柱・梁の接合部ではドリフトピンと鋼板による半剛接合としている。これは、木造による耐火構造仕様において耐火被覆層内部にインクルーズする接合仕様であり、必要な接合強度を同時に満たすことを勘案した設計である。

木構造の構造設計は他工法と比べて木素材に繊維方向があることから「接合部」の設計が困難であるといわれる。また、素材強度のバラツキも多いため既従の実験や研究による知見が重要な判断要素でもある。本建物におけるラーメンフレームの柱・梁の接合部の剛性、耐力の算出方法は「木質構造接合部マニュアル／日本建築学会」に準拠したドリフトピンを用いた鋼板挿入型モーメント抵抗接合をベースとし、併せて、既従の実験データなどを参照して過大な回転剛性にならないことを確認している。

接合部のバネ剛性算出にあたっては、柱

側、梁側をそれぞれの直列バネを合成したものである（図 1）。柱脚部についても同様に、鉄骨造の露出型柱脚のバネと柱側のバネを合成して算出している（図 2）。

木造のブレース接合部は、軸力に対して圧縮による面外方向（バックリング）のチェック及び梁や柱接合部におけるせん断力のチェックは重要である。

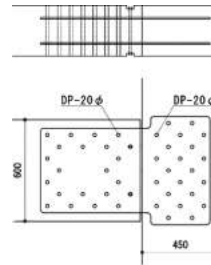


図 1 柱・梁接合部

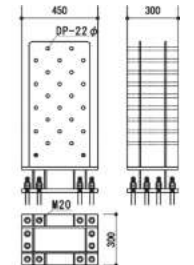


図 2 柱脚接合部

また立面上、3、4 階が面材による耐力壁を構成していることから、特定の層の剛性、耐力、Ds が大きく異なると層崩壊系となり、特定層の必要エネルギーが大きくなる場合がある。本建物の架構は、それらの意味では設計上の確認と配慮は必要であるが、法令上ルート 2 においては、剛性率、層間変形角が規定内であれば適合していると考えられる。

なお、シェルターが開発した 2 時間木質耐火構造部材クールウッド（COOLWOOD）は、中央部に構造支持部材、耐火被覆層として強化石膏ボード（現認定品：21mm×3 枚）、最外層部に木材 20mm を配したもので、木現しとなる木質耐火部材である（写真 3）。構造支持部材で接合することにより、被覆層内で接合部の耐火性能が担保される。

クールウッドの情報は国交省の HP（http://www.mlit.go.jp/gobuild/moku_torikumi.html）を参照されたい。



写真 3 ギャラリー内部とクールウッド

おわりに

国内初となる木造による 2 時間耐火構造の採用は、設計者である「ゆう建築設計事務所」の衛藤照夫、清水大輔両氏の理解と協力により実現できたものである。この場を借りて感謝の意を表します。

（あだち ひろゆき、いとう かつひこ）

第62回 工高生デザインコンクール

設計課題／私のまちのインフォメーションセンター

【応募校数】16校 【応募作品数】114点

【締切日】平成28年9月30日 【審査会】平成28年10月15日 【表彰式】平成28年11月5日

審査総評

審査員長 所 千夏

第62回の工高生デザインコンクールは、「私のまちのインフォメーションセンター」を設計課題とし、全国16校から合計114作品の応募があった。今回の課題には「私」「まち」「インフォメーションセンター」というキーワードが含まれている。それぞれに対する応募者の考え方を確認することを審査を行う中で最も重要ととらえた。

まず「私」と「まち」の関係性をどうとらえているか。自分が住んでいるまちか、好きなまちか、「私」と「まち」にどんな縁があって敷地に選定したのか、どんな視点でまちの良さをとらえ、伝えようとしているのかを図面の中から読み取るようにした。次に「まち」そのものをどうとらえているか。敷地の設定と計画に影響する周囲のまちのエリア、そしてそれらの関係性について検討しているかである。建築は敷地内に建つものだが、単独で成立するものではなく、必ず隣地や道路との関係性が重要になる。建築設計にその関係性をどう反映しているかを確認した。そして最後に「インフォメーションセンター」をどう解釈しているか。誰に向けて、どんな情報（インフォメーション）を発信する場所としたいのか、それを図面の中にきちんと表現できているかを確認した。

3つのキーワードに対する考え方が、建築そのものの造形デザインと、設計図面のプレゼンテーションの中に織り込まれ、審査員がそれらを読み取ることができた作品が、結果として高評価となったように思う。

【審査員長】



【学歴】

1966年 京都府生まれ
1990年 京都大学工学部建築学科卒業
1992年 京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士修了

1992年～2003年 ㈱安井建築設計事務所 勤務
2004年 アトリエCK（一級建築士事務所）設立

【経歴】

2005年～2009年 鳥取環境大学 非常勤講師
2014年～ 甲南女子大学 非常勤講師
現在 アトリエCK代表、(公社)日本建築家協会理事

【主な作品等】

日本赤十字広島看護大学（2000年）、障害者職業能力開発校（2003年）、Yクリニック（2005年）、実験集合住宅NEXT21 住戸改修（2007年、2011年）、M邸（2008年）、I邸（2010年）他
青年技術者選考（2000年）
はつかいち景観づくり大賞（2003年日本赤十字広島看護大学）

今回の応募作品は、コンセプトもデザインも敷地のとらえ方もかなり幅の広い、多様な提案が集まっており、中には比較するのも困難な性格の異なる提案も多々あったが、審査員の中で議論を重ねることで、結果的に前述の3つのキーワードに対する明快な答えをきちんと表現できているかを分析することとなり、その結果、今回の10作品を選定作品と選定した。

入選作品のうち、最優秀賞、優秀賞に選ばれた3作品は、どの作品も図面としての完成度が高く、見やすくまとめられていた。インフォメーションセンターを設置する場所の選び方も、それに対する建築の造形にも、説得力があった。どの作品も造形的に奇抜な表現をしていたわけではなかったが、実現の可能性を感じさせ、リアルにまちの中にたたずんでいる風景を想像させた。最優秀賞の作品は、その中でもコンセプトの明快さと図面の見やすさでは優れており、コンセプトと建築表現も合致した作品であった。

3作品以外の入選作品は、惜しくも入賞は逃したものの、それぞれが魅力を持った作品だった。インパクトのあるパース表現、印象に残る色使い、コンセプトが明快に形に表れているもの、インフォメーションの伝達方法に魅力のあるものなど、その魅力は様々であるが、図面の中に、審査員の印象に残るキラリと光る何かを持っていた。

入選を逃した作品にも、魅力を持った作品は多々あった。最後まで入選か否かぎりぎりまで議論を重ね、紙一重で選ばれなかったものもあった。入選作品との違いがあるとすれば、課題に対するコンセプトが弱い、コンセプトをうまく空間化できていない、図面表現がやや劣るなど、ほんの僅かな違いで、審査員にうまく響かなかったということだろう。

建築を学び始めたばかり、かつこれから様々なことを吸収していくこの年代に、ここまで完成度の高い作品を創造できる学生たちの能力には驚かされる。このコンクールを機に、建築に魅力を少しでも感じてもらえたとしたら、今までにも増してその素晴らしい能力に磨きをかけ続けていっていただければと願う。

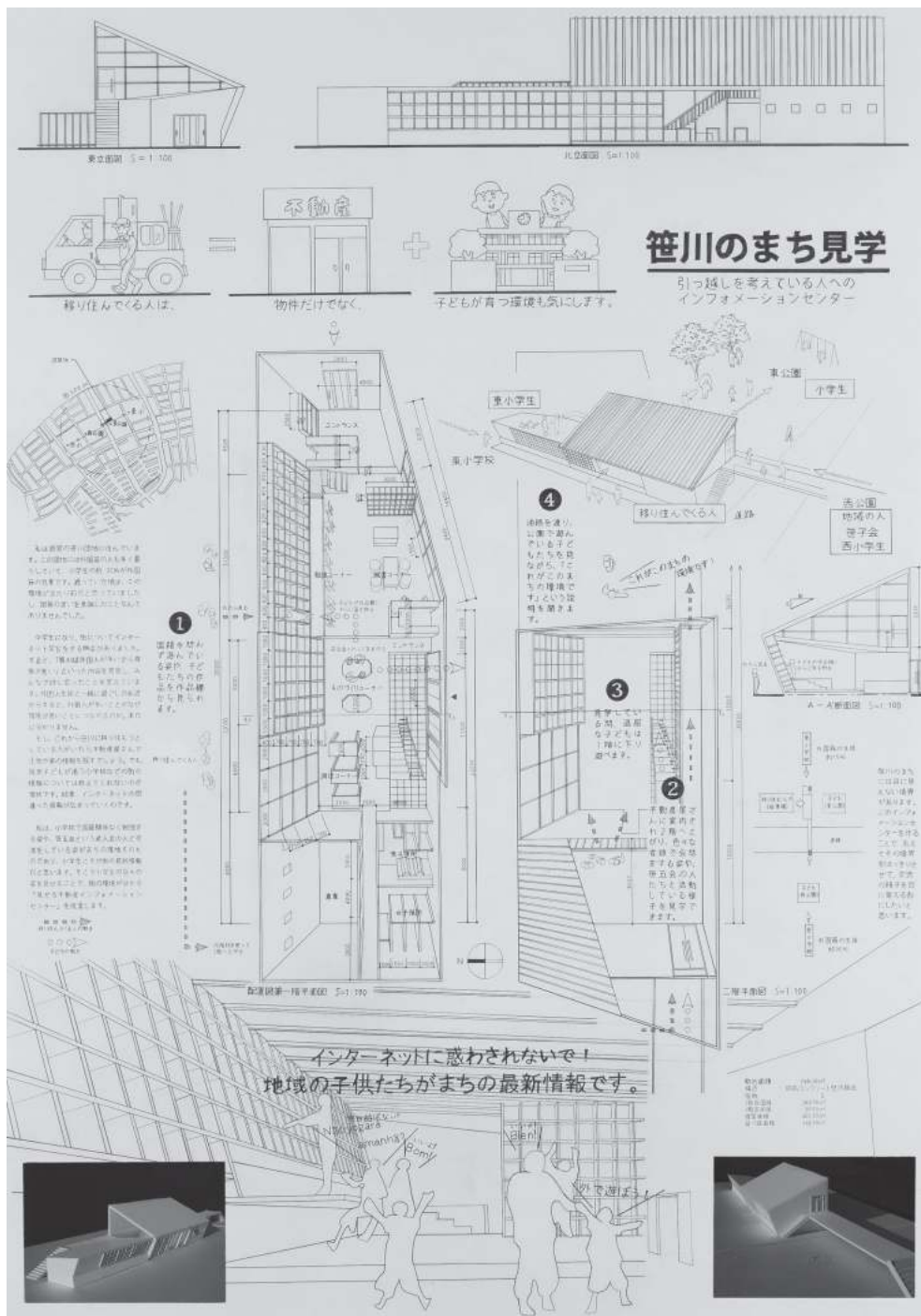
最後に、この工高生デザインコンクールへの応募に際して大変な努力を重ねてくれた学生の皆様と、その学生たちを心から熱意をもってご指導にあたられた先生方には、心より敬意を表したい。

●審査員（50音順・敬称略） 一職場は平成28年10月当時一

一階 聡之／㈱日建設計設計部門設計部長
上羽 一輝／㈱東畑建築事務所設計室長BIM設計リーダー
大平 滋彦／㈱竹中工務店大阪本店設計部設計第4部長
神谷 浩司／㈱大林組大阪本店建築事業部建築設計部課長
河崎 昌之／和歌山大学システム工学部環境システム学科准教授
戸川 勝之／㈱安井建築設計事務所設計部設計主幹
所 千夏／アトリエCK代表
橋本 修／㈱昭和設計建築設計部部長
前田 茂樹／大阪工業大学工学部建築学科准教授
矢田 朝士／ATELIER-ASH主宰

【審査会】





▲審査コメント／所 千夏

インターネットの中の「笹川」という「まち」のイメージと、住んでいる自分自身が持つ「まち」のイメージにギャップがあることに意識を向け、住民から見た本当のまちの魅力を、将来ここに住もうという人に対して、正確に伝えたいというコンセプトが、限られた紙面の中できちんとプレゼンテーションされた作品である。「私のまちのインフォメーションセンター」という課題に対して、誰に向けてどんな情報をどんなふうに伝えたいか、コンセプトが明快であり、かつそれが建築の形にもわかりやすく表現されていた。中でも斜めに配置された棚は、コンセプトをわかりやすく表現しており、子どもたちの作品を飾り、それを外にいる

入選・最優秀賞 塚本 瞳

三重県立四日市工業高等学校2年

私のまちのインフォメーションセンターというテーマから、自分の住むまちにはどのような特徴があるかを考えると、外国人が多いということが浮かびました。

インターネット上では外国人が多いというだけで「笹川は子どもたちにとって良くない環境」のような書き込みがされています。しかし、実際の笹川はインターネットの情報とは全く違います。

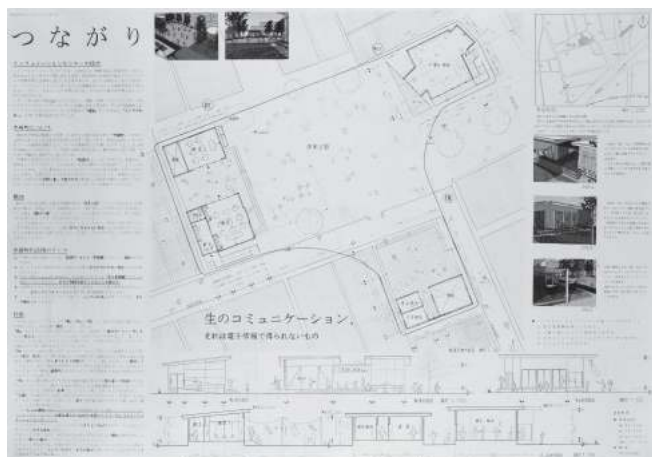
そこで、子どもたちが交流する姿を見せることが町への誤解をとく、このまちだけのインフォメーションセンターになると思います。

このインフォメーションセンターを通じて、笹川のまちに引越しをしてくる人々が増えてくれたら嬉しいです。

入選通知を受けた時はただただ驚きました。私は自分の製図に自信がなかったので、最優秀賞をいただいたのは本当に嬉しかったです。

製作中は辛いこともありましたが、その度に、先生をはじめ、家族、先輩方、友人、たくさんの方々に支えていただきました。その恩返しが少しでもできたように思います。本当にありがとうございました。

訪問者から見やすく、という目的に合致した優れたデザインである。鉛筆描きの表現についても、線の濃淡や太さをきちんと使い分け、全体として大変見やすい図面になっていた。今回はアイディアとコンセプトの明快さ、プレゼンテーションのレベルの高さが最優秀賞となったが、まだまだ磨く余地はある。例えば建築構造。壁式鉄筋コンクリート造ということだが、コンクリート壁とそうではない壁の表現がわかりにくくリアリティに不足している。建築を学び始めたばかりの今こそ、優れたアイディアを支える技術についても意欲的に学び、さらに優れた作品を創造できるようになってもらえたらと願う。



▲審査コメント／矢田朝士

本作品では、単機能の施設設計ではなく地域との関わりをつくり出すことをテーマとし、地域で生活する人達との触れ合いも計画に取り込んでいる。計画では、昔に流行った「遊び」を切っ掛けとした来訪者がアプローチしやすい手法で地域住人の交流や賑わいをつくりだし、公園を含んだ施設全体が地域の核となることを考えている。

建築的には、単に交流スペースを設けたりするのではなく「学び」「発信」「休息」と3つの用途に分離・構成し、公園を囲むように配置することで施設空間に変化と動きとを生み出している。そして昔の趣の残る計画地周辺の特性を読み込んだ無理のない規模と意匠計画は街中に溶け

入選・優秀賞 **國吉海斗** 大阪市立都島工業高等学校 3年

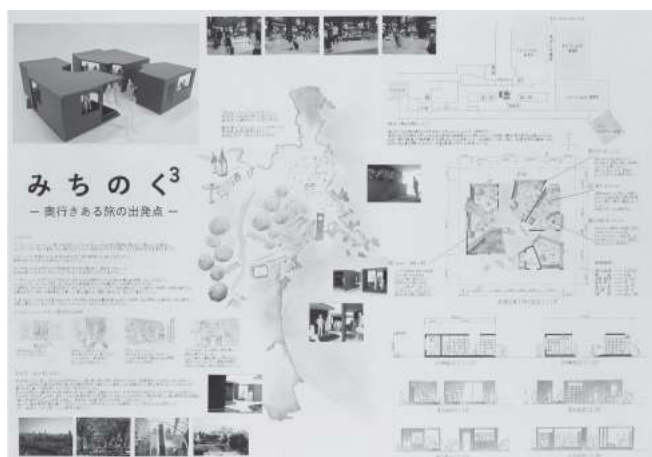
今回の課題ではインフォメーションセンターとは、単に情報を伝えるのではなく、「人とのふれあい」を感じることが必要だと考えました。「中崎町」には昔に流行していたものとして「昔遊び」というスマホで遊ぶのとは違ったメリットを持つ遊びがありました。そこで中崎町では古い民家などを改装して新しいお店などを開いている人たちが増えてきているので、公園の周りである3つの空き家をコンバージョンし、昔遊びを通して中崎町の魅力を知ってもらう仕掛けをつくります。それらの建物を公園を通してつながりを持つことで空き家対策につながる上に、一つのインフォメーションセンターとして見る事が出来ます。そしてそのインフォメーションセンターはまちとつながりを持ち、人々を寄せつける大きな存在となります。

このような名誉ある賞を頂き、とても嬉しく思います。この作品は自分ひとりの力ではなく、アドバイスを下さった先生や友人の支えが大きかったからこそ、頑張る事が出来たものだと思います。この機会を通じて設計に関する知識だけでなく、人との「つながり」の大切さを知る事が出来ました。この経験を今後の設計活動に活かしていこうと思います。ありがとうございました。

込み素直で魅力的な施設となっている。

但し、本計画には問題点もある。設定テーマには多くの内容が盛り込まれているが、それらを消化しきれていない為に作品の完成度が低くなってしまっている。そして計画上で施設建物はコンバージョンで整備するとあるが、既存建物を無視した計画となっており、主要テーマとの間に齟齬が生じている。

図面の完成度、建物デザイン、平面計画、各部詳細等詰めきれていない部分が多いが、着眼点はとても優れているので、内容を洗練させればとても優れた計画となり評価できる作品である。



▲審査コメント／神谷浩司

東北の玄関口、仙台駅。一日中、人々で賑わうコンコースがこの作品の舞台となる。大胆にも中央改札口の真正面に建物を配置し、到着した観光客を誘うように複数のゲートを設けている。用意されたそれぞれのスペースは“自然”“食”“歴史”など観光に即した色付けが施されており、いずれかに興味を抱いて進入した旅行者が知らず知らずのうちに目的以外の情報も得て、旅のスタートを切ることが出来るという施設だ。平面図を一見すると、不規則、不整形さに目が行くが、ランダムな壁と壁の隙間が上手にスペースとして活用されている。また、施設中央部に

入選・優秀賞 **坂口向日葵** 大阪市立工芸高等学校 3年

私は、今回のテーマが「私のまちのインフォメーションセンター」と聞いたときに、まず、そもそもインフォメーションセンターの役割とは何かと考えました。今は何でもネットがあれば片づいてしまいますが、そんな世の中だからこそ、ネットでは分らない旅行者の旅に対する思いなどの心理に建物で問いかける、インフォメーションセンターを設計したいと思いました。コンセプトは変えずにたくさんのエスキスをして、どうしたら建物だけで旅行者への思いを具体化できるのかといろいろ模索しました。このインフォメーションセンターにより、期待感のある旅が増えれば良いなと思います。今回の作品はとても思い入れのあるものだったので、優秀賞を頂く事が出来てとても嬉しかったです。先生方や家族、友達の支えがあつてこそこの作品だったので、これからも周りの人への感謝を忘れずに今後も様々なことに挑戦していきたいです。ありがとうございました。

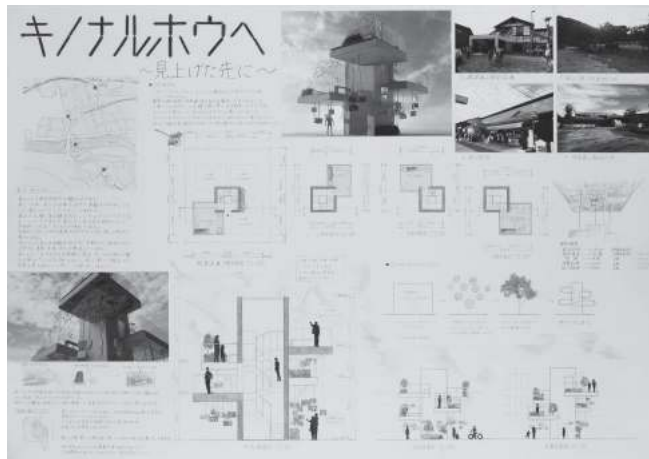
辿り着いた来訪者が、他のスペースに進むような動線の配慮もなされており、設計の意図が小さな施設に巧みにパッケージングされている。四方に出入り口を設け、放射状にプランニングされているのも、無軌道な人の流れを生むコンコースという場にふさわしいと感じた。

全体として綺麗にまとまっている点が、逆に商空間的ではないかという意見が審査会であった。地理的、歴史的な文脈との整合、駅の風景として見たときの施設の在り方の追求など、更に踏み込んだ発想があれば、より高い評価が得られたと思う。



▲審査コメント／河崎昌之

来訪者と地域住民の交流が主題であるこの作品は、ていねいな調査に依った労作です。「センター」という語句から一拠点を思い浮かべがちですが、ここではそれを2施設として別敷地に分散配置させ、面的な拡がりとともに提案しています。対面による案内機能を持つ建物は、切妻屋根の平屋二棟から成り、間は通り抜けの道となっています。ここには、移動のための表通りと生活の道である路地をつなぎ、来訪者を地域へと招き入れ、彼らの回遊を促す意図があります。この素直な考え方に好感をもちました。川にそって並ぶ妻面は、水際らしい風景をつくりだすことでしょう。



▲審査コメント／上羽一輝

京都の観光名所、嵐山に展開されるインフォメーションセンターの計画である。この作品を見て感じたのは、シンプルでいて楽しさを感じさせる造形であるということであった。情報が発信され繋がっていく様を樹木にみたて、それを建築造形に昇華するというのがコンセプトダイアグラムに明確に示されている。スキップフロアとすることで、様々なレベルと方角から風景を楽しみ、情報を受発信することができる装置として建設する場所も選定されている。更にはQRコードでの情報の読み取り、写真のアップロードなど具体的なICT技術についても提案されている。壁面ではなく、あえて床裏に地図を表示し、そこから液晶パネルが吊り下げられているという発想

入選 網代隼人・岩田丈希・岸本和真

和歌山県立和歌山工業高等学校2年

網代：テーマが「私のまちのインフォメーションセンター」ということもあり、観光に来た人々が地域の人々との交流を経て、私たちが生活する地域についてもっと深く知ってもらえるような施設があればなと思い製作に至りました。努力して製作した甲斐はあったなと思いました。デザインコンクールにとどまらず実際にインフォメーションセンターが建てられれば地域の発展にも貢献できるのかなと思いました。

岩田：和歌浦は和歌山では有名な観光名所ですが、日本や世界といった広い範囲で見ると和歌浦の名があがることはありません。これを機に世界中から観光客が来ることを願い製作しました。まさか入選するとは思わなかったのでもっとうれしいです。

岸本：最近では人々の交流が減ってきています。若い人たちがあまり外に出ないので、今回製作しました。3人で頑張った作品なので、いいところまでいけると思っていました。図面い手書きの絵を描かなくてはならなかったのでも、入選通知を受けて、頑張ってよかったと思いました。

他方のレストランは、住民の潜在的な要望を、調査から読み取ることで導かれた機能です。店内の賑わいもさることながら、こうした内・外双方への眼差が、新たな生活環境として既存エリアを再構成するのでは、という期待を抱きました。

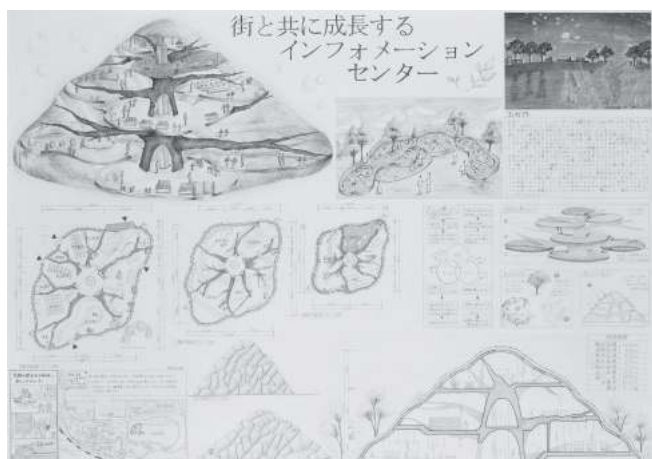
審査終盤、類似したアプローチの作品と順位が上下する場面がありました。差を認めたのは図面表現、特に地域における計画の位置付けの視覚的な訴求で、それは大きな差でした。街区図、配置図や平面図を、単なる必要図面ではなく“プレゼンテーション”としても考えてみてください。

入選 川西彩佳 大阪市立工芸高等学校3年

インフォメーションセンターといえば観光客だけが使うようなイメージがありますが、地域の人やいろんな人が一緒に使えるよう意図的にインターネットを使わせ気軽に利用できるようにと考え製作しました。言葉で観光地の良さなどを知るのではなく写真を見て情報を得ることで外国の方でも情報を理解しやすいと思います。この建物は地域に合ったものとなるよう森の京都というキーワードから木を連想させるデザインにしました。

入選したと聞いた時はとても嬉しかったですが悔しさもありました。この作品を完成させるにあたって、たくさんの人に助けてもらい今回入選できたのはその方々のおかげです。ありがとうございました。これからもっと良い作品を作っていけるよう頑張ります。

が、見上げる木々の枝葉、そこに実る果実を想起させ、コンセプトを的確に表現していると感じた。おそらく、デッキ部に出る箇所のみを開口として、階段コアをコンクリートの壁で閉じるというデザインは、デッキに出て景色を眺めるための視覚・雰囲気的な演出だと思うが、外観としての閉鎖的な印象とデッキだけではない階段を上りながらの風景の楽しみ方など、階段コア部の開放性と閉鎖性についてもう少し提案されていても良かったように感じた。景観に最も気をつかうエリアにおいて、デザインコードとして配慮すべき点はあると思うが、まちなかの装置として、実際に点在している様を想像するとおもしろい、実現可能性のある案なのではないだろうか。



▲審査コメント／戸川勝之

応募作品の中でもコンセプト、デザインとも大胆でインパクトがあった作品である。観光客や市民といった様々な人々が集う京都梅小路公園の中、京都水族館の目の前に計画。作者のいう「京都の歴史ある街中に新しいデザインを！」という想いを建築であり公園の中のアートのようなデザインの作品として仕上げている。

また、インフォメーションセンターを観光客のための単なる情報案内の場ではなく、地域の人々と観光客が共に実体験をすることで、交流を生み、よりリアルな情報提供が生まれる場所として提案し、そのための具体的な仕掛けづくりを行っているところが評価できる。

入選 夏目亜利紗 大阪市立工芸高等学校 3年

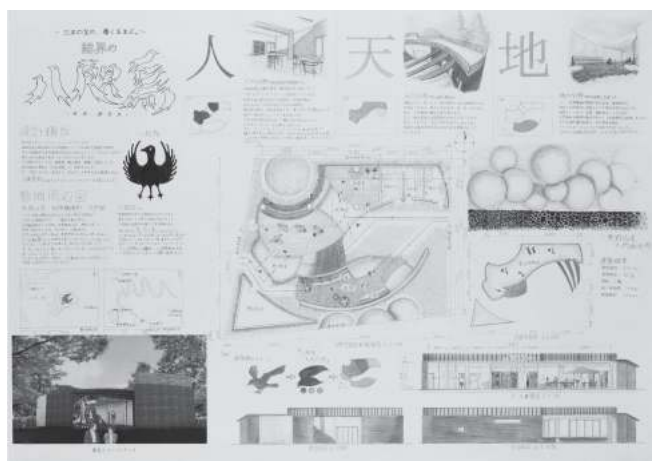
この作品をつくるにあたって大切にしてきたことは「繋がり」です。

このインフォメーションセンターでは、空間の繋がり、人々の繋がり、地域との繋がりを一番に考えました。京都という「和」のイメージが強い場所に「木」をモチーフにした建物を建てることで人々の興味を引き、観光客だけでなく、地元の人々にも利用してもらえと考えました。その上、街の発展や活性化にも繋がられます。

(入選通知を受けて) びっくりしたのが一番でしたが、自分の頑張りが結果に出て嬉しかったです。ですが、まだまだ実力不足で悔しい部分があるので今後はさらに精進していけるように頑張ります。

内部は大きな木をモチーフにしたという有機的な空間をスキップフロアで構成。各エリアをゆるやかにつなげ、それぞれの場の様子がお互いに感じられ、予期していなかった情報とも出会えそうな魅力のある空間としている。

図面全体も迫力があり、建築に対する作者の想いと勢いが感じられ、とても好感が持てる。欲を言えば、先述の仕掛けのシーンやこの空間の模型表現があれば、この提案の魅力がさらに増したのではないと思う。これからも「こういうものをつくりたい！」という建築に対する想いと情熱を持ち続け、具現化する術をしっかりと学んでいって欲しい。



▲審査コメント／一階聡之

ひときわ目を魅く作品です。八咫鳥（人・天・地）をデザインテーマとし、体感的なインフォメーションセンターを目指し、表現されたこの作品は、設計者の「想い」が見事に一つの建築・空間として結実し、表現されていると見受けました。画面全体から受ける印象も、快活かつ繊細で、見る者を「楽しい」雰囲気になさしてくれます。また、何よりも「旅」には、必要不可欠である「期待感」を湧き上がらせてくれるものでもありました。

表現手法においても、非常に丁寧かつセンスを感じさせられるもので、

入選 廣田裕誠 大阪市立工芸高等学校 3年

まず最初に私が設計しようとしたプランは「通り抜ける際に視覚的に情報を受け取り、休憩もできる場所」でした。その際に先生に「通り抜けるなら歩く人をターゲットにしたら良いんじゃないか」と助言を頂き、熊野古道という敷地に決定しました。それから敷地調査に足を運び、様々な歴史、環境、その土地の名産品や観光名所について多くの情報を得てそれをありのまま建築物に落とし込もうと思いました。その土地に根付いている文化、歴史を十分に取り入れることができなかったのが私の思う唯一の反省点です。

入選通知を受けた時はなぜか落ち着いていました。今回の作品は今までの作品と力の入れようも違いましたし、最も綺麗で鮮やかに出来たと自信を持っていたからだと思います。それと同時に優秀賞を取らなかった事に少し後悔している自分も居ました。まだまだアイデアのユニークさや製図の書き込みやレイアウトなどを創意工夫する努力を惜しまないようにしていきたいと決心しました。また、入選通知の用紙に自分の作品名が載っていたことに胸の高鳴りを覚えました。

プランニングにも無理がなく、素直な印象を受けました。力の入ったCGパースは、ちょっと真面目に表現しすぎたかもしれません。もっと「想い」を表現してほしいところでした。

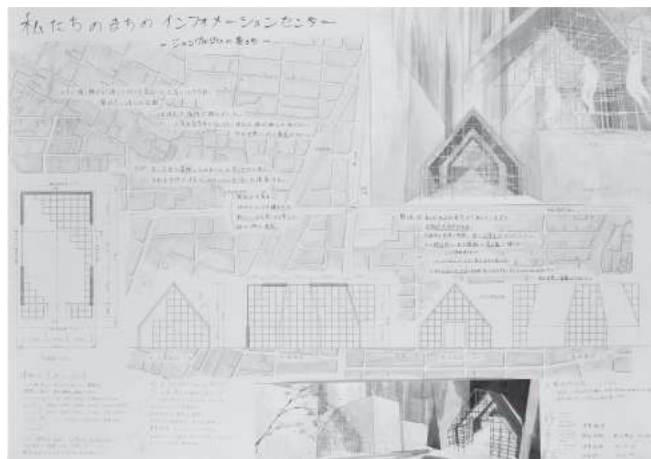
一つ残念なことは、「ここを初めて訪れる人」が、表現内容からは、イメージし難いことです。コンセプトで語られる「夢」は、共感に値するものですが、建築空間と主人公の関係性が曖昧にしか表現されていないのです。豊かな空間を表現している作品であることは明らかで、作者の感性と情熱が感じられました。今後のさらなる精進に期待いたします。



▲審査コメント／前田茂樹

今年度のテーマに対して、観光のためのインフォメーションセンターのみならず、地域の産業の成長こそが地域活性に繋がるという視点をもって、建築の魅力を提案した点を評価しました。しかしながら、成長していくという時間の流れを考えた提案であるならば、地域の方が来くなる魅力ある参加型のプログラムを提案し、それを建築がどのように継続的に支えるかという具体的な提案を期待します。

1階の市場内部の洞窟的な空間は、カーブを描いていることで見え隠れする魅力が生まれていますが、市場が建築の外側に開く、地域から活況が見える建築という形式、およびパースで活況を呈している状況の表現もあり得たのではないかと思います。またインフォメーションセンターの機能も、パネルを設置するというよりも、本日取れた魚介類の情報



▲審査コメント／橋本 修

この作品は作者が生まれ育った大阪市立長居小学校に通う小学生を対象に、校区内の空き家を利用した具体的な敷地・環境の中で「子どもたちの冒険心と探究心を育む施設」として計画されている。

この作品で印象的なのは淡彩で着色された数枚の透視図の「絵の力」である。独特の色使いと繊細なタッチで子どもたちが生き活きとジャングルジムの基地の中で遊ぶ姿が表現されており、全ての作品の中でも特に目を引く作品となった。ただここまで透視図を仕上げる「絵の力」があれば、全体の構図、配置図・平面図・立面図・文字など細部まで丁寧に仕上げられた完成作品を見たかったものだ。逆に審査をしていてそこが一番残念になった。

入選 藪 南美 大阪市立工芸高等学校3年

今回、私が敷地に選んだ場所は大阪府泉佐野市にある泉佐野漁港、通称『青空市場』です。私が小さい頃から身近にあった青空市場が今日、利用者の減少、建物の老朽化などの理由から活気が無くなってきています。

そこで私は青空市場を観光客へ向けたインフォメーション要素を取り入れた新しい建物へ改築することで活気を取り戻せるのではないかと考えました。先生から入選通知を受けた時は言葉にできないくらい嬉しかったです。しかし、入選したと知ってからもう一度作品を見つめ直してみると、もっと突き詰められた所や、図面の書き込みの不十分さに悔しさを覚えました。今回の結果に満足せず、もっと建築について学び、いい建物を設計したいです。

や、その漁業の仕方、歴史などを体験的に理解できるあり方であれば、外国の方、同世代の高校生、または家族皆で来なくなる場所になるかもしれません。近年、生け簀から魚介類を選んで自分たちで焼くスタイルの、浜焼きレストランが活況を呈しています。2階のレストランはそのような普通の飲食とは差異化を図る仕掛けも提案出来ると良かったかなと思います。

建築計画によって、地域の方がお客としてだけではなく形での参加が出来る、地域のシビックプライドを醸造するインフォメーションセンターとなり得る可能性を持ちます。大学の卒業設計のテーマとして取り上げてもいいテーマだと思いますので、今後より多くの体験をさせて、このような建築を実現する実力を培うことを期待しています。

入選 山崎信乃 大阪市立工芸高等学校3年

子どもの頃、親の言いつけを守り、ずっと同じ場所で遊んでいました。その場所を出て、外の世界へ出ることはとても勇気が要り、そして私は外へ出ることが出来ませんでした。

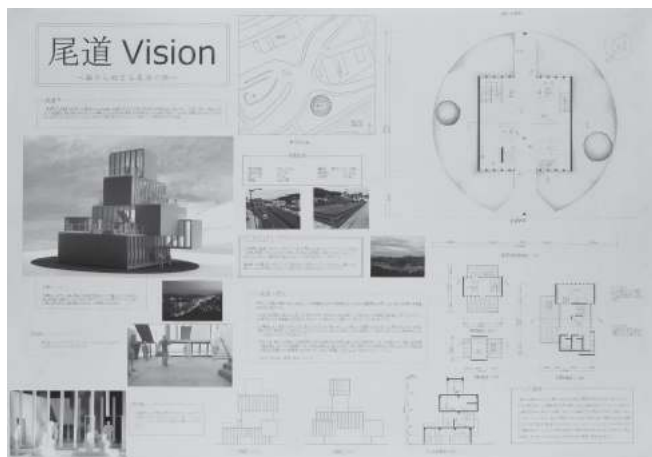
そんな小さい頃の記憶を思い出し、私はまちの子どもたちのためのインフォメーションセンターを提案しました。

入選は嬉しかったですが、クラスメイトの中に優秀賞を取った子が居て、それを知った瞬間とても悔しかったです。私は極度の負けず嫌いなので。

…と、言いつつも実は入選できたことが信じられません。図面の出来に納得がいかなかったのですが、期限があるので仕方なく提出したんです。その夜、図面の悪夢を見ました。(笑) そのくらい諦めていたので、入選と聞いたとき本当に驚きました。

また「まちのインフォメーション機能」の提案として地域の寺社仏閣の紹介や農業体験、なにわ野菜の紹介とあるが、ジャングルジムのモジュールに合わせた形態をどう機能的に生かすのか、建築的に展開するのか、具体的な工夫や提案があれば、内外それぞれにより魅力ある空間が生まれると思われる。

空き家対策が叫ばれる昨今、このような利用方法もあっても良いと思われる。



▲審査コメント／大平滋彦

直方体の「箱」を積み上げ、上下左右にずらした構成をベースとした本案は、今回の提案の中で最も現代的な造形センスを感じる作品であった。海運用のコンテナを連想させるその表現は、海に面した敷地へのマッチングを意識したものであろうが、向き合う長辺2面の壁をガラスに置き換えた「透けた箱」の集積体は、その存在自体が強いメッセージ(情報)を発信している。あの場所に何があるのだろう、あの場所から何が見えるのだろうという期待感を見る人に抱かせてくれる。

建物には3つの階段がランダムに配置され、自由なルートで上階へとアプローチできるが、その複雑な経路は迷路的で楽しい。内部から外部、

入選 吉門尚輝 大阪市立工芸高等学校 3年

「私のまちのインフォメーションセンター」という設計課題だと聞いた時は、難しいと思いました。そもそも、インフォメーションセンターなんて行ったこともなく、情報も少なかったのですがどのような場所に設計すれば良いのかと考え、今人気の尾道市に目をつけ敷地を見つけました。尾道はとにかく景観が素晴らしいので、それを見渡せるように箱を積み上げた形にたどり着きました。人口減少の問題には人との繋がりを持つことで解決できる、そんなインフォメーションセンターとなることでしょう。

(入選通知を受けて) 驚きました。呼ばれた時は、何か悪いことでもあったんじゃないかと思っていましたので。ですが、入選通知を受けた時、自分の自信にもなりました。ありがとうございます。

そしてまた内部へとあえて行き来させながら、最上階へと導く場面展開によって、あらゆる方位の街の姿を訪れる人は目の当たりにする。尾道の大きな資源である風景と、ここで提供される街の様々な情報をシンクロさせるアイデアは秀逸である。

地元の人との繋がりを通じて、訪問者に尾道の魅力を伝えることを建物のコンセプトとしているが、室内空間のプログラムはその答えとしてはやや乏しく感じる。地元に住む人にとっても、何度も尋ねたくなるような喜びや発見につながるものが付加されれば、双方の出会いの機会をさらに増やすことができるのではないかなと思う。

※入選者の感想文は誌面の関係上、要約して掲載いたしました。 写真撮影：河合止揚（アトリエ リペラ）

●応募学校

- ・北海道苫小牧工業高等学校
- ・宮城県古川工業高等学校
- ・東京都立蔵前工業高等学校
- ・茨城県立下館工業高等学校
- ・茨城県立水戸工業高等学校
- ・埼玉県立熊谷工業高等学校
- ・群馬県立前橋工業高等学校
- ・長野県長野工業高等学校
- ・静岡県立浜松工業高等学校
- ・三重県立四日市工業高校
- ・大阪市立都島工業高等学校
- ・大阪市立工芸高等学校
- ・堺市立堺高等学校
- ・和歌山県立和歌山工業高等学校
- ・鳥取県立鳥取工業高等学校
- ・松山聖陵高等学校

【表彰式】



●審査記録

- 10月6日 予備審査：応募作品について応募規定違反の有無を調べ、その検討を行った。検討の結果、一部作品に要求図面の不備が見られたので、予備審査結果を審査会に報告することとした。(教育委員会・工高生教育小委員会)
- 10月13日 審査会：欠席の審査委員1名により審査を行った。
- 10月14日 審査会：欠席の審査委員2名により審査を行った。
- 10月15日 審査会：審査委員7名により当日審査を行った。(審査時間13:30~17:00)

●審査経過

審査を開始するにあたり、本年度の応募校数、応募作品数の報告を行い、一部作品の要求図面に対する不備について予備審査報告として審査会に提示された。その結果、審査に影響する大きな違反ではないと判断され、全作品を本審査の対象とし、続いて審査委員長より審査方針の確認があり、審査に入った。

■1次審査(審査員7名) 114作品→27作品

全応募作品について審査委員1名につき10作品を選んで投票し、事前審査の票を加え集計した。

得票	9	8	7	6	5	4	3	2	1
作品数	1	3	0	6	1	1	2	3	10

票を得た、27作品を1次審査通過とした。(審査時間13:35~15:00)

■2次審査(審査委員7名) 27作品→入選10作品

1次審査通過27作品のうち、得票数1の作品につい

て、投票者より理由の説明がなされた後、次のステージに残すべきかどうか審議した。続いて得票数2の作品について同様に審議し、続けて得票数3の作品について・・・と段階的に審議が重ねられ、合計10作品を決定し2次審査通過・入選とした。

(審査時間15:15~16:35)

■3次審査(審査委員7名)

入選作品10作品→最優秀作品1点、優秀作品2点引き続き、優秀作品3点を選ぶに当たり、入選作品10点について審議され、最優秀1点、優秀作品2点が決定し、審査を終了した。(審査時間16:35~16:50) 会誌「建築と社会」への審査経過報告掲載にあたり、10点の入選作品について審査委員が分担してその評価を誌面にまとめることを約束し、審査会を終了した。(審査会終了時刻17:00)

information

1 アドルフ・ヴェルフリ
二萬五千頁の王国

アウトサイダー・アート／アール・ブリュットを代表する伝説的芸術家、アドルフ・ヴェルフリ（1864－1930）の日本初となる大規模な個展が開催される。スイスの首都ベルン近郊の貧しい家庭に生まれたヴェルフリは、1895年にヴァルダウ精神病院に収容され、そのまま66年の生涯を終えた。しかし、彼はそこで、『揺りかごから墓場まで』、『地理と代数の書』、『葬送行進曲』といった物

語の数々をつむぎだした。そうしたヴェルフリ作品は全45冊、25,000ページという目くらむようなボリュームで、ほかに例のない驚異的な表現で描き出される奇想天外な物語はひとびとを圧倒した。

アドルフ・ヴェルフリ財団の全面的な協力のもと、本展には最上級のヴェルフリ作品が一堂に会する。シュルレアリスムの画家たちをはじめとする多くの芸術家たちの注目を集め、現在では偉大な芸術家の一人として世界的な評価を得るヴェルフリ作品を“目撃”する絶好の機会である。



《ネゲルハル（黒人の鬚き）》1911年
ベルン美術館 アドルフ・ヴェルフリ財団蔵
©Adolf Wölfli Foundation,
Museum of Fine Arts Bern

期 間 1月11日(水)～2月26日(日)

10:00～18:00

(金・土曜日は20:00まで)

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日

会 場 兵庫県立美術館

神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1 (HAT神戸内)

TEL.078-262-0901

観 覧 料 一般1,400円、大学生1,000円

高校生・65歳以上700円

※中学生以下無料

※障がい者手帳等をお持ちの方は各料金の半額（65歳以上を除く）、その介助者1名は無料

2 しりあがり寿の現代美術
回・転・展

しりあがり寿（1958－）は、「弥次喜多 in DEEP」や朝日新聞に連載中の「地球防衛家のヒトビト」など独特のシュールなギャグマンガで知られるばかりでなく、近年はエッセイや演劇、音楽、ゲームの分野でも幅広く活躍している。また国内外の展覧会で墨絵や映像を用いたインスタレーション作品を発表し、アーティストとしても高く評価されている。

いずれの仕事にも通底するの

は、現代の世相の暗部を照ら

し出す批評精神と社会の弱者に寄り添う優しさである。それらをユーモアで包み、唯一無二の世界を創出してきた。東日本大震災後の日本を描いた『あの日からのマンガ』などは記憶に新しいところである。

美術館での初の本格的な個展となる本展では、しりあがり寿がここ数年強く関心を抱く「回転」をテーマに、新旧の作品を織り交ぜながら、マンガという枠に収まらない表現者としてのしりあがり寿像に迫る。

やかんから美術作品、映像、日用品まであらゆるものが会場で回り始める大規模な新作は必見である。

ギャグとシリアス、ナンセンスと哲学、サブカルチャーとアートなど様々な境界線上から独自の表現を試みるしりあがり寿の感性が、観る者の脳内を刺激することだろう。

常識を揺り動かすこの不思議な「回転」をお楽しみいただきたい。



「真夜中の弥次さん喜多さん」
口絵 2005
©Shiriagari Kotobuki.

期 間 1月14日(土)～3月5日(日)

10:00～18:00

※入館は17:30まで

休 館 日 月曜日

会 場 伊丹市立美術館

兵庫県伊丹市宮ノ前2-5-20

TEL.072-772-7447

観 覧 料 一般800円、高大生450円、小中生150円

※兵庫県内の小・中学生はココロンカードの呈示にて入場無料

※伊丹市・川西市・宝塚市・三田市・猪名川町の高齢者割引あり（平日は60歳以上、土日祝は65歳以上）

information

3

特別展 台北 國立故宮博物院
—北宋汝窯青磁水仙盆

本展では、中国北宋時代（960～1127）末に宮廷用の青磁を焼成した汝窯を代表する青磁水仙盆の名品を紹介する。汝窯は「天青色」とも形容される典雅な釉色と端正な造形を特徴とする。



青磁無紋水仙盆 汝窯
北宋・11世紀末～12世紀初
高6.7cm、口径23.0×16.4cm
台北 國立故宮博物院 写真：六田知弘

今回、台北の國立故宮博物院から、汝窯の最高

傑作であり、中国陶磁の名品中の名品といわれる「青磁無紋水仙盆」をはじめとした北宋汝窯青磁水仙盆4点と、さらに清朝の皇帝がその「青磁無紋水仙盆」を手本につくらせた景德鎮官窯の青磁水仙盆1点が初めて揃って海外に出品される。そして、日本を代表する汝窯青磁である東洋陶磁美術館の青磁水仙盆と歴史的な「再会」が実現する。汝窯青磁を代表する青磁水仙盆の名品が初めて一堂に集う本展は、千載一遇の機会である。青磁水仙盆の名品を通して、歴代の皇帝たちが愛した汝窯青磁の美の真髄を堪能いただきたい。

期 間 3月26日(日)まで

9:30～17:00

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし1/9、3/20は開館）

1/1～4、1/10、3/21

会 場 大阪市立東洋陶磁美術館

大阪市北区中之島1-1-26

TEL.06-6223-0055

観 覧 料 一般1,200円、高大生700円

※中学生以下無料

※障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

※大阪市内在住の65歳以上の方は無料（要証明）

4

特別展
春日大社 千年の至宝

世界遺産の一つである奈良・春日大社は、奈良時代の初め、平城京の守護と国民の繁栄を祈願するため創建され、古くから鹿を「神の使い＝神鹿」として大切にしてきた。本展では、「平安の正倉院」と呼ばれる王朝工芸の名宝とともに、貴重な中世の刀剣類、甲冑、春日信仰にかかわる絵画・彫刻などの名品の数々を一堂に紹介する。



重要文化財 舞楽面 納曾利
平安時代・12世紀
春日大社蔵（通期展示）

期 間 1月17日(火)～3月12日(日)

※会期中展示替えあり

9:30～17:00

※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日

会 場 東京国立博物館 平成館（上野公園）

東京都台東区上野公園13-9

TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）

観 覧 料 一般1,600円、大学生1,200円、高校生900円

※中学生以下無料

※障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

▶平成28年度建設リサイクル法説明会（第2回）
開催のお知らせ

■日時

1月27日(金) 13:30～16:30（受付開始13:00）

■場所

東大阪市立男女共同参画センター イコラーム

（定 員：244名）

東大阪市岩田町四丁目3番22-600号

希来里ビル 施設棟 6階

近鉄奈良線「若江岩田」駅下車 北側すぐ

■参加費

無料

■申込期限

1月18日(水)まで（定員になり次第締め切り）

■申込方法

大阪府建設リサイクルのホームページ

(http://www.pref.osaka.lg.jp/kenshi_shinsa/recycle_index/index.html)

→新着情報

「平成28年度建設リサイクル法説明会（第2回）のお知らせ」

→「4. 申込先・方法等について」をご覧ください。

■問合せ先

大阪府住宅まちづくり部建築指導室審査指導課開発許可グループ

TEL.06-6941-0351（内線3092）

※会場にお越しの際は、極力、電車・バス等の公共交通機関をご利用ください

本欄掲載の1～4の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

企画広告

新製品レビュー

免震エキスパンション ジョイントカバー Mシリーズ

～JSSIガイドラインに
沿った可動試験で検証
全製品でA種性能を実現～



施工例

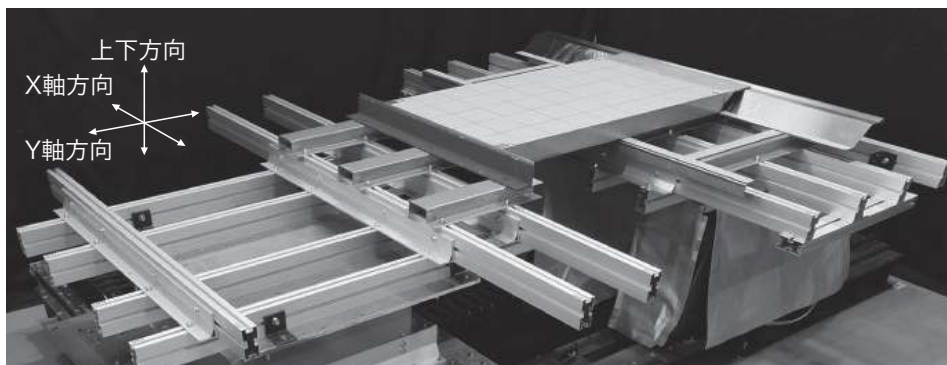
井上商事株式会社

アルミ外装建材を製造販売するメーカーとして事業を展開しています。(エキスパンション・アルミ製雨樋・手すり・笠木等・ISノンシールパネル)

●大阪支店
〒550-0012

大阪市西区立売堀4-5-27
シティビル阿波座1001号
TEL 06-6539-2594

●本社
〒910-0859
福井県福井市日之出2丁目1番6号
TEL 0776-27-2760



3次元の動きで地震波のデータも再現できる振動台1号機

実績より検証

振動台に載せられた免震エキスパンションジョイントが、凄まじい音を立てながら、前後左右に動き回る。その音や動きから、部材に伝わる衝撃の大きさが身体に伝わってくる。

この振動台は秒速1mの高速加振が可能なので、可動範囲は70cm。平面上で前後左右に加振する台と上下方向に加振する台の組み合わせで3次元の動きも加えられる。そのうえ、地震波のデータさえあれば、どのような振動でも再現可能。

振動台での可動試験の様子をご覧になった設計者の方は、「この結果を設計に反映できるようにしないとイケませんね」と、自戒されていた。

建築物の不具合が社会問題になるなど、設計者に向けられる社会の目は厳しさを増している。それだけに、設計者としてどのような性能を備えた建築部材を選ぶのか、確かな根拠が求められる。それは、免震エキスパンションといえども例外ではない。

免震エキスパンションジョイントで製品として目指すべき性能が明らかになったのは、2013年4月。東北地方太平洋沖地震の揺れで多くの不具合が生じたのを受けて日本免震構造協会が作成した損傷防止のガイドラインに盛り込まれた。そこでは、一定の可動試験に基づく性能指標を性能が高いものから順にA種からC種までの3ランクに分けた。

大地震後も機能確保を目指し 可動試験を重ね、改良を加える

井上商事で製造・販売する免震エキスパンションジョイントはすべて、このA種に相当する。しかもそれを、冒頭に紹介した自社開発の振動台での試験を通じて社内でも検証済みだ。

このA種というのは、どのような性能を指すのか。

まず試験に用いる装置にも条件が課されている。それは、振動台であること。ガイドラインによれば、B種以下の性能であれば加振台試験で済むが、A種の性能検証を目指すなら、振動台試験であることが求められる。振動台とは加振台に比べより速い速度で上下方向を含むさまざまな方向に振動を加えられるものを指す。正弦波に加え、地震波でも振動を加えられるのが特徴だ。

A種とは、この振動台を用いて定められた方法で振動を加えた結果、大地震時も中小地震時も「機能保全」が確認できたものを指す。この機能保全とは、変形、傾き、すき間など、機能上の支障がなく、地震後も機能を確保していて、無補修で継続使用できる状態。仕上げるのすりキズやシール切れなど軽微な損傷は許されるという。

標準仕様の製品ではすべてA種を目指し、可動試験で仮に壊れた場合には原因を究明し、改良を重ねている。それが、現在の製品ラインアップだ。そのほかの特別仕様の製品では、お客様とともに試験結果を確認しながら、A種の性能を実現することをめざしている。

地震時の揺れに対する安全性を検証する目的で、いまやさまざまな建築部材や建築内部に置く家具などを実際に揺らしてみよう時代。可動試験に必要な装置を持つ試験機関に依頼すると、それなりの時間も費用も掛かるのが現実だ。社内に可動試験の装置があれば、より早く顧客ニーズへの対応が可能になる。

その振動台を自社で開発することができたのは、社内にメカトロ開発部を置いていたからだ。



最大2tまでの検査物を
載せることができる
振動台 2号機が新たに加わった

振動台は自社開発・自社制御 顧客の要望にも迅速に対応

井上商事は1977年、アルミ建材市場にアルミ製の笠木で参入した。後発メーカーということもあって、「他社と同じ土俵では勝負したくない」という差別化の発想から、独自性のある製品を生み出していく。その一つが、アルミ製のたてとい「アルトイ」だ。2007年にはその製造過程で用いるアルミパイプの溶接技術を地元の福井大学と開発しようと、社内メカトロ開発部を置いた。

そのおかげで、製品の性能確認のための試験装置やその制御システムの開発に社内でも乗り出せるようになった。試験装置の設計から、組み立て、制御まで、社内でも対応可能で、お客様のさまざまな要望に幅広く対応できる。

4月後半には、新しい振動台がもう1基、加わった。振動台に載せられる重さは最大100kgから同2tにまで20倍に増え、可動試験範囲は最大70cmから同1mにまで広がった。傾きのある動きなど、前後左右上下といった基本の動き以外の動きも加えられる。

この2号機は、床・壁・天井など具体的な

建築物を実寸大で組み上げて、そこに免震エクスパンションジョイントを組み合わせることで、より現実に近い形のものに振動を加えられる。それによって検証の精度をさらに高める狙いだ。もちろん、この2号機も制御ソフトは自社開発のもの。顧客からの要望には迅速に対応できる。

こうした試験体制に裏打ちされたA種の性能を持つ自社製品に強い自負を抱く。

「品質にはこだわりを持っています。その証が、製品開発にあたって自社のメカトロ開発部で生産技術まで開発する点に表れていると言えます。当社の製品はこうした蓄積を生かしたものです。自社開発の振動台を通じて性能検証までやる。その点も併せて製品を評価ください。」

井上商事では、免震建築物の設計者や施工向けに振動台を用いた可動試験の見学会も随時開催している。百聞は一見に如かず。免震エクスパンションジョイントが実際に揺れ動く様子を、設計者なら一度は自身の目で確かめておく必要があるのではないかと。



操作部
制御ソフトも自社製



破損例（破損状況の映像を公開中）



可動試験見学会の様子

Member's Forum

会員投稿の頁

11月23日秋真っ盛り！

大徳寺 真珠庵（庭玉軒）と 聚光院（閑隠席・桝床席）を 拝見して

上田壽子

上田壽子建築設計室

今まさに（テレビでは）「真田丸」大坂冬の陣の真っただ中。真田家だけではなく、徳川につくか豊臣につくか、揺れ動いた大名が数多あった。

多くの大名が徳川方につこうとしていたころ、飛騨高山藩主の金森可重も当然徳川につくべく跡取りの重近に出陣を命じたものの、その意に反して彼はそれを蹴ってしまった。その時から父可重は重近を勘当してしまう。重近は母、妻子とともに京へ上り、大徳寺で剃髪し重近という名を捨て「宗和」と名乗るようになった。

この金森宗和の作と言われるのが大徳寺の塔頭のひとつ、真珠庵庭玉軒である。二畳台目出炉下座床で南に貴人口を持ち、天井は掛け込み天井、平天井、落天井となっている。掛けこみ天井以外は蒲苳仕上げである。貴人口に向かうところに屋根を設け、中潜りを設けて、二畳台目でも緩やかな席にされているのが特徴である。姫宗和と呼ばれるように優美で繊細である。庭は村田珠光の作と言われている。

真珠庵はパールの真珠ではなく禅寺の雪の白さだと言われた中村昌生先生のお言葉を思い出している。

次は真珠庵の西に位置する聚光院に移動する。

ここは千利休の菩提寺でもあり今年創建450年を迎えられるとか。

茶室閑隠席・桝床席は本堂東北に建ち、書院の中に造りこまれている。西に閑隠席、水屋を挟んで東に桝床席がある。

閑隠席は表千家七代如心斎が利休150

回忌（寛保元年・1741年）に寄進したと言われる茶室である。三畳上げ台目切、下座床の茶室で点前座には中柱を建てている。窓は少ないが簡素な清潔感のある茶室である。床柱がやや太いのが茶室に安定感をもたらししていると先生はおっしゃった。おそらく大徳寺出入りの大工が建てたのであろうが、このころ京畳の寸法が決められたとのことのお話にいたく感動した。六尺三寸×三尺一寸五分の畳はちゃんと今に生きている。

三畳の水屋の東に桝床席がある。四畳半の空間に半畳分を踏込床にした茶室である。久田家から養子に入った覚々斎（表千家六世）の好みと伝えられるが、この茶室は閑隠席よりも後で造られたことが明らかであるらしい。貴人口のみのおおらかな茶室である。

先生のお話によると、アメリカから日本の代表的なお茶室をNY近代美術館に造りたいということで来られ、色々な茶室を見て回った挙句この茶室を良しと持ち帰って展示した…ということである。おもしろい！

こういうお話を先生に直にお聞きするのが私にはとても楽しい。

茶室の隣に平成25年（2013年）書院が新しく建替えされた。これは中村先生の設計であられるとのこと。十五畳二間の書院で茶会にも供されるらしい。千住博氏の「滝」の襖絵が入っている。それはともかく天井のひる釘の「向き」が違うと、さる会の幹部の方に言われたとのこと。「これは僕の責任…つてずっとと言われるだろうな…」と先生が自嘲気味におっしゃっていた言葉に、何か吹っ切れないものがある。炉の対角線、中央にひる釘を取り付けたらもちろん釣釜が中心からずれてしまう…というような間違いならともかく、そうでないならどちらでもいいような気がする。

表千家と裏千家で蹲踞の手燭石と湯桶石の位置が左右全く違うのもあれば、たまさか茶人が間違っておいただけのものではないか…と。その方がずっと人間らしく思える。

茶席は招く方も招かれた方も気持ちよく過ごす空間があればそれでいいのでは…とも思う。

時に古いお茶室を拝見すると、ここでどのようなお話がなされたのか…密談なのか…商談なのか…

拝見させていただくことで歴史観が深まり、想像力を高め、どのような運命の空間であるかということに思いを馳せる。

昔、父母から言われた「敷居を踏むな、畳の縁を踏むな」と言った住宅の中でのしつけは今や茶室にしか残っていないのではないかと思えるが、それはそれで日本の文化でありやはり伝えていきたい事柄ではないだろうか？

実際のお茶室を前にした時の中村先生のお顔は、とても輝いて見える。先生のご本を読んでも教えられることは多い、書籍で茶室のことは勉強できる。でもそこに先生のお話があつて耳を傾ける、目の前の床柱にでも愛着を感じる…それこそ「建築協会」の見学会である。

中村先生、何時までもお元気で私たちを侘び寂びの世界に連れて行ってください！

第33回茶室見学会

「大徳寺真珠庵庭玉軒と聚光院閑隠席・桝床席」見学会

■日 時 平成28年11月23日（水）

13：00～17：00

■参加者 32人（一般12名 会員20名）

■講師 中村昌生氏

（京都工芸繊維大学名誉教授）

謹賀新年



平成29年元旦

亀井 忠夫

日建設計
代表取締役社長

〒541-8528 大阪市中央区高麗橋4-6-2 TEL(06)6203-2361

近藤 康之

不二熟学工業 株式会社
代表取締役

〒542-0081 大阪市中央区南船場2-1-1 TEL(06)6261-4321

千種 幹雄

株式会社 昭和設計
代表取締役社長

〒531-0072 大阪市北区豊崎4-12-10 TEL(06)7174-8787

北野 晶平

ダイダシ 株式会社
代表取締役社長

〒550-8520 大阪市西区江戸堀1-9-25 TEL(06)6447-8000

理事

佐野 吉彦

株式会社 安井建築設計事務所
代表取締役社長

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

理事

中井 進

日建設計コンストラクション・マネジメント
代表取締役会長

〒112-0004 東京都文京区後楽1-4-27 TEL(03)5803-9770

会長

香西 喜八郎

株式会社 東畑建築事務所
代表取締役社長

〒541-0043 大阪市中央区高麗橋2-6-10 TEL(06)6202-0391

副会長

設楽 貞樹

株式会社 安井建築設計事務所
常務取締役執行役員

〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-7 TEL(06)6943-1371代

原 眞一

コーナン建設 株式会社
代表取締役

〒531-0075 大阪市北区大淀南1-9-10 TEL(06)6456-4311

小神 正志

西日本建設業保証 株式会社
取締役社長

〒550-0012 大阪市西区立売堀2-1-2 TEL(06)6543-2553



謹賀新年



平成29年元旦

設計事務所所有志

株式会社 伊藤建築設計事務所

代表取締役会長 森 口 雅 文

代表取締役社長 小 田 義 彦

本社・名古屋事務所・エルイー創造研究室

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 (桜通ビル) TEL (052) 222-8611

東京事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田3-5-12 (聖公会神田ビル) TEL (03) 5294-6211

株式会社 瀬戸本淳建築研究室

建築家 瀬 戸 本 淳

〒650-0024 神戸市中央区海岸通2-2-3 TEL: 078-333-0138 <http://www.jsao.co.jp>

株式会社 東畑建築事務所

代表取締役社長 香 西 喜 八 郎

本社 〒541-0043 大阪府中央区高麗橋2-6-10 TEL (06) 6202-0391

大阪・東京・名古屋・九州・東北

<http://www.tohata.co.jp>

日建設計

代表取締役社長 亀 井 忠 夫

東	京	102-8117	東京都千代田区飯田橋2-18-3	TEL (03) 5226-3030
大	阪	541-8528	大阪府中央区高麗橋4-6-2	TEL (06) 6203-2361
名	古	460-0008	名古屋市中区栄4-15-32	TEL (052) 261-6131

安井建築設計事務所

代表取締役社長 佐 野 吉 彦

本社: 〒540-0034 大阪府中央区島町2-4-7 TEL (06) 6943-1371 (代表)

支社: 大阪・東京・名古屋・広島・九州 www.yasui-archi.co.jp

建設業有志



時をつくる ところで創る

大林組

取締役社長 白石 達

本社 東京都港区港南 2-15-2 TEL 03 (5769) 1111

専務執行役員 大阪本店長 鶴田 信夫

大阪本店 大阪市北区中之島 3-6-32 TEL 06 (6456) 7000

100年をつくる会社

 鹿島
KAJIMA CORPORATION

本社 東京都港区元赤坂1丁目3番1号

関西支店 大阪市中央区城見2丁目2番22号・マルイトOBPビル
電話06 (6946) 3311<http://www.kajima.co.jp/>

子どもたちに誇れるしごとを。

清水建設株式会社

取締役社長 井上 和幸

専務執行役員関西支店長 池田 耕二

 本社 〒104-8370 東京都中央区京橋二丁目16番1号 Tel. 03 (3561) 1111
 関西支店 〒541-8520 大阪市中央区本町三丁目5番7号 御堂筋本町ビル Tel. 06 (6263) 2800

 大成建設
TAISEI

For a Lively World

 社長 村田 誉之
 常務執行役員 金井 隆夫
 関西支店長
<http://www.aisei.co.jp/>

想いをかたちに 未来へつなぐ

TAKENAKA

竹中工務店 取締役社長 宮下正裕

〒541-0053 大阪市中央区本町 4-1-13 tel: 06-6252-1201

〒136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 tel: 03-6810-5000



戸田建設株式会社

代表取締役社長 今井 雅 則
 常務執行役員大阪支店長 光 用 薫

本社 〒104-8388 東京都中央区京橋1-7-1 TEL 東京03(3535)1354
 大阪支店 〒550-0005 大阪市西区西本町1-13-47 TEL 大阪06(6531)6095
 支店 東京・首都圏土木・千葉・関東・横浜・名古屋・札幌・東北・広島・四国・九州



夢のレンガを積みあげよう

都窯業株式会社

〒530-0047 大阪市北区西天満 2-8-1 大江ビル
 Tel (06)6367-0389 Fax (06)6367-5567
 工場 三重県伊賀市西山 伊州窯 伊州観白樓
<http://www.miyakoyogyo.com> E-mail: info@miyakoyogyo.com

建材・学校・団体有志等



大阪工業技術専門学校

OSAKA COLLEGE OF TECHNOLOGY

建築学科・インテリアデザイン学科・大工技能学科・設備環境デザイン学科・建築設計学科(リカレント生対象)
 建築学科II部(夜間)・フレックス建築学科(夜間・単位制)・建築士専科(二級建築士受験資格取得者対象)

〒530-0043 大阪市北区天満1丁目8番24号 ☎ 0120-0910-19 🌐 <http://www.oct.ac.jp/> Tel. 06-6352-0093



一般社団法人 日本建築材料協会

会 長 立 野 純 三

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-4-23 撞木橋ビル4階 TEL(06)6443-0345 FAX(06)6443-0348
<http://www.kenzai.or.jp/>



一般社団法人 日本建築協会

会 長 香 西 喜八郎

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31 TEL(06)6946-6981



一般社団法人 日本建築協会中国支部

支 部 長 高 松 隆 夫

〒732-0805 広島市中区十日市町1-1-9（相生通り鷹匠ビル4階山陽工業(株)内） TEL (082) 232-6471



一般社団法人 日本建築協会東海支部

支 部 長 篠 原 佳 則

〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19（名古屋商工会議所ビル9階） TEL (052) 201-2201



一般社団法人 日本建築協会京都支部

支 部 長 長 瀬 博 一

〒604-0944 京都市中京区押小路通柳馬場東入橘町641 京都建設会館別館 TEL (075) 211-2857



日本建築協会

月間の動き

平成28年11月

理事会等

第2回通常理事会

11月24日(木) 16:00～17:00
議 事 (1) 平成28年度上半期の事業執行状況
(2) 創立100周年記念表彰
(3) 創立100周年記念の概要

第7回常任理事会

11月24日(木) 17:30～21:30
議 事 (1) 100周年記念事業
第1回会長、副会長、常任理事、支部長会議
11月24日(木) 14:30～15:30
議 事 第2回通常理事会と同じ

編集委員会

第8回広告企画・編集合同委員会

11月1日(火) 17:00～18:00
議 事 (1) 特集号の企画検討
(2) 広告依頼先検討

第8回「建築と社会」100周年記念号編集委員会

11月1日(火) 18:15～19:30
議 事 (1) 企画の検討

第6回計画系分科会

11月26日(土) 16:00～17:00
議 事 (1) 1月号特集打合せ

第7回構造分科会

11月11日(金) 18:00～19:00
議 事 (1) 構造の頁の企画

第7回設備分科会

11月2日(水) 18:00～20:10
議 事 (1) 「設備の頁」の企画
(2) 2017年度特集の企画

第7回法令分科会

11月16日(水) 15:00～17:00
議 事 (1) 法令コーナーの企画
(2) 2017年度特集号の企画

第7回作品作風小委員会

11月24日(木) 19:00～20:00
議 事 (1) 作品の選定
(2) 作品の掲載状況、予定の報告
(3) gallery掲載報告、予定

事業委員会

第5回情報見学小委員会

11月10日(木) 18:00～19:10
議 事 (1) 本年度事業 ダイキン工業(株) TIC見学会報告、「大徳寺・真珠庵・聚光院」茶室見学会、100周年プレイベント近代建築見学会
(2) 見学先の検討

U-35小委員会海外視察

【香港】
11月3日(木)～6日(日)
参加者 若江委員ほか3名
【ベトナム】

11月3日(木)～7日(月)
参加者 宮武委員ほか3名

第9回U-35小委員会

11月18日(金) 19:30～
議 事 (1) 活動／予定
(2) 次回予定

第10回U-35小委員会

11月30日(水) 19:30～
議 事 (1) 活動／予定
(2) 次回予定

出版委員会

第7回出版委員会

11月22日(火) 18:00～18:55
議 事 (1) 既刊書籍経過報告
(2) 制作進行中の書籍
(3) 今後の出版テーマ
(4) 講習会の企画
(5) 100周年記念式典の企画

教育委員会

大阪府住まい・まちづくり普及協議会

第8回全体会議

11月18日(金) 10:30～12:00
報告・議題 (1) 出前講座の実施
(2) 次年度組織体制

100周年関連事業委員会

第5回史料研究会

11月8日(火) 18:00～19:45
議 事 (1) 100周年記念誌
(2) 近代建築見学会

第8回10年委員会

11月14日(月) 18:40～19:00
出席者 設楽委員長ほか5名
議 事 (1) 学生のための見学会見学先検討
(2) ヒューリック大阪ビル、イトウビルのイベント実施

11月1日(火) 18:00～18:15
イトウビル

「Happy Birthday dear A building！」

100周年記念事業委員会

第8回幹事会

11月24日(木) 17:30～21:30
議 事 (1) 100周年記念事業

見学会

「大徳寺真珠庵庭玉軒と聚光院閑隠席・樹床席」茶室見学会

11月23日(水・祝) 13:00～17:10

講 師 中村昌生氏
(京都工芸繊維大学名誉教授)

参加者 32名

表彰式

第62回工高生デザインコンクール表彰式

11月5日(土) 13:30～16:30
出席者 受賞者18名(引率者8名含む)
審査員5名
委 員 中村委員ほか2名

イベント等

100周年記念事業プレ展示会at 生きた建築ミュージアムフェスティバル

11月5日(土)、6日(日) 9:00～18:00
芝川ビル4階モダンテラス
内 容 協会活動紹介パネル展示と映像紹介
来場者 1023名

編集委員会(平成28年度)

■副会長

設楽 貞樹
本多 友常

■編集担当理事

◎勝山 太郎
佐藤 榮一
杉本 浩
竹中 統一
西 博康
松崎 公一
松本 眞一
吉村 英祐
米井 寛

■副委員長

○戸川 勝之
■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡
鈴木 克彦
△田中 直人
松田奈緒子
三宅 次郎
守井 辰
吉村 英祐

★建築計画系

神戸 嘉也
下坂 浩和
中辻 浩介
野田 隆史
東 拓郎
△樋口 展寛
松岡 英緯
三谷 帯介
米山 剛史
渡部 剛

★インテリア・住宅系

今井 充彦
川合 隆之
工藤 理隆
△黒柳 亮
齊藤 誠
塚口 洋之
ペリー史子
間渕 一博

■構造分科会

伊藤 栄治
岡田 健
岸本 光平
司馬 勢也
瀧野 敦夫
角田 耕一
橋本 宗明
△宮久保秀樹
向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎
北野 勝也

佐々木章二

笹倉 睦
高村 聡
寺井 千佳
夏井 重行
△橋本 直樹
藤原 謙一
榊井 貴廣
宮崎ひろ志
森山 正和
山本 雅洋

■施工材料分科会

△東 琢

木谷 在憲
桜井 和男

高橋 秀一
藤丸 啓一

山口 紀宏
吉田 正友

■法令分科会

△磯林 雅之
岡本 亮二

黒川 正樹
河野 学

小林 智成

■作品作風小委員会

東井 嘉信
居内 章夫
池上 明
稲垣 和江

▲加嶋 章博
菊池 浩輔

倉渕奈千子
澤田 純一

高木 秀晃
鞆野 淳司

豊田 充広
西田 佳代

芳谷 晴彦
平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介
小山 昭

金築 雄
野山 将男

藤田 昌宏
▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2016年12月27日

発行 2017年1月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981
印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

デザイン 多田正治(多田正治アトリエ)

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応するために**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aaaj.or.jp

日本で最も多くの1級建築士を輩出し続けている学校です。

平成24～28年度(過去5年累計)1級建築士設計製図試験 合格者合計19,562名中、当学院受講生10,636名。全国合格者占有率54.4%。
平成28年度1級建築士設計製図試験 全国合格者3,673名中、総合資格学院現役受講生1,957名。全国合格者占有率53.3%。



1級建築士 設計製図試験

全国 ストレート合格者占有率

No.1

平成24～28年度 [過去5年累計]

全国ストレート合格者占有率[学科+製図合格]

58.9%

平成24～28年度全国ストレート合格者8,520名中、当学院受講生5,015名



平成28年度

全国ストレート合格者占有率
[平成28年度 学科+製図合格]

55.1%

平成28年度 全国ストレート合格者1,582名中、当学院現役受講生871名



※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者、過去受講生は一切含まれておりません。※全国ストレート合格者数は、(公財)建築技術教育普及センターの発表に基づき算出。※学科・製図ストレート合格者とは、1級建築士学科試験に合格した同年度の1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。<平成28年12月15日現在>

1級建築士 卒業学校別実績

平成24～28年度の各年度における卒業生合格者20名以上の学校出身合格者合計10,777名中、当学院受講生合計6,605名

合格者占有率 **61.3%**

平成28年度卒業生合格者20名以上の学校出身合格者合計1,891名中、当学院現役受講生合計1,110名

合格者占有率 **58.7%**

[平成28年度 1級建築士設計製図試験卒業生合格者20名以上の全学校一覧]

学校名	合格者数	当学院合格者	当学院受講率
1 日本大学	180	90	50.0%
2 東京理科大学	123	74	60.2%
3 芝浦工業大学	90	51	56.7%
4 早稲田大学	81	56	69.1%
5 近畿大学	69	41	59.4%
6 神戸大学	65	42	64.6%
7 九州大学	61	35	57.4%
7 工学院大学	61	33	54.1%
9 法政大学	57	34	59.6%
10 明治大学	52	34	65.4%
11 京都大学	46	21	45.7%
12 京大工芸繊維大学	44	24	54.5%
13 東京都市大学	42	28	66.7%
14 関西大学	41	28	68.3%
15 東京大学	40	14	35.0%
15 大阪工業大学	40	22	55.0%

学校名	合格者数	当学院合格者	当学院受講率
17 東海大学	38	26	68.4%
18 横浜国立大学	37	21	56.8%
19 名古屋工業大学	36	23	63.9%
19 東京電機大学	36	12	33.3%
21 北海道大学	34	21	61.8%
21 東京工業大学	34	25	73.5%
21 名城大学	34	23	67.6%
21 千葉大学	34	23	67.6%
25 首都大学東京	32	19	59.4%
26 金沢工業大学	31	15	48.4%
26 神奈川大学	31	16	51.6%
26 東北大学	31	20	64.5%
29 東洋大学	29	16	55.2%
29 広島大学	29	24	82.8%
31 広島工業大学	28	17	60.7%
32 鹿児島大学	27	17	63.0%

学校名	合格者数	当学院合格者	当学院受講率
33 前橋工科大学	26	18	69.2%
34 愛知工業大学	25	17	68.0%
34 大阪市立大学	25	13	52.0%
36 中央工学校	24	15	62.5%
36 千葉工業大学	24	13	54.2%
36 名古屋大学	24	13	54.2%
39 熊本大学	23	16	69.6%
39 摂南大学	23	13	56.5%
39 大阪大学	23	11	47.8%
42 福井大学	21	11	52.4%
43 室蘭工業大学	20	13	65.0%
43 福岡大学	20	12	60.0%

※各都道府県合格者数・卒業学校別合格者数は、試験実施機関である(公財)建築技術教育普及センターの発表によるものです。※総合資格学院の合格者数には、「2級建築士」等を受験資格として申し込まれた方も含まれている可能性があります。<平成28年12月15日現在>

法定講習

法定講習サイト

検索

hotei.shikaku.co.jp

一級・二級建築士定期講習 / 管理建築士講習 / 監理技術者講習 / 第一種電気工事士定期講習 / 宅建登録講習 / 宅建登録実務講習

平成29・30年度 受講生募集中 無料体験入校実施中!

お気軽にお問い合わせください

1級・2級 建築士	構造・設備設計 1級建築士	1級・2級建築 施工管理技士	1級・2級土木 施工管理技士
建築設備士	1級管工事 施工管理技士	宅地建物取引士	インテリア コーディネーター



総合資格学院



おかげさまで「1級建築士合格者数日本一」を達成し続けています。これからも有資格者の育成を通じて、業界の発展に貢献して参ります。

総合資格学院 学院長 岸 隆司



スクールサイト

www.shikaku.co.jp

総合資格

検索

コーポレートサイト

www.sogoshikaku.co.jp

Facebook 「総合資格 fb」で検索!

東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル22F TEL. 03-3340-2810